

東北歴史博物館 研究紀要

[論 文]

後藤 勝彦・相原 淳一

宮城県石巻市南境貝塚出土の「船」を描いた線刻礫について	
—宮城県教育委員会1969『埋蔵文化財第4次緊急調査概報	
—南境貝塚—』資料の検討—	1

相原 淳一 宮城県気仙沼市前浜貝塚土壙墓の再検討	
—特に、埋葬人骨と犬骨の関係について—	19

柳澤 和明 国府多賀城の祭祀	29
----------------	----

[報 告]

及川 宏幸

宮城県のタナバタウマ	
—体験教室を通してタナバタウマの製作技術を記録し伝承する—	55

はじめに

この度、東北歴史博物館研究紀要12を発刊することになりました。

当博物館は、宮城県を中心にながらも、東北地方全体の歴史・文化に関わる資料の収集と保存、研究に努めています。また、その成果を広く発信することにより、社会との交流を促進し、国際化時代にふさわしい地域づくりと地域活性化に貢献することを使命としています。

本紀要是、職員の地道な研究活動の一端を発表するものです。今回は考古学の論文三編、民俗の報告一編を掲載しています。相原と当館の旧職員である後藤勝彦氏との論文は、石巻市南境貝塚から出土した「船」が描かれた線刻彫が縄文時代中期のもので、船はその特徴から帆柱を持つ準構造船と考えました。さらに、同貝塚からは南海産貝類や多数の雞頭話が出土していることから、こうした船を用いて遠隔地との交易や外洋性漁業が行われた可能性にも言及しています。

もう一本の相原論文は、気仙沼市前浜貝塚の土壙墓に関するもので、当館では発掘調査時の成果を参考にして人と犬の埋葬に関するイラストパネルを掲示しています。再検討の結果、人と犬の合葬例であるのか、両者の埋葬に時間差が存在したのかについては判断が難しいこと、現時点では埋葬者の死因が出産事故と特定できないことを指摘しました。

柳澤論文は、多賀城跡周辺から出土した祭祀関連遺物や遺構を集成し、祭祀が8世紀末頃の城内実務官衙の整備と城外方格地割の形成を契機として具現化すること、9世紀後半以降は希薄となること、国家的祭祀のはか民間の在地祭祀の様相も色濃く認められることなどを指摘して、陸奥国府多賀城における祭祀の特徴を明らかにしています。

及川報告は、平成14年から22年の間に5回実施された当館教育普及事業の一つである体験教室「タナバタウマを作ろう」のレジュメをまとめたものです。現在、こうした伝承技術は急速な勢いで消滅しつつあります。本報告が製作工程の記録保存にとどまらず、体験教室での実習と併せて、市民の皆さんへ伝承技術が広まるきっかけになれば幸いです。

今後とも一層の研鑽に努めてまいりますので、忌憚のない御批判や御意見をいただければ幸いです。

平成23年3月25日

東北歴史博物館長 小林伸一

宮城県石巻市南境貝塚出土の「船」を描いた線刻縹について 宮城県教育委員会1969『埋蔵文化財第4次緊急調査概報—南境貝塚—』資料の検討

後藤 勝彦(元東北歴史資料館・元宮城県多賀城跡調査研究所)
相原 淳一(東北歴史博物館)

-
- I はじめに
 - II 南境貝塚の位置
 - III 線刻縹の出土地点と層位
 - IV 出土した線刻縹
 - V 考察
-

- VI おわりに
 - 謝辞
 - 参考 南境貝塚の研究史
 - 註
 - 引用・参考文献
-

I はじめに

南境貝塚は1913(大正2)年に石巻の遠藤源七・毛利総七郎によって発掘調査が行われるなど、古くから著名な大規模貝塚である。研究史の概略は文末の「参考 南境貝塚の研究史」とおりである。今回ここに報告する資料は、1968(昭和43)年の宮城県教育委員会による第4次緊急調査において出土したものである。

1966(昭和41)年8月9日、県教育委員会の文化財担当者から「石巻市南境貝塚が破壊されているので、状態を見てきてほしい。」との要請が後藤にあり、県の担当者とともに調査に出かけた。

遺跡は県道新設や北上川の害復旧のための河川改修の土取り工事で、貝塚の北側先端部5m程の貝層が残存するに過ぎないまでになっていた。現場では楠本政助氏らによって遺物の収集がなされていた^[1]。

当時は県に発掘調査の体制がなく、民間の研究者に頼まなければならなかった。早速、同年8月27日～31日の計画で緊急に予算が計上され、第1次調査が実施された。しかし、予定の日程では終了できず、9月の追加調査でかろうじて終了した。その後、土地所有者からは県道東側の開田計画が提示され、県も事前調査を前提として開田を容認し、第1次調査に関わった後藤が引き続き調査を担当せざるを得ない状況となった。しかも、東北大学の伊東信雄教授

からは「南境貝塚は遠藤・毛利さんの古戦場だよ」という一言で安易に調査を引き受け、結果的には1968(昭和43)年までの3年間で5回の発掘調査を行い、膨大な遺物を抱え込むことになった。

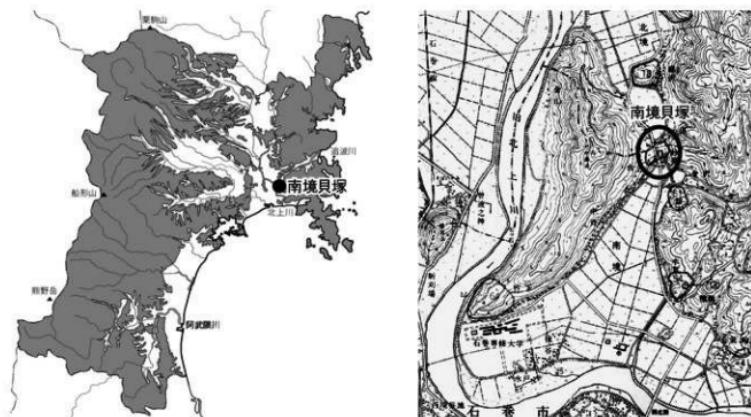
1968年3月刊行の宮城県文化財調査報告書第15集『埋蔵文化財第三次緊急発掘調査報告書—南境貝塚—』、1969年3月刊行の宮城県文化財調査報告書第20集『埋蔵文化財第四次緊急調査概報—南境貝塚—』の2冊が存在する。

本報告書刊行に向けて、調査担当者の後藤勝彦は、現在も遺物の分析・検討を進めている。本論もその一部をなすものである。

今回、ここに報告する線刻縹は一連の遺物精査の中で再発見されたものである。調査日誌の照合から、当時、調査スタッフの中でも明確に線刻縹と認識され、出土状況の写真も撮影されていた。

II 南境貝塚の位置

貝塚は北上川下流の追波から開削された新北上川下流域で古石巻湾東側に位置する(第1図)。東の龍峰山と西の南境金山をつなぐ標高10～20mの丘陵鞍部に立地している。遺跡は東西150m、南北60mの広がりを持ち、斜面一帯に貝層が分布している。遺跡は绳文時代早期後葉に始まり、貝層は绳文時代中期後葉から形成され始めている。



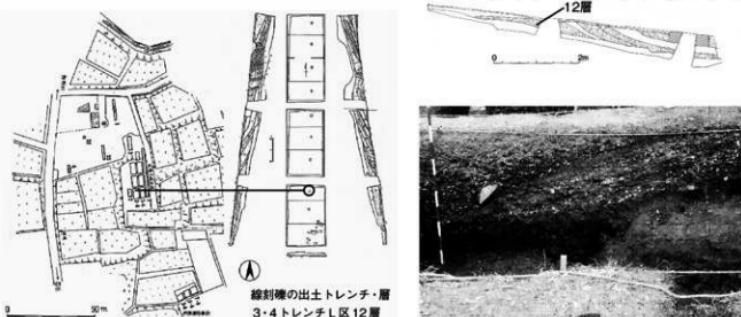
第1図 南境貝塚の位置

III 線刻縄の出土地点と層位

(1)出土状況

線刻縄は、昭和43年第4次調査の3・4トレンチL区の12層から出土（第2図）した。3・4トレンチJKLは3.5m×5.5mの一続きのトレンチで、東西に隣接して5・6トレンチJKLと2トレンチJKとがあり、3・4トレンチの中ではJKL区は、丘陵鞍部の高い側に位置している。

概報では、第12層はA層（褐色土層）・B層（ハマグリ貝層）に細別されている。「第12層は7トレンチほど純貝ではないが、混土状の貝層であり、大木9式の包含層である。」この第12層Bとされたハマグリ貝層が南境貝塚では最も古い貝層で、旧表土の黒土層を覆いながら、他のトレンチにも広がっている。貝層に包含されている土器は「大木9式」である。



第2図 線刻縄の出土トレンチ・層

(2)出土状況の検討に際して

今回、ここに報告する線刻蹟は宮城県文化財調査報告書第20集においては、「(ハ)彫刻ある石 長軸6.7cm、短軸4.2cmの自然石の片面が平坦になっており、そこに線刻によって彫刻がなされている。おそらく、舟と考えられる。」(35頁)とされたものである。遺物の整理期間が極めて短く、その検討に要する時間すら充分に確保されていなかったことも斟酌されなければならないものの、遺物の出土状況の写真や遺物実測図・写真等は一切、掲載されることはなく、単に出土の事実を伝えているのみであった。

今回、改めて報告するにあたり、可能な限りの詳細な検討をここに行う。

(3)調査要項の確認

宮城県文化財調査報告書第20集概報中に、調査要項が掲載されており、当時の調査体制が記されている。

調査者 宮城県教育委員会

調査担当者

宮城県塙釜女子高等学校教諭日本考古学協会員

後藤勝彦

伊具郡大内小学校教諭日本考古学協会員

斎藤良治

調査員

早稲田大学講師(自然遺物担当)日本考古学協会員

金子浩昌

白石市立小原小学校教諭

後藤利喜郎

塙釜市立第二中学校教諭

今泉武男

石巻市立渡波中学校教諭

木村敏郎

宮城県田尻高等学校教諭

平沢英二郎

宮城教育大学附属小学校教諭

横 要照

塙釜市立第一小学校教諭

佐藤達夫

宮城県志津川高等学校教諭

芳賀良光

宮城郡七ヶ浜中学校教諭

丹治英一

調査補助者

宮城教育大学考古学研究会会員

福島大学考古学研究会会員

明治大学学生、東北学院大学学生、山形大学学生

塙釜女子高等学校社会部員

志津川高等学校社会部員

石巻女子高等学校・石巻市立女子高等学校生徒

前年の8月に行われた第3次調査の調査要領と比較して、斎藤良治氏が日本考古学協会の協会員となり、調査担当者として後藤と名を連ねていること、佐藤達夫・丹治英一の両氏と自然遺物担当として金子浩昌氏が新たに加わったこと、宮城教育大学日本史研究部から同考古学研究会の参加に変わっていることを確かめることができる。

(4)線刻蹟の出土日・関係者の特定

「遺跡調査日誌」(第3図)の昭和43年8月16日に「線刻蹟」の出土が明記されていた。L区12層からの出土が日誌(A)には記録されている。同日の日誌(B)には記録がない。当日の調査員は佐藤達夫・平沢英二郎、調査補助員が阿部(恵)、村山、鈴木(惣)、丹羽、小沢、佐藤(真)、西城、作業員3人であったことが確認される。L区の12層は、この日に12a層と12b層に分離されたことが日誌(B)には記録されているが、線刻蹟が細別層位のどちらから出土したのかは記載がない。

(5)線刻蹟の出土状況

線刻蹟の出土状況はカラー(リバーサル)・モノクロ35mmフィルムの両方で撮影されていた。第4図はカラー写真で撮影されたものである。線刻蹟は半ば濡れた状態で撮影されており、水洗された後に置き直して撮影されたものと推認される。水洗前の状態を示す写真はない。他の骨角器などの写真も同様の処理が施されてから撮影されているようであり、線刻蹟に限った処理ではなかったようである。

特に注目されるのは、線刻蹟の線刻内部に貝殻の微小片や暗褐色土が詰まった状態で撮影されていることであり、撮影前の水洗がごく簡略に行われたものに過ぎないことが写真から判読される。

線刻蹟の上には竹串が刺さっており、線刻蹟の出土位置がトレント壁の近くであったことがわかる。後述するガジリと見られる大きなキズはトレント壁側ではなく、折尺側についており、この時点ですでに写真に写っている。

卷之三

第2回 遺跡調査日誌

高教出版社



第4圖 繪刻碑出土狀況

また、竹串を境にして上部が貝殻の細片や微小片を含む暗褐色土層、下部が大きな貝殻が横位に寝た状態の混土地層となっていることが写真から確認される。線刻縄の周囲の混土地層には、木炭粒や焼土粒も観察される。日誌(B)には、線刻縄発見の8月16日に12a層:褐色土層と12b層:ハマグリ主体の混土地層に分離されたとあり、竹串を境にして層相が異なる状況と一致している。写真および日誌(B)の状況を総合すると、線刻縄は12b層上面で検出されており、線刻縄自体のネーミングは「12層」としか記載されていないものの、線刻縄はいわゆる「層中」の遺物ではなく、「面」の遺物であることがわかる。

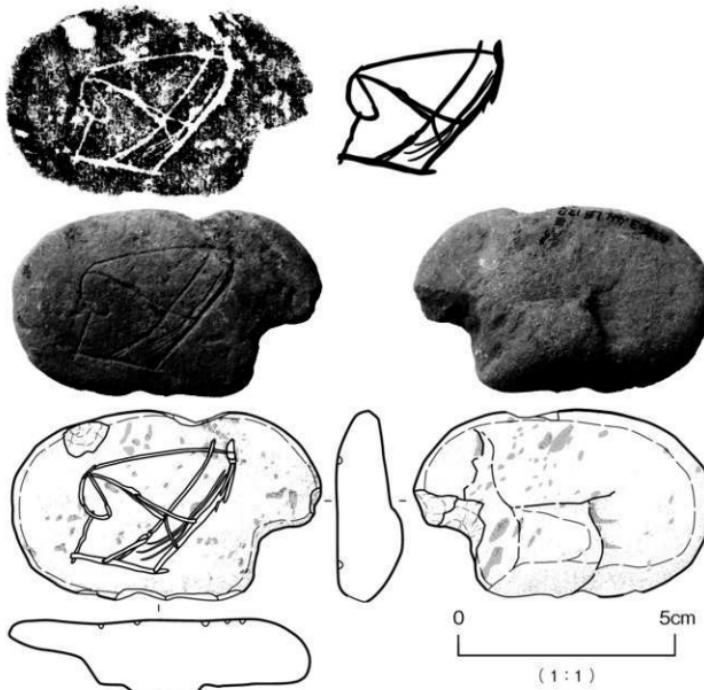
る。

IV 出土した線刻縄

(1) 線刻縄の観察(第5図)

楕円形で扁平な亜円縄(転石)を素材としている。砂岩製で、法量は長さ6.9cm、幅4.2cm、再大厚1.6cm、重量は58gである。キズA(第6図)の縁辺に認められた掲鉄鉋は他の部分には付着していない。片面が平坦に擦り出され、線刻が施されている。背面は自然面のままとしている。

側縁部や端部は不明瞭ながら面取りの施された痕



第5図 南境貝塚出土の線刻縄

跡が残されている。線刻面の側縁からの小さな剥離及び、端部の剥離はパティナの違いは認められず、第4図の出土状況写真においても確認されることから、古い剥離面と考えられる。特に自然面側に大きく打ち欠かれた剥離面縁辺は擦れており、人為的に擦り出されたか、自然に磨滅したかのいずれかである。線刻内部には若干の土が残っている箇所(第7図参照)がある。線刻は断面U字状を呈し、線刻底面には土がこびりつき、全体に風化も進んでおり、凸凹している^(注2)。線刻の一部は押し引き状を呈している箇所もある。第4図の出土状況写真で確認された貝殻の微小片はすでに残っておらず、確認できなかった。

(2) 線刻礫現況の観察(第6図)

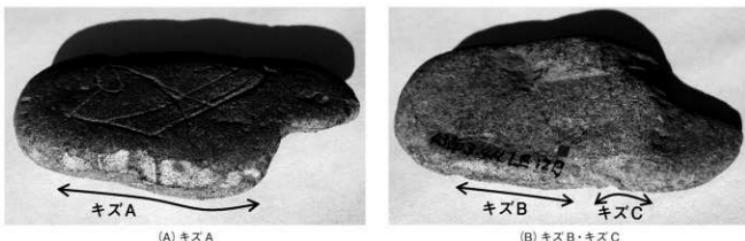
線刻礫は上面ガラス製の蓋のついたプラスチック小ケース(長さ8.1cm・幅5.8cm・高さ3.9cm)の中に、底面には脱脂綿が敷かれ、ティッシュに包まれた状態で後藤のもとで保管されていた。全体的に不明瞭ながら凸部はややスレた感じを呈しており、手ズレ他の接触に起因するものと思われる。ごく浅い白色キズも複数に見られ、これらも発掘後に受けた引っ搔きキズらしく、最初から厳重に保管してきたものではないらしい。大きなキズは側縁部に以下の

A～Cの3つがある。

【キズA】 第6図(A) 側縁部に断続的についている大きなキズで、キズの截断面は新鮮で暗緑色を帯びた灰白色を呈し、截断面縁辺には褐鉄鉱が付着している。第4図写真的手前側に写っているキズで、発掘調査時の移植ゴテによるガジリと見られる。

【キズB】 第6図(B) キズAの反対側の側縁部に長さ約18mm、最大幅3mmで削がれたような形状でついている。ネーミングの文字が一部重なっており、少なくともネーミング以前についたキズである。截断面の状態はキズAとはほぼ同程度の新鮮さで、暗緑色を帯びた灰白色を呈している。截断面に褐鉄鉱は付着していない。キズAの反対側であり、このキズもガジリによるものとは考え難いが、金属製の利器でさっと削ぎ取られたような様相を呈している。第4図出土状況写真では確かめられず、成因は明らかではない。

【キズC】 第6図(B) ちょうどの石材の裸に粗粒な石の目が走っている部分についている長さ12mm、幅8mm程の欠損部である。キズA・Bほど新鮮な截断面ではなく、全体にやや褐色を帯び、面自体が凸凹で土が付着している。褐鉄鉱は付着していない。第4図出土状況写真にも明瞭に写っており、何らかの外力によってついたキズと考えられる。



第6図 線刻礫のキズ

(3) 線刻画の検討

線刻画は報告当初から指摘されているとおり「船」と見られる(宮城県教育委員会1969)。2010年の日本考古学協会第76回研究発表会における筆者らの「船」とする見解(後藤・相原2010)に対しても、特に

異論はなく、ここでは「船」としてその特徴を以下に記す。

線刻画の大きさは長さ4.3cm、高さ2.6cmである。線刻画の「船」は船底が平坦に、舷側船縁りは湾曲を持って描かれている。船首は直線で船底と斜行する



第7図 「船」の描かれた線刻蹟

形で表現され、船尾には太く短い線刻が施されている。帆柱は船首寄りに逆Y字状に描かれ、船首と船尾から帆柱頂部に向かって帆網と見られる線刻が伸びている。帆柱頂部には円弧状をなす曲線で、帆布が船首側に表現されている。舷側の船首寄りには、弧状をなす3条のごく浅い線刻で文様が施されている。

(4)「船」線刻画の真偽の検討について

線刻画の偽造について検討した春成(春成2003)は、偽造品の特徴として①線刻の新鮮さとともに、②偽刻にはモデルとなる原作があることを指摘している。南境貝塚線刻蹟の発掘調査時の出土状況写真では、線刻内部に貝殻の微小片や暗褐色土が詰まっている、線刻底面には土がこびりつき、全体に風化も進んでおり、新しいキズ等とは明瞭に区別された。

ここでは、念のために線刻蹟出土の1968(昭和43)年当時すでに明らかにされていた「船」の画につ

いて、原作となり得るようなモデルが存在するか否かについて検討する。

例1 福井県坂井市春江町井向1号銅鐸

1868年に発見された流水文銅鐸で、船文がある唯一の銅鐸(末房2001)である。図は船団中の1艘で、船首も船尾も急角度で立ち上がり、間をつなぐ船体はほぼ水平に表現されている。左右両側の櫂が多数描かれ、こうした絵画はその後発見された弥生土器にも見られる(佐原1993)。描かれている船の構造は古墳時代へと引き継がれたものと見られ、これらは中国南方世界とも無縁ではないとされている(末房2001)。



第8図 井向1号銅鐸(佐原1993)

例2 装飾古墳壁画

装飾古墳の壁画に彩色あるいは線刻によって船が表現されるものは多く、地域的にも広汎な分布が確認されている。1965年に刊行された『日本原始美術5 古墳壁画』(斎藤1965)には、第9図のように多くの船が集成されている。井向1号銅鐸の系譜を引くと見られる船首と船尾が急角度で立ち上がるもののほかに、近世和船の帆かけ舟に類する画も見られ、こうしたものについては後世の追刻や截刻の可能性がすでに指摘されている⁽³⁾。

これらの中にも南境貝塚線刻縦に見られる帆柱頂部に円弧状の表現を施したものはない。



第9図 船の古墳壁画(斎藤1965)

例3 北海道根室市弁天島貝塚

八幡一郎が1943年に集成した線刻画の施された鳥管骨製針入(オホーツク文化期)である。北溝保男採集による資料である。クジラ、船、人の組み合わせによってクジラ漁の様子が表現されている。クジラには2本の鰓が突き刺さっており、クジラと船は索縄でつながっている。櫛が4本見えることから、中型以上の船と見られる。帆柱の表現はない。



第10図 弁天島貝塚針入(八幡1943)

例4 樺太スヤ貝塚

八幡一郎が1943年に集成した線刻画の施された鳥管骨製針入(オホーツク文化期)である。明治40年7月に坪井正五郎がスヤ貝塚を発掘調査した際に出土したものである。弁天島貝塚同様のクジラ、船、ヒトの組み合わせで描かれており、様式化した文様意匠となっていることがわかる。



第11図 スヤ貝塚針入(八幡1943)

例5 北海道余市町フゴッペ洞窟

1950年に高等学校郷土研究部によって発見され、1951年に第1次発掘調査、1952年に第2次発掘調査が行われている。1953年には国の史跡指定を受け、報告書が1970年に刊行されている。

乗員8~10名の大型船の画と見られ、シベリアをはじめとする北東アジアの岩面画遺跡に類似が見出される。ヒトと船の表現は、弁天島貝塚やスヤ貝塚の骨製針入とも類似している。洞窟壁画が製作された時期は統繩文時代の後北C2・D式を中心とする1世紀~4世紀と考えられている(小川編2003)。



第12図 フゴッペ洞窟岩面刻画(小川編2003)

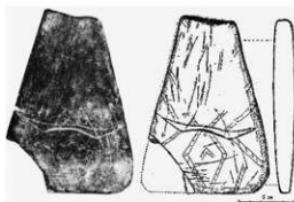
例6 北海道函館市春日町遺跡

1950年北海道大学理学部地質学教室窪田薰によつて春日町遺跡断面から土器とともに発見(窪田1951)され、児玉作左衛門・大場利夫によって考古学的な検討(児玉・大場1954)が加えられた。

繩文時代前期前葉春日町式(第二群A-C)土器に伴出する凝灰質灰泥岩製線刻縦である。中央の強

い刻線が舟を表し、周囲に放射状に広がる梯子状刻線が網を表すと解された。「舟は丸木舟でないよう感じます。」(児玉・大場1954)と、準構造船の可能性が示唆された。

「舟」の縦刻縛としては、南境貝塚例に先行する唯一の例であり、重要な資料である。違いとしては南境貝塚例のように帆柱に関わる表現がないこと、縦刻の画が縛の中に左右対称的に表現されていることがあげられよう。



(窪田1951・児玉・大場1954から作成)
第13図 春日町遺跡縦刻縛

小結 以上、南境貝塚の縦刻縛が発掘された1968年以前の船の画を検討してきた。南境貝塚縦刻縛に見られるような船体の表現、あるいは帆柱上部の円弧状の表現はいずれにも見出することはできなかった。このことは南境貝塚縦刻縛の船の画が、他の原作をモデルにして偽刻されたものではないことを示しているものと考えられよう。

V 考察

(1)年代について

縦刻縛出土の3・4トレンチ出土土器の整理は現在未了となっており、伴出土器の詳細は不明である。当時の調査日誌によれば、伴出土器は「大木10式主体」とされている。出土状況の写真の検討では、縦刻縛の出土は12b層(ハマグリ貝層)上面と見られ、12b層中からは「大木9式土器」の出土が報告書には記載されている。現状では3・4トレンチの12b層上面の出土土器の詳細な検討は将来に委ねるはかないものの、縦刻縛は概ね大木9式～大木10式の年代幅の中に収まるものとして捉えられる。

参考までに、同じ石巻市内の山居遺跡のAMS年代測定では、大木10式:calBP4520、大木9式:calBP4820の数値が得られている(宮城県教育委員会2007)。

(2)縦刻縛の類例について(第14図)

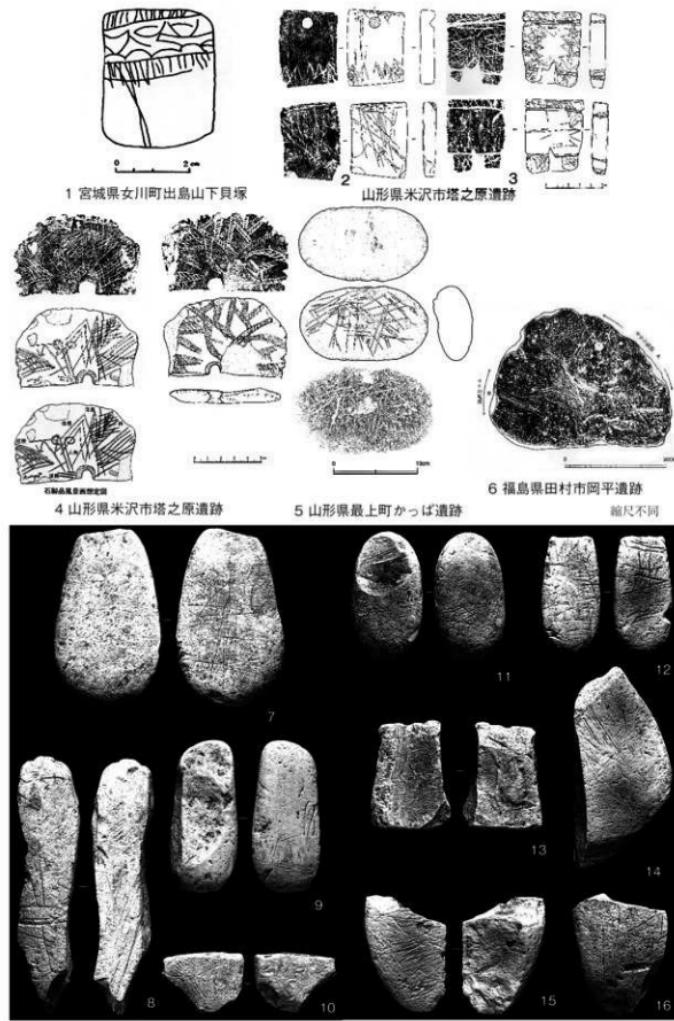
前章までの検討において、南境貝塚縦刻縛は偽刻されたものではなく、真正の資料と考えられた。ここでは、東北地方南部3県の縦刻縛出土例³⁴⁾の検討を通して、縦刻縛としての特徴について考察する。なお、偽刻の可能性も否定できない表面採集品や歴史自体が不明の資料に関しては、検討から除外する。宮城県・宮城県内における縦刻縛出土例は女川町出島山下貝塚(辺見1973)において確認される。

出島山下貝塚Ⅳトレンチから出土した縦刻縛(第14図1)は、縄文時代後期堀之内式並行とされるものである。滑石製で、法量は長さ3.8cm、幅3.2cm、厚さ0.5cmである。全面研磨によって整えられ、一辺はや丸みを持つカマボコ形を呈している。「縦刻縛は何を表しているのかは不明」とされた。山形県 山形県内では、米沢市塔之原遺跡(米沢市教育委員会1994、佐原・春成1997・米沢市上杉博物館2002)・最上町かっぱ遺跡(山形県埋蔵文化財センター2003)において確認される。

塔ノ原遺跡からは3点の縦刻縛が出土している。いずれも前期中葉のもので、2点(2・3)は矩形状、1点(4)は有孔円盤状を呈している。4には堅穴住居や人、犬などの集落の様子が表現されているものと解されている。背面には梯子状沈刻が放射状に施されており、北海道春日町遺跡の縦刻縛と類似している。

かっぱ遺跡の縦刻縛(5)は旧河道SG21の1層から出土している。旧河道SG21からは縄文時代中期中葉～後期中葉の土器が多く出土している。安山岩製の磨石・凹石兼用の礫石器の片面に線刻は施されている。直交および斜方向の直線が多数刻まれ、獨立柱建物を表現したものとされた。

福島県 福島県における縦刻縛は大竹憲治の集成(大竹2001)によれば田村市岡平遺跡、江ノ上A遺跡・同江ノ上B遺跡、郡山市山の神遺跡で出土して



いる。このうち岡平遺跡線刻縹(6)は6号住居(縄文中期)の炉石に用いられたものである。サケが描かれたものとされている。他の資料については後世の偽刻(春成2003)ないしはキズの可能性が強く、ここでは扱わない。

いわき市薄磯貝塚(いわき市教育委員会1988)からは、縄文時代晩期を主とする石製タブレットB群(岩版～線刻縹を総称)が多数出土している。このうち7～16に図示したものは、非対称性の線刻の施されているものである。線刻の種類は多様で具体的に何を表現しているかは不明である⁽³⁾。軟質の円錐～亜円錐を用いて製作され、「打ち欠きや打ち割りなどが、意図的に行われた変形行為」が行われているものがほとんどを占めている。また、打ち欠き・打ち割りの敲打痕跡はやや磨滅しているものが多く、そのまま地表に廃棄されていたものらしく、こうした特徴も南境貝塚線刻縹と共通する特徴となっている。

小結 東北地方南部では、線刻縹の出土例は稀少で、形状は矩形状・有孔円盤状ほかと変異に富んでいる。福島県いわき市薄磯貝塚例は、岩版～線刻縹の中間形も含め石製タブレットB類が多数出土しており、遺跡の種類によっては集中するものらしい。

南境貝塚線刻縹のような軟質の材料や破損の状況、その後のスレは薄磯貝塚例に類似している。

線刻縹の画は何が表現されているのか不明なものが多い。具象とされるものに、住居や建物の建造物、サケやカニ等の漁撈対象がある。

(3) 線刻縹に描かれた船の特徴

南境貝塚線刻縹に描かれた船の画(第7図)から考えられる船の特徴は、以下のとおりである。

船体 船底は強い直線ではなく水平に表現され、舷側船べりは湾曲を持って描かれている。船首と船尾は全く異なる形で描き分けられ、船首先端には舳先が表現されている。こうした点から、丸木舟とは考えられず、船材を合わせて造った準構造船と考えられる。

また、船体下部に表現されている弧状をなす3条のごく浅い線刻が波溝や喫水線を表すもの⁽⁴⁾であ

れば、喫水線からある程度の高さを持つ船と言えよう。

帆柱 船体の中央、やや船首寄りには逆Y字状に帆柱が表現されており、帆柱は基部においては2本である可能性がある。帆柱頂部には円弧状をなす曲線が船首側に描かれており、風をはらんだ帆布を表現しているものと推測される。船尾側からの帆綱は帆柱先端に、船首先端の舳先から帆布に向かって帆綱が伸びる構造となっている。

(4) 線刻縹に描かれた船の検討

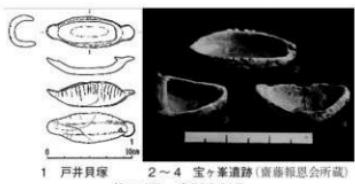
南境貝塚線刻縹に描かれた船は、帆柱を持つ準構造船と考えられた。舟の線刻縹としては唯一の類例である縄文時代前期の北海道春日町遺跡の線刻縹には、準構造船の可能性はあるものの、帆柱を伴うものではなかった。ここでは、もう少し検討の範囲を広げて、線刻縹に描かれた船について考えてみたい。舟形土製品からの検討 舟を模したものとして舟形土製品が全国で30例以上知られている。このうち、縄文時代の資料としては、北海道函館市サイベ沢遺跡(中期)、同市戸井貝塚(後期・戸井町教育委員会1994)・同市石倉貝塚(後期・函館市教育委員会1999)2点、千歳市キウス4遺跡(後期・北海道立埋蔵文化財センター2008)、帯広市晩遺跡(晩期・帯広市教育委員会1999)、青森県南部町青鹿長根遺跡(晩期?・八戸市博物館1992)・宮城県石巻市宝ヶ峯遺跡(後期～晩期・斎藤報恩会1991)3点がある。その他、舟形石製品の例として、北海道木古内町釜谷遺跡(前期・木古内町教育委員会1999)がある。また、舟形木製品(容器)として北海道千歳市キウス5遺跡(後期・北海道埋蔵文化財センター1997b)・石狩市石狩紅葉山49号遺跡(中～後期:石狩市教育委員会2005)2点・恵庭市柏木川4遺跡(後期・北海道埋蔵文化財センター2010)がある。

このうち、ここでは戸井貝塚と宝ヶ峯遺跡の舟形土製品について概観(第15図)する。

戸井貝塚 舟形土製品(1)は遺物包含層V層から出土しており、後期前葉のものである。長さ10.3cm、幅3.5cm、高さ3.0cmである。その形状や側面及び底面の沈線の様子から、準構造船や樹皮舟の可能性が

指摘されている(戸井町教育委員会1994・北海道立埋蔵文化財センター2008)。

宝ヶ峯遺跡 舟形土製品は3点報告されている。うち、1点(3)は現在所在不明で写真のみが残されている。4は船べりが湾曲して表現され、船首と船尾が明瞭に作り分けられている。船梁(齊藤報恩会1991)も持っており、準構造船の可能性があろう。



第15図 舟形土製品

以上、舟形土製品の検討からも、縄文時代の舟が丸木舟に留まらない可能性が指摘されている。ただし、帆柱に関わる表現の施されたものはない。

近世画からの検討 「蝦夷生計図説」(1823)に描かれている近世アイヌの板縦船(イタオマチブ)に南境貝塚線刻図中の帆柱の表現に類似した様相が見られる。板縦船とは、船底に丸木舟を用い、舷側に羽板を縄などで縫り合わせて、嵩上げした準構造船のことである。船の両舷に立てた手持ちの2本の帆柱に、席帆を横に張って帆走するので、和船のような帆桁はない^[37]。南境貝塚線刻図中の帆柱頂部の円弧状の曲線は、少なくとも帆桁を表現したものとは考えられず、こうした席帆の類を表していると考えられよう。線刻図の帆柱基部は逆「Y」字状の表現となっており、蝦夷船同様の二本の帆柱を表現している可能性も考えられよう。



第16図 「蝦夷生計図説」(1823)

板縦船の出土 北海道千歳市美々8遺跡(北海道立埋蔵文化財センター1997)や札幌市K30遺跡(札幌市教育委員会2001)、千歳市ユカンボシC15遺跡(北海道埋蔵文化財センター1998・2000・2001・2002)からは実際に板縦船が出土している。特にユカンボシC15遺跡ではI B4層から確実な板縦船用の角孔を持つ帆敷が出土しており、I B4層が白頭山－苦小牧火山灰(B-Tm)との関係で10世紀以前の統繩文～擦文時代に確実にさかのほることは重要であろう。

小結 舟形土製品の検討においても、準構造船の可能性のある資料を見出すことはできたが、帆柱に関わる表現を見出すことはできなかった。一方、アイヌの板縦船の帆柱には帆桁を伴わず、2本の帆柱間の席帆を張る構造は、南境貝塚線刻図の帆柱の表現に通じるものがあろう。ただし、縄文時代まで遡る板縦船は未発見である。

(5)南境貝塚における外洋航海の可能性

南境貝塚では、外洋航海の結果もたらされた可能性のある資料として南海産貝類と、外洋性漁業の中で発達した離頭鰓が多数出土している。これらは船の発達や航海・漁撈技術の向上と無関係とは考えられず、線刻図に描かれた「帆柱を備えた準構造船」の意味について考えてみたい。

交易 南境貝塚では、南海産貝類のハチジョウタカラガイ^[38]、タカラガイ・オオツナノハ・ベンケイガイ・アマオブネ・カサガイ製の遺物が出土している(後藤2008)。こうした南海産貝類が直接、南境貝塚にもたらされたのか、あるいは間接的に「西太平洋



(菅原弘樹氏提供)

第17図 南境貝塚出土の南海産貝類

の遠洋航海者たちのように、威信財を求めて島から島へ、浜から浜への壮大な交換の体系(Malinowski 1922)の中に位置づけられるのかは、今後の検討を待たなければならない^(註5)。

また、縄文時代前期ながら北海道白老町虎杖浜2遺跡(白老町教育委員会 1978)、伊達市北黄金2遺跡(青野 2003)ほかから大木3式土器や東京都八丈島倉輪遺跡(東京都八丈町教育委員会 1987)から大木6式土器が出土している。宮城県七ヶ浜町大木開貝塚では、浮島式土器、諸磯式土器、興津式土器が出土(七ヶ浜町教育委員会 1979)しており、特に縄文時代前期段階では仙台湾と東関東方面との関連を指摘することができよう。また、大木開貝塚B地点では縄文時代中期後葉の大木9式土器とともに曾利式土器が出土(早瀬ほか 2006)している。前期以降の交易路を考えるのであれば、三浦・伊豆半島―伊豆諸島方面の曾利式土器(山形 1996・1997)の搬入が最も有力であろう。

以上、仙台湾域と渡島半島、関東地方半島・島嶼部との交流を示す遺物について概観した。こうした遠隔地との地域間交流には、外洋航海に耐え得る船の存在が必須の要件と考えられよう。

漁撈 南境貝塚では多くの漁撈具が出土しており、遠藤源七・毛利総七郎以来の研究の蓄積をもつている。なかでも、外洋性漁業の中で発達した離頭鉗に関係する楠本政助の一連の研究は、現在でも高く評価されている。紙幅の関係上、これらの詳細な検討は機会を改めたいが、ここではその捕獲対象について若干の予察を示しておく。

離頭鉗の捕獲対象については、マグロ類、海獣類、イルカ類・クジラ類、カジキ類の4類が、民族・民俗例からも確認される。宮城県内の貝塚でのこれらの実際の出土例と離頭鉗との関係をまとめたのが、第1表である。調査体制や発掘精度、同定者によって、魚骨やクジラ類・イルカ類あるいは海獣類の骨の同定には著しい開きがあり、第1表をそのまま離頭鉗とその捕獲対象との相関関係として受け留めることはできないが、一つの傾向性は明らかに示しており、以下に検討する。

<マグロ類> マグロ類出土50遺跡中、離頭鉗が出

土している遺跡は20遺跡(40%)と決して高い相間を示すものではない。マグロ類の骨の出土頻度と離頭鉗の点数を比べてみても、明らかに離頭鉗の数は不足している。暖流系回遊魚のマグロ類と燕形離頭鉗との関係を最初に指摘したのは1960年に江坂輝彌が日本考古学協会で行った講演「縄文時代における漁撈技術における変遷」であった。江坂は縄文晚期の大洞貝塚等で海獣骨がほとんど出土せず、マグロ類の出土が顕著であることから、この両者を関連付けた。大洞貝塚では、離頭鉗の対象となりうるクジラ類・イルカ類が出土(江坂 1956)しているものの、ここでは検討対象とはされなかった。マグロ類の捕獲は現在、釣漁(一本釣り・曳繩・延繩)、網漁(流し網・巻き網・定置網)、船漁(突きん棒漁)によって行われている。突きん棒漁には「船首を鶴のように3、4メートル延ばし、ここに鉗打ち人が立つ」(千葉県千倉船团の例: 高田はか 1991) やや特異な構造の船によって行われていた。マグロ類を突きん棒漁で捕獲するためには、船の喫水線からの高さが必要で、丸木舟からの鉗打ちは事実上困難であろう。

また、現在最古の離頭鉗は縄文時代前期初頭(上川名貝塚・土浮貝塚)であり、少なくとも縄文時代早期(吉田浜貝塚・長根浦貝塚・櫻崎貝塚)においては別の形のマグロ漁を考えざるを得ない。

<海獣類> 海獣類出土16遺跡中、離頭鉗が出土しているのは半数強の10遺跡(63%)で、決してその相間は高いとまでは言えない。

かつて、大洞貝塚の燕形離頭鉗の分析で北方民族の海獣類漁に用いられた鉗頭との類似が指摘(長谷部 1926a)された。大木開貝塚をはじめ、多くの事例を検討した金子浩昌は、本州では巨大骨が少なく小さな個体が多いことから、アシカ等の海獣類を鉗によって捕獲したのではなく、岩上に休むアシカの群の逃げ遅れた小さな雌や幼獣を撲殺したものと推測(金子 1968)している。

このような繁殖地等を急襲する方法がとられるのであれば、小型の丸木舟の方が都合がよく、離頭鉗を必ずしもするものではない。

<イルカ類・クジラ類> 体長3m程度までの小型の歯クジラをイルカ類、それよりも大きな歯クジラ

本表は、渡辺誠 1973「縄文時代の漁獲」、金子昌吾・忍足成規 1986「骨角器の研究」、國文館編Ⅱ・東北歴史資料館 1989「宮城県の貝塚」、山崎京美 1998「遺跡出土の動物遺存体に関する基礎的研究」を底本に、若干の補遺を行ったものである。

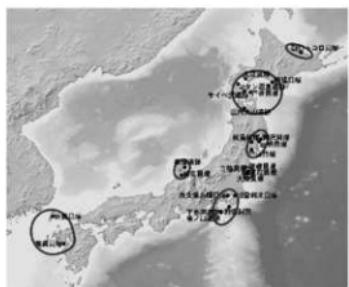
第1表 実は眼中の見幅における難聴傾向と精神科的角との関係

ヒゲクジラを一括してクジラ類と呼称している。イルカ類・クジラ類出土27遺跡中、離頭鈎が出土しているのは14遺跡(52%)、不確実なものも含めて16遺跡(59%)と海獣類とはほぼ同程度の相関を示している。全国のイルカ類・クジラ類を分析した西本豊弘はイルカが大量に出土する遺跡は入江の奥に立地することが多く、鋸先や石礫もほとんど出土しないことから、「イルカを入江の浅瀬に追い込み、素手で捕獲したのであろう」と推測(西本2010)している。マッコウクジラなどの大型クジラは、自然死した個体が漂着した「寄りクジラ」によるものである。イルカと大型クジラの間のゴンドウクジラ類(大きな種はシャチ)は北海道のオホーツク文化では離

頭鉛によって盛んに捕獲され、針入の線刻画(第10・11図・八幡1943)にもなっている。針入れの画が示すように、やはり、鉛打ちをするには高さが必要である。

要で、凡木用からの鉛錠は争天下、不可能である。
カジキ類へ カジキ類出土4遺跡、離頭錠が出土している遺跡は4遺跡で、数字上は100%の高い相関を示している。カジキ類を出土する遺跡自体が極めて稀少であり、全国的にみても、7つの海域25目塚遺跡で確認されるに過ぎない(第18図)。

カジキ類は江戸時代においても網漁や釣漁ではなく、民俗例においてもすべて鉛による捕獲である。繩文時代のカジキ漁もすべて鉛漁と推定(渡辺 1990)されている。三陸沿岸の漁村の漁業習俗の調



(山崎1998から作成)

第18図 カジキ類の出土貝塚・遺跡

査(東北歴史資料館 1984)では、岩手県釜石市箱崎白浜の「ツキン棒漁」について次のように報告している。「大正期、千葉県の漁船がカジキマグロを追ってこの海域に来船するようになり、赤浜の漁師にその漁法が伝えられた。ツキン棒漁は船首に突き出たやぐらと称する足場に漁師が立ち、約3ヒロほどのソーソーと呼ばれるカシ棒の先に三つ又の金具の鉛先をつけたものを持ってかまえ、カジキを目がけて投げつけ、突きとるもので、誠に勇壮な漁法である。したがって漁師は敏捷性と、目の良いこと、卓抜した体力を必要とする。」

(第19図は紙面のみでの公開となります。
最寄りの公立図書館にお問い合わせの上、
閲覧なさってください。)

第19図 現在のカジキマグロ突きん棒漁(宮城県気仙沼)

アイヌの離頭鉛(キテ)によるカジキ(シリカッブ)漁にいち早く注目したのは長谷部哲人(長谷部1926b)である。さらに分析を進めて、渡辺仁はアイヌのカジキ漁を陸のクマ猟に匹敵するアイヌ社会における威信獲得活動^[10]として位置づけた(渡辺1990)。恰のように鋭い吻骨を持つカジキを捕獲するためには、特別な装備^[11]と高度な漁撈技術・複

雑な漁撈儀礼の習得が必須であり、渡辺にしても「丸木舟のような小舟で挑戦するのは決死的」と評価せざるを得なかった。突きん棒漁でカジキを捕獲するためには、喫水線からの高さや船足はもちろんのこと、船底の材質までよく吟味されたものでなければならぬ。

南境貝塚線刻の船の舷側部には、3条の細い線刻が施されている。この線刻が波濤や喫水線を表すものであれば、突きん棒漁の捕獲対象が何であれ、充分な高さを確保できる船といえよう。

V おわりに

今回、報告した南境貝塚3・4トレンチ区12層出土の縄文中期の線刻には、「船」が描かれていた。発掘調査当時の日誌や写真、あるいは線刻の特徴や画の検討から、線刻は後世の偽刻等ではなく、真正の発掘資料と確認された。

船は、帆柱を持つ準構造船が表現されていると考えられた。帆柱には和船に見られるような帆桁は表されておらず、アイヌの板縫船の席帆をはらませる帆柱に類似した構造を読み取ることができた。また、船体に描かれた3条の細い線刻が波濤や喫水線を表すものであれば、喫水線からの充分な高さを保持する船と言えよう。

南境貝塚の膨大な遺物の中には、南海産貝類や多数の離頭鉛が含まれており、遠隔地交易や外洋性漁業がこうした帆柱を持つ準構造船を介して行われた可能性が考えられた。

現在、日本では丸木舟(単材刳舟)は134艘が発見されており、このうち縄文時代のものは約100艘ある。縄文時代の船に準構造船存在の可能性がたびたび指摘してきたものの、現状では未発見のままとなっている。

これまで発見されている縄文時代の丸木舟も、船底部のみの残存で、上部は明らかになっていないものも多く、板縫舟の可能性や帆柱の有無等についても再検討の余地があろう。いずれ、他遺跡における船の線刻類例の増加、準構造船実例あるいは帆柱等の船材の発見を待ちたい。

【謝辞】 今回の発表に当たり篠遠喜彦・金子浩昌・藤沼邦彦・須藤隆・楠本政助・阿部恵・手塚均・押切智紀・柳沢和明・斎野裕彦・菅原弘樹・菅原祥夫の各氏、Bishop Museum、東京大学総合研究博物館、辰馬考古資料館、福島県文化財センター白河館、い

わき市考古資料館、河北新報社から種々のご教授や特段のご配慮を賜りました。厚く御礼申し上げます。また、図版整理に兼平宏子・新野のり子の両氏に多大のお世話になり、感謝を申し上げます。

参考 南境貝塚の研究史 南境貝塚に関する調査歴は以下の第2表のとおりである。発掘調査は概ね、第Ⅰ期：大正年間の藤原七郎・毛利利七郎によるもの、第Ⅱ期：1960～61年を主とする楠本政助によるもの³⁸⁾、第Ⅲ期：1966～68年の第1～5次に及ぶ宮城県教育委員会によるものに分けられる。研究的には、速藤・毛利資料によって山内清の「境1式」「境2式」の検討、あるいは伊東の「南境式」の型式設定が行われ、楠本資料に基づき大木9～10式の細分や「称名寺式」の検討(林1965、楠本1973a、須藤1985、丹羽2009)が行われている。また、土器型式編年以外でも、離顎踏の研究において「南境貝塚出土資料は古式離顎頭」(楠本1969)や「南境型」(渡辺1973)として基準資料とされている。

第2表 南境貝塚の調査来歴

【註】

- (註1) 楠本1973aに、楠本は金子浩昌とともに昭和41年8月に、「南境貝塚の工事現場」の縦文後期掘之内I式の純貝塚からハマグリを採取し、年代測定(N-375 4070 ± 130B.P.)を行った旨の記述がある。
- (註2) 春成は偽刻の特徴として、「縦面は汚れているのに對して、縦刻の中は汚れがなく新鮮である。」ことを指摘し、縦面に附した工具を鉄製のナイフか釘のような鋭い刃物を想定している(春成2003)。
- (註3) 「開口した横穴墓ないしは横穴式石室の壁に描かれた絵画が、果たして墓造時点にまで遡る資料であるのか疑わしい事例も多く、すべてを古墳時代のものとして取り上げることはできない」(山田2006)とする評価が現在でも研究者の共通認識であろう。
- (註4) 北海道・東北地方北部~北陸地方の縦刻縹(岩版)に関しては長田友也2004が詳細な分析を施している。ここでは紙幅の関係から、東北地方南部に限定する。
- (註5) 1点のみ「蟹と魚」の絵画を刻んだとされる縦刻縹がある。
- (註6) 日本考古学協会では、この舷側部の3条の沈刻を船体に施された装飾と解して発表している。
- (註7) 明治期になると、和船の影響を受け、一本の帆柱に帆桁をつけ、小さな帆を張って帆走する帆夷船も見られるようになった(北海道開拓記念館)。
- (註8) 当時、早稻田におられた忍澤成親氏に南境貝塚出土のタカラガハイにハジウタカラガハイの存在を指摘された。
- (註9) 南海貝類は宮城県七ヶ浜町大木町貝塚、直道貝塚、二月貝塚、東松島市里浜貝塚や北上川をややさかのぼった大崎市中沢貝塚、柴原市館貝塚、登米市富崎貝塚、岩手県一関町鳥貝塚、あるいは石巻市田代島仁斗貝塚や気仙沼市田舎貝塚、岩手県久慈市二子貝塚等からも出土している。参考までに、西太平洋のソウラヴァ(赤い貝の首飾り)とムワリ(白い巻貝の腕輪)の交換は、周辺の島や浜からの参加(クラ共同体)による大洋海連隊が組織される。
- (註10) アイヌの名人ですら年には4~5本のカジキを獲るのが精いっぱい、経済的な实用性よりも、カジキ漁を行うこと自体に大きな社会的な意味が求められた。
- (註11) 長万部アイヌのカジキ船の船底には、メカジキの吻骨で突き刺しても割れないように必ずシナノキを用いたとされる(知里1953)。ユカンボシ C15遺跡 I B4層(縦文時代)、同OB層(江戸時代)では、シナノキの船材があり、その漁獲具とともに注目されている(北海道埋蔵文化財センター2000)。
- (註12) 2010年12月28日、楠本から直接に確認したところ、当館にご寄贈いただいたコレクションには、昭和35~36年の地図返し前の調査および昭和41年の工事の時の出土遺物、その他の時の調査遺物のすべてが含まれるということであった。
- 楠本コレクションの南境貝塚資料には、B~IV、B~V、B~VI、B~VII、C~I、C~IIのラベルや筆記があり、それに統いて型式名が記録されているもの

がある。Aが存在しないのは、遠藤・毛利氏の先行調査があるので、あえてAは用いなかったこと、B~Cは地点を示し、I~Vは調査区を示すということであつた。楠本1976にある「約一年半かかって1.5メートル×5メートルの試掘溝を二本あけた」のがすべての調査区ではないことを確認した。

〈引用文献・参考文献〉

- 相原淳一 2008「縦文研究の現状と課題 東北地方」「縦文時代の考古学」2 145~163頁 同成社
- 相原淳一 2009「東北地方における中期末葉から後期後葉にかけての土器編年」「東北歴史博物館研究紀要」10 1~11頁 東北歴史博物館
- 青野友哉 2003「北海道伊達市北黄金2遺跡採集の大木式土器について」「北海道考古学」第29号 83~90頁 北海道考古学会
- 石狩市教育委員会 2005「石狩紅葉山49号遺跡」
- いわき市教育委員会 1988「薄磯貝塚」いわき市埋蔵文化財調査報告書第19冊
- 宇野隆夫 2007「船の考古学」「北海道立埋蔵文化財センター年報」9
- 江坂輝彌 1956「大洞貝塚」大船渡市教育委員会
- 江坂輝彌 2003「縦文文化人の動植物描出線画と塑像について」「考古学ジャーナル」No.497 4~6頁
- 大竹憲治 2001「原始狩猟線刻絵画釋考」「大越・江の上A遺道の研究」69~73頁 大越町埋蔵文化財調査報告第22番
- 小川勝編 2003「ゴッペ洞窟・岩面刻画の総合的研究」中央公論美術出版社
- 長田友也 2004「新潟県アチャ平遺跡出土の縦刻縹(岩版)についての考察」「三面川流域の考古学」第3号 1~34頁 奥三面を考える会
- 忍澤成親 2011「貝の考古学」同成社
- 帝広市教育委員会 1986「帝広・晚遺跡2」帝広埋蔵文化財調査報告第5冊
- 金子浩昌 1968「縦文石器時代貝塚出土のアシカ科海獣類の遺骸について」「仙台湾周辺の考古学的研究」160~190頁
- 木古内町教育委員会 1999「釜谷遺跡」
- 楠本政助 1960「宮城県南境貝塚出土の離頭鉛頭について」「東北考古学」第1輯 34~36頁 東北考古学会
- 楠本政助 1969「縦文中期における古式離頭鉛の変遷」「古代文化」第21巻第3・4号
- 楠本政助 1973「仙台湾における先史狩猟文化」「矢本町史」第1巻 47~264頁
- 菅田薰 1951「縦紋式文化後期沈刻線画を有する石器の発掘・本邦最古の原始絵画の発見」「趣味の地学」第5巻第1号 13~14頁 日本礦物趣味の会
- 後藤勝彦 2008「宮城県石巻市南境貝塚出土の骨角・牙・貝製品について」「IV」~垂飾品~「秋田考古学」第52号 秋田考古学会
- 後藤勝彦・相原淳一 2010「宮城県石巻市南境貝塚出土の縦刻縹について」「日本考古学協会第76回総会研究発表要旨」

- 兒玉作左衛門・大場利夫 1954「函館市春日町出土の遺物について」『北方文化研究報告』第9輯 127~200頁 北海道大学
- 斎藤忠 1965「日本原始美術5 古墳壁画」講談社
- 斎藤報恩会 1991「宝ヶ峯」斎藤報恩会
- 札幌市教育委員会 2001「K30遺跡」
- 佐原真 1993「多視点画から一視点画へ—弥生画と子どもたちの絵—」『論苑 考古学』165~414頁 坪井清足さんへの古稀を祝う会
- 佐原真・春成秀爾 1997「歴史発掘⑤ 原始絵画」講談社
- 設楽博己 2006「日本原始絵画研究の歴史と課題」「原始絵画の研究 論考編」六一書房
- 七ヶ浜町教育委員会 1979「大木圓貝塚一昭和52年度環境整備調査報告書」七ヶ浜町文化財調査報告書第4集
- 白老町教育委員会 1978「白老町虎杖浜2遺跡」
- 末房由美子 2001「弥生時代の銅鐸の文様の源流について」『東海大学紀要 文芸部』第76輯 21~38頁
- 鈴木信 2007「擦文ニアイヌ時代の構築遺跡と渡海交易」「考古学に学ぶ①」森浩一先生寿章記念献呈論集 70~720頁
- 高田則雄ほか 1991「浦河百話 愛しき、この大地よ」浦河町立図書館
- 高橋健 2008「日本列島における鉱脈の考古学的研究」北海道出版企画センター
- 知里真志保 1953「分類アイヌ語辞典 植物編」
- 出口晶子 1995「日本と周辺アジアの伝統的船舶」
- 出口晶子 2001「丸舟」法政大学出版局
- 戸井町教育委員会 1994「戸井貝塚IV」北海道奄美郡戸井町教育委員会
- 東京八丈町教育委員会 1987「東京都八丈町倉輪遺跡」
- 東北歴史資料館 1984~1985「三陸沿岸の漁村と漁業習俗」(上)(下)東北歴史資料館資料集10・11
- 西本豊広・新美倫子編 2010「事典 人と動物の考古学」吉川弘文館
- 丹羽茂 2009「楠本コレクションの調査」『東北歴史博物館研究紀要』10 19~116頁 東北歴史博物館
- 函館市教育委員会 1999「函館市 石倉貝塚」
- 長谷部言人 1926a「燕形話頭」「人類学雑誌」41.3 141~145頁
- 長谷部言人 1926b「燕形話頭とキテ」「人類学雑誌」41.7 303~306頁
- 八戸市博物館 1992「音喜多コレクション目録」
- 春成秀爾 2003a「井向1・2号銅鐸の絵画」『辰馬考古資料館考古学研究紀要』4 53~62頁
- 春成秀爾 2003b「考古資料の偽造と誤断」「国立歴史民俗博物館報告書」第108集 219~242頁 国立歴史民俗博物館
- 早瀬亮介・菅野智賀・須藤隆 2006「東北大文学研究科考古学陳列館所蔵大木圓貝塚出土基準資料」「東北大文学総合学術博物館研究紀要」第5号 1~40頁
- 藤沼邦彦 1995「南境貝塚」「石巻の歴史」第7巻資料編 1141~1206頁
- 辻見鶴高 1973「女川町出島山下貝塚第二次調査報告」「右巻地方の歴史と民俗」25~48頁 宮城県石巻工業高等学校
- 北海道開拓記念館 2002a「描かれた北海道」
- 北海道開拓記念館 2002b「洞窟遺跡を残した続縄文の人びと」
- 北海道埋蔵文化財センター 1997a「美沢川流域の遺跡群X-X」北海道埋蔵文化財センター調査報告書第114集
- 北海道埋蔵文化財センター 1997b「千歳市 キウス5遺跡(3)」北海道埋蔵文化財センター調査報告書第115集
- 北海道埋蔵文化財センター 1998「千歳市 ユカンボシC15遺跡(1)」北海道埋蔵文化財センター調査報告書第128集
- 北海道埋蔵文化財センター 2000「千歳市 ユカンボシC15遺跡(3)」北海道埋蔵文化財センター調査報告書第146集
- 北海道埋蔵文化財センター 2001「千歳市 ユカンボシC15遺跡(4)」北海道埋蔵文化財センター調査報告書第159集
- 北海道埋蔵文化財センター 2002「千歳市 ユカンボシC15遺跡(5)」北海道埋蔵文化財センター調査報告書第176集
- 北海道埋蔵文化財センター 2010「恵庭市 柏木川遺跡(4)」北海道埋蔵文化財センター調査報告書第264集
- 北海道立埋蔵文化財センター 2008「交流の考古学3—船—」「北海道立埋蔵文化財センター年報」9 53~59頁
- Malinowski 1922 Argonauts of the Western Pacific: An Account of Native Enterprise and Adventure in the Archipelagoes of Melanesian New Guinea (寺田和夫・増田義郎訳) 1967「西太平洋の遠洋航海者」「世界の名著」59 中央公論社
- 宮城県教育委員会 1969「埋蔵文化財第4次緊急調査概報 一南境貝塚」宮城県文化財調査報告書第20集
- 宮城県教育委員会 2007「山居置跡(縄文時代編)はか」宮城県文化財調査報告書第214集
- 村越潔 2003「青森県における縄文の絵画と塑像」「考古学ジャーナル」No.497 11~15頁
- 山形県埋蔵文化財センター 2003「かっぽ遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第114集
- 山形県里子 1996~1997「曾利式土器の研究」「東京大学文学部考古学研究室紀要」第14号、第15号
- 山崎京美 1998「遺跡出土の動物遺存体に関する基礎的研究」
- 山田建弘 2006「山陰地方の弥生絵画」「原始絵画の研究論考編」193~232頁 六一書房
- 八幡一郎 1943「骨製針入」「古代文化」第14巻第8号 1~9頁 日本古代文化学会
- 米沢市教育委員会 1994「塔ノ原発掘調査報告書」米沢市埋蔵文化財報告書第43集
- 米沢市上杉博物館 2002「いにしえのロマン 米沢考古学のあゆみ」
- 渡辺仁 1990「純文式階層化社会」六興出版
- 渡辺誠 1973「純文時代の漁業」雄山閣
- 渡辺誠 2008「海獣、はなれ鉱南下の一背景」「いわき地方史研究」第45号

宮城県気仙沼市前浜貝塚土壙墓の再検討

—特に、埋葬人骨と犬骨の関係について—

相原淳 —(東北歴史博物館)

- I はじめに
- II 前浜貝塚の発掘調査
- III 埋葬人骨と犬骨
- IV 人・イス合葬に関する検討

- V おわりに
- 謝辞
- 註
- 引用・参考文献

I はじめに

前浜貝塚は、気仙沼市(旧本吉郡本吉町)前浜362番地の2に所在する。1978(昭和53)年10月13日に、本吉町教育委員会の文化財バトロール事業として、試掘調査が行われた。表土下約10cmで貝層が現れ、人骨が埋葬されていることが確認された。町教育委員会では、ただちに埋め戻し、宮城県教育委員会に報告して、この遺跡の取り扱い上の指導を求めた。協議の結果、最小限度の試掘調査の事後処理を兼ねた緊急調査を行うこととなり、本吉町教育委員会主体のもとに昭和53年11月29日から12月2日までの4日間の発掘調査が行われた。調査面積は12×2.0mの2.4m²である。

調査担当者 宮城県教育庁文化財保護課

調査員 佐々木茂樹・小井川和夫・丹羽茂
東北大医学部 百々幸雄
本吉町教育委員会 小野寺義一

発掘調査報告書は1979年に本吉町教育委員会から刊行された。人骨に関わる部分を百々幸雄、その他の部分を小井川和夫が担当した。動物遺存体については早稲田大学金子浩昌の指導を得た。

II 前浜貝塚の発掘調査

前浜貝塚は標高22~26mの低い台地上に立地している。発掘調査は貝塚の南緩斜面で行われた。

調査区の層序は第1層が表土(耕作土)、第2層が貝層である。貝層を構成する貝種はアサリを主体に、クボガイ、レイシ等が多い。貝層中からは、縄文時代後期後葉の金剛寺式から晩期前葉の大洞B式土器、骨角器等が出土している。



第1図 前浜貝塚の位置と地形

III 埋葬人骨と犬骨

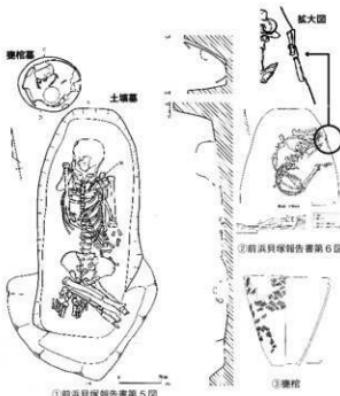
土壤墓確認面と時期 土壤墓は表土直下10cmで確認され、薄い貝層を切って、地山に掘り込まれていた。貝層の中には金剛寺式・大洞B式土器、土壤埋土中に大洞C1式土器破片2点が含まれていたことから、土壤構築時期の上限は大洞C1式期とされた。

人骨胸部に朱(赤色顔料)が施されているのみで時期を特定できる副葬品の出土ではなく、厳密には大洞C1式期以降に構築された土壤である。

土壤埋土の理解 「土壤内の埋土は、上部では貝殻が比較的多くまじる暗褐色であるが、下部では地山ブロックが多く混じっており、上下でいくぶん様相を異にしている。…上下の区分が必ずしも明確ではなく、本来的には同時の埋土であるが、埋め方の順序の違いによって上下の埋土の相違が生じたものと考えられる。」(小井川1979)とされ、土壤埋土の層相の違いを確認しながらも、いわゆる「埋め方の違い」とする理解を採用し、上下同一時期の形成と判断している。

埋葬犬骨の位置について 「犬骨は土壤の北側、人骨より上位から出土しその一部は人骨頭骨に接している。…後肢骨は土壤壁に接している。このような出土状態からみて埋葬された犬骨と考えられる。」(小井川1979)とされた。掲載された図が第2図①・②である。報告書本文では、埋葬犬の後肢骨は「土壤壁に接する」となっているものの、拡大図に示したように中節骨や末節骨を見られる後肢の指骨は、土壤壁の上場の線の外側にはみ出す形で図化されている。

埋葬犬骨の出土状況の写真からの検討 第2図①・②を単純に合わせたのが第3図①である。報告書に掲載されている写真には、犬骨の下に人の上腕骨が一対見えており、図の状況と写真的状況は一致している。また、犬骨の図化された状況もすべて写真と照合している。問題の後肢の指骨は土壤壁にめり込んだ状態で写真撮影されており、土壤輪郭は段1とした部分から外側にたわんでいることが写真から読み取られる。この段1は犬骨取り上げ後の写真③においても残存しており、それに対応するとみられる



第2図 前浜貝塚報告書挿図

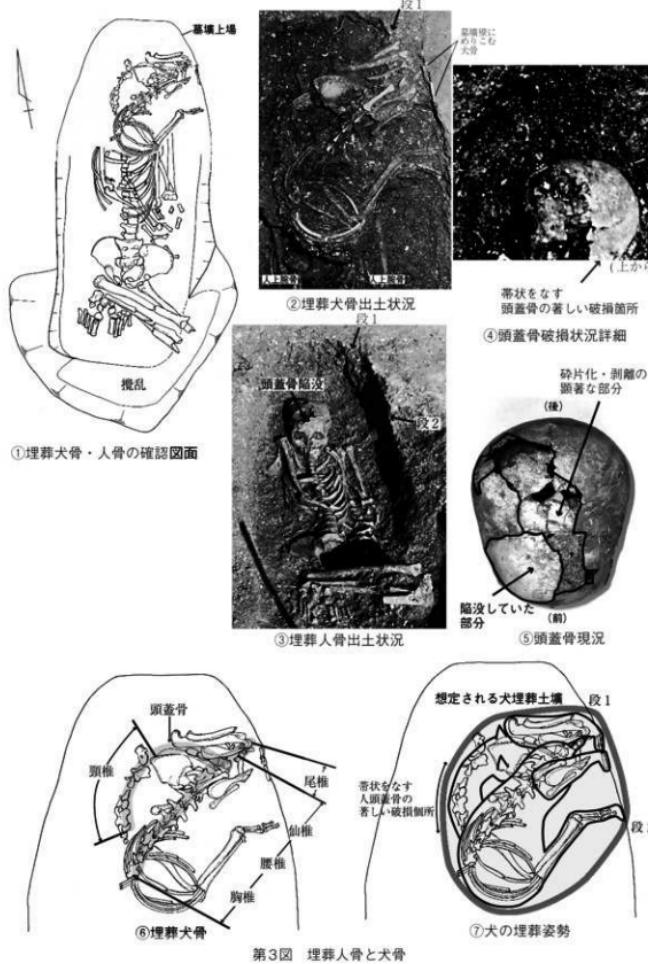
段2も窺われる。段1から段2にかけてわずかではあるが、土壤輪郭は外側に張り出す形となっている。

埋葬人骨との関係 埋葬犬と埋葬人骨の関係は「犬骨埋葬のための土壤がみられないこと、犬骨は土壤外にはみ出すことはなく、その一部は土壤壁に接し、また人骨とも接していることなどから、同一墓壙内にはほぼ同時に埋葬されたものと考えられる。」(小井川1979)とされた。人骨分析を担当した百々は「前頭骨と頭頂骨には、ほぼ正中線沿いに破損の著しい部位が認められる。頭蓋冠に接して家犬が埋葬してあったということであるから、それを埋葬する時に生じた人為的な破損も考えられるが、單に、家犬との長期にわたる接触が、その部位の腐食破損を早めただけのことかもしれない、真相の程は明らかではない。」(百々1979)とし、人骨の破損が「後からのイヌの埋葬」に起因する可能性を示唆しているが、犬骨と接していたことが原因の可能性も考慮して判断を保留している。

人骨の出土状況の写真③には、人前頭骨の右側が大きく陥没している様子が写し出されている。上から撮影された写真④には、さらに破損箇所が帯状に大きく伸びている様子が写されている。破損の状況も、細かく碎片化し、全体的には頭蓋内に落ち込ん

でいる様子もよくわかる。頭蓋骨現況が写真⑤である。陥没していた前頭骨右側の大破片は、やや白くバティナの様相が異なっている。帯状に碎片化・剥離の顕著な部分が認められ、細かく碎片化し接合できなかった残余の頭蓋骨小片がビニール袋1袋ある。

埋葬人頭骨全体の保存状況は良好であり、この部分だけが帶状に腐食劣化したとは考えにくく、何らかの外力によって帶状に碎片化したと考えるのが最も妥当であろうと思われる。

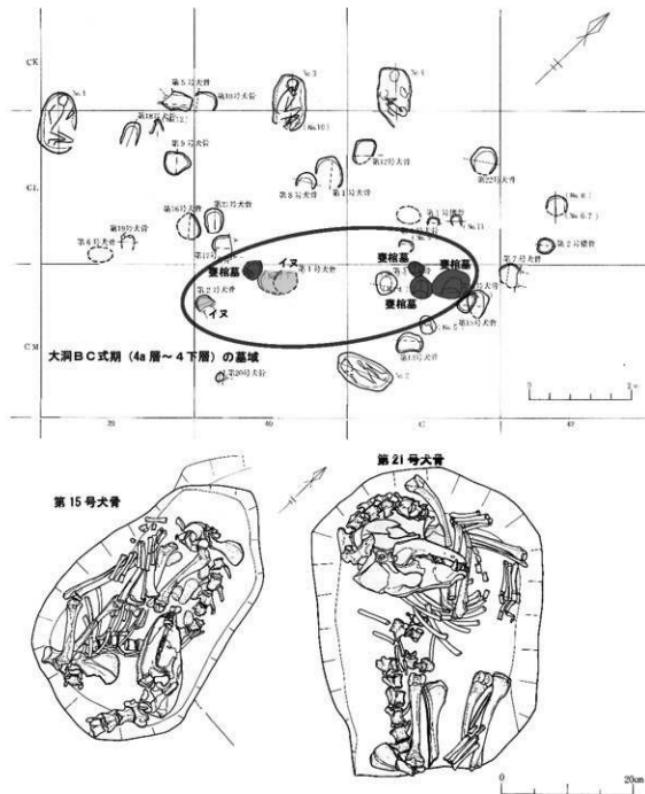


埋葬犬骨の姿勢の分析 「尾は北東方向にのびた形で後肢骨は折りまげられており、頸椎から頭骨にかけては、後肢骨の間にうまるように大きく曲げられている。」(小井川1979) 出土状況を写真・図から判読すると、頭部から頸椎と胸椎から腰椎・尾骨の二つの部分が「V」字状にねじ曲がり、頭骨が後肢間に挟まれた状態となっている(第3図⑥)。「V」字状をなす頸椎と胸椎は直接接続してはおらず、肩甲骨も出土していないことから、頭～頸部と胸部がすで

に分離していた可能性も全く否定できない。

埋葬犬の他遺跡における類例 宮城県内で、発掘調査によって複数以上の埋葬犬が確認されたのは、石巻市南境貝塚(宮城県教育委員会1969)、東松島市里浜貝塚西畠地点(東北歴史資料館1982)、気仙沼市田柄貝塚(宮城県教育委員会1986)、大崎市北小松遺跡(宮城県教育委員会2009)がある。

石巻市南境貝塚 繩文時代中期後葉～後期前葉の犬骨は2体出土している。1体は土器に埋葬されたよ



第4図 田柄貝塚の墓域とイヌ土壙

うな形で、1体は石と石の間で確認されている。土壙の有無については明確ではない。

東松島市里浜貝塚 縄文時代晚期中葉大洞C2式の埋葬犬骨が7体出土している。全体像のわかる6体のイスのうち5体は埋葬のための土壙が確認されず、貝層自体が封土として用いられたものと解釈された。残りの1体は不自然な体位となっていることから、土壙の存在が想定された。

気仙沼市田柄貝塚(第4図) 縄文時代後期中葉～晚期前葉の埋葬犬骨が22体出土している。田柄貝塚では縄文時代後期前葉に成人の土壙墓(屈葬墓・合葬墓)によって墓域が形成され始め、最終的には4a層～4下層の縄文時代晚期前葉大洞BC式期に新生児あるいは胎兒の甕棺墓とイスの土壙墓から構成される墓域(第4図上)へと変化している。うち2体は貝層中からの出土で土壙は確認されていない。他はすべてイスがぎりぎり入る小土壙への埋葬で、無理な体位をとる例(第4図下)も見られる。成犬の場合、概ね45～60cm×40～45cmの楕円形小土壙に埋葬されている。

大崎市北小松遺跡 縄文時代晚期の埋葬犬の出土が発表されているが、正式報告書は未刊である。

埋葬犬に関するまとめ 宮城県内の土壙を伴う埋葬犬の他の類例では、いずれもイス1頭がやっとに入る小土壙に埋葬されている。前浜貝塚例は頭部が後肢まで「V」字状にねじ曲げられており、田柄貝塚例のように小土壙に埋葬された可能性が考えられる⁽²¹⁾。また、人と同じ土壙に埋葬するのであれば、不自然なまでにねじ曲げることは必要ないと思われる。

IV 人・イス合葬に関する検討

全国では前浜貝塚以外に、人・イス合葬ないしはその可能性のある例が稀少ながら存在する。次にこうした例について概観する。

【東海地方】

愛知県大曲輪遺跡(第5図①) 文献:名古屋市教育委員会1981、名古屋市博物館1982、新修名古屋市資料編集委員会2008) 1980年発掘調査。1981年報告書。晚期。貝層を掘り込む土壙から、屈葬の埋葬

人骨(壮年男子)の胸・腹部でイスの骨の一部(左右下頸骨・左大腿骨・右桡骨・右上腕骨)が出土した。出土状況から、筋組織を伴わない部分骨が副葬されたものであるが、報告書では後世の攪乱散逸の可能性についても触れている。

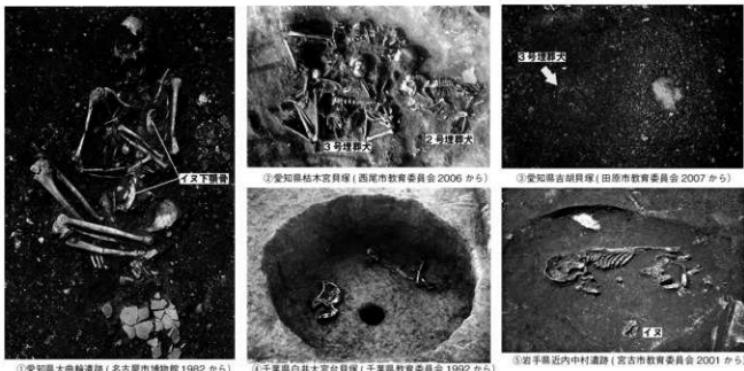
愛知県枯木貝塚(第5図②) 文献:西尾市教育委員会2006) 1973年発掘調査。2006年報告書。貝層(晚期前半)下土層上で長径2.0m、短径1.27m、深さ25cmの平面形が「不規則な楕円形」をなす土壙から、3体の仰臥屈葬(成人)と2体の大骨が確認された。埋葬順位は人骨→犬骨とされている。2・3号犬骨とともに土壙断面図では人骨よりも上位であり、3体合葬の人骨と時間差を置いて、イスが埋葬されたものである。また、2号埋葬犬検出時の写真は小土壙中に写されており、調査手順においても人の3体合葬墓よりも新しい遺構として調査されている。

愛知県吉胡貝塚(第5図③) 文献:田原市教育委員会2007) 2005年発掘調査。2007年報告書。貝層(晚期前半)下で、頭部に赤彩の施された乳児骨(写真右側)の脇に生後1～4ヶ月の幼犬が確認された。埋葬人骨と犬骨底面にはレベル差があり、時間差において捉えられる可能性もある。

【関東地方】

千葉県白井大宮台貝塚(第5図④) 文献:千葉県教育委員会1992) 1991年発掘調査。1992年報告書。小堅穴状土壙(SK01)のほぼ床面直上で人骨と犬骨が確認された。床面直上からは加曾利E II式(中期中葉)土器が出土している。人骨は側臥屈葬、犬骨も側臥位でそれぞれの埋葬土壙は確認されず、小堅穴下半全体が人為的に埋めもどされていた。報告では犬骨は「人骨と全く同レベルで出土しており、埋葬時期の近似性が窺える。合葬の可能性もある。」とされた。人・イス埋葬の後、約半分が埋め戻され、その上位を多量の獸骨を含む貝混じりの土で埋め戻されている。

千葉県高根木戸遺跡(船橋市教育委員会1971) の庵屋墓でも3体の大骨が確認されている。犬骨は炉の南側床面に折り重なって、炉の北側床面には10cm浮いた状態で成人男子が土壙等を伴わずに、埋葬されていた。高根木戸遺跡例では明らかな時間差(イス



第5図 人・イヌ合葬に関する検討

→人埋葬)が確認されている。関東地方では、人とイヌは位置関係においては、白井大宮台貝塚例も高根木戸遺跡例も峻別されている。

【東北地方】

岩手県近内中村遺跡(第5図⑤ 文献: 鎌田1998、宮古市教育委員会2001a・b) 1997年発掘調査。2001年概要。後期後半、長軸1.4m、短軸1.0mの楕円形土壙から人とイヌの合葬墓が検出されている。詳細は報告書の刊行を待ちたい。

小結 以上、縄文時代における人・イヌの合葬について検討を施した。その結果、イヌの部分骨が副葬されたとみられる愛知県大曲輪遺跡例は認められるものの、西本豊弘が指摘(西本2010)するように、確実な同一墓壙への人・イヌの合葬は確認できなかった。また、縄文時代中期の関東地方の転用墓への人・イヌの埋葬の場合、人とイヌの位置関係は明瞭に区別されている。

V おわりに

前浜貝塚土壙墓における人・イヌ合葬に関する同時性については、その当初から日々争論(1979)が「真相の程は明らかではない。」としてきたものである。今回、改めて人骨頭部の破損状況を検討すると、発

掘当時の写真では帶状に碎片化している様子が確かめられ、現況においても全体としては保存状態が良好な頭骨でありながら、頭頂部を中心に帶状に細かく碎片化し、充分に接合できない様子が確かめられた。また、犬骨は「V」字状にねじ曲がった無理な姿勢で検出されており、他の類例からもイヌがやっと入るぐらいの単独小土壙への埋葬と考えるのが最も自然であり、人とイヌが「同時に」埋葬されたとまでは言い切れない。全国の縄文時代遺跡の埋葬例においても、人・イヌ同時埋葬に関しては、積極的に肯定できるような状況ではない。

なお、前浜貝塚土壙墓に関するその後の研究史は文末の第1表のとおりである。1993年の岩手県立博物館におけるシンポジウム(岩手県立博物館1995)の席上で女性人骨と胎児か新生児骨が「セット」になる可能性があるとする小井川発言があり、山田康弘(1994)はさらに解釈を進め、「女性人骨と胎児・新生児段階の人骨は母子」と推定した。しかし、わずか2.4m²の調査区で検出した女性と胎児もしくは新生児骨を、位置関係のみから「セット」と推定するのは、速断に過ぎるのではないかろうか^(注2)。

今後、人骨と胎児か新生児骨との親子関係に関してはDNA鑑定、あるいは人骨や大骨の年代測定、などが必要であり、そのうえでこの問題に関しては

さらに検討していきたい。

四

本稿をまとめるにあたり、次の方々や機関からご教示やご協力を賜りました。記して、感謝申し上げます。

安達登、川合剛、菅原弘樹、百々幸雄、西本豊広、下関市教育委員会、田原市教育委員会、千葉県教育委員会、名古屋市博物館、西尾市教育委員会、宮古市教育委員会(路政略)

卷之三

年	執筆・編集	記 事	論 文 名	掲 載	発 行
本吉町教育委員会	小川井田和夫 五十嵐幸	(本文)	「前浜貝塚」	「前浜貝塚」	本吉町教育委員会
1979	西本龜弘	「古墳時代は、わずか2周の調査区の中に埋葬人骨が発見されたのであるが、埋葬人骨と同じ墓室中の頭部・胸に接してイヌが埋葬されていた。この明は特異ともいえるが、ヒトとイヌの埋葬と無関係ではないことを示しているといふよう」	「イヌ」	「説文化の研究」12	筆山開
1983	金子浩昌	「このイヌは人を埋葬した土内に完全に入っていたことから同時埋葬と考えられた。イヌは良い友だちの欄干や人間の欄干をさぐる」	「イヌは良い友だちの欄干や人間の欄干をさぐる」	「ニニマ」3月号	凡人社
1984	金子浩昌	「馬鹿された人骨のすぐ隣から出土した鐵文矢（鐵、成形）。人骨とは同時に埋葬され、矢頭は弓の矢頭から飛ばされたものとされています。矢頭の頭部は、弓の矢頭ではなく、かたかたと曲げて飛ばされたのです」	「馬鹿時代の鐵文矢」	「馬鹿と厭骨の東京美術」	東京美術
1985	山崎京美	「二例のみがあるが、宮城県亘井原町のように同一土壙内に人の頭部の上に、あるいは愛知県大府貝塚のように人骨の頭部の上に埋葬されたこともあります。この場合全く同時埋葬であったか否かが問題となるが、人間と犬の密接な関係を示す最も良い例であろう」	「馬鹿文化におけるイヌの埋葬について」	「国際学報誌」86-2	國學院大學
1989	金子浩昌	「(イヌの埋葬)においても、前浜貝塚を含む」	「馬鹿時代のイヌ」	「考古学ジャーナル」No.303	ニューサイエンス社
小川井田和夫	「本吉町の前浜貝塚ですが、女性人骨の上顎歯と臼歯の歯垢が出ております。女性人骨の歯垢は、歯科衛生士の手で洗浄する際に歯垢が剥がれてしまうので、その二枚の歯垢のうち左側歯が残されており、おそらくこれはセツのものだろうという脚がございます」	「前浜貝塚の歯垢」	「シングルジム(角ケ瀬)」	「馬文化」上巻	日本農業新聞社
1990	山田康弘	「1978年の発掘において青年女性が1体と胎児・新生児段階の人骨が認められた裏筋が1例出した。この春の青年女性の頭部に接する形で1体のイヌ合葬が認められていた。人とイヌの合葬例として注目される。」	「馬文化時代のイヌの埋葬と胎児育形」	「動物考古学」1号	動物考古学研究会
	「遺構相続の位置関係からみて、青年女性と胎児・新生児段階の人骨は母子であったと推定される。…」の前浜貝塚出土女性骨について特に注目されるのはこの女性骨の歯垢が、歯科衛生士の手で洗浄する際に歯垢が剥がれてしまうので、左側歯が剥がり残されるような形で大骨が出土した結果は皆無であり、位置的にも異様な出土状況とは言わざるを得ない。	「馬文化時代の絶縁の埋葬」	「物質文化」No.5	物質文化研究会	
1995	西本龜弘	「(馬文化時代)イヌは馬鹿であり、人間と同様に埋葬された。後期段階にはイヌの頭部は常に墓の裏から墓に適応される傾向が強くなる」(前浜貝塚を除く)。	「馬文化とゆ生人の動物館」	「国立歴史民族博物館研究報告」第61集	国立歴史民族博物館
1997	山田康弘	「例えば、宮城県前浜貝塚の事例では出土時の事故で死んだ女性の頭部に乗せられた馬鹿の頭部が、頭部の上に1体分埋葬された。」	「飼文家犬用通鑑」	「動物考古学」8号	動物考古学研究会
1998	山崎京美	「土塙墓の中から、青年女性の入骨とその頭部上に1体分埋葬された犬が発掘された。これは同じ墓室内では同時に埋葬されたもの」	「前浜貝塚」	「遺跡出土の動物遺存体に関する研究」	「わき短期大会」
1999	東北歴史博物館	「人とともに埋葬されたイヌ(想像図)」本吉町前浜貝塚の状況を元にしています。」	「イヌとイノシシ」	「東北歴史博物館」	東北歴史博物館
2002	かみつけの里博物館	「人の骨は額を北面に向かって、腰を曲げた状態で埋葬されている。骨の側面から女性であることが確認できる。頭部の上に1体分埋葬された犬の頭部が、頭部の上に1体分埋葬された犬の頭部が乗せてある。頭部の上に1体分埋葬された犬の頭部が乗せてある。頭部の上に1体分埋葬された犬の頭部が乗せてある。」	「馬鹿された犬」	「大の考古学」	かみつけの里博物館
2003	音源弘樹	「埋葬された犬の頭部には、大人と同一墓室内に埋葬される事例(宮城県前浜町・愛知県大府貝塚・猪籠川手古道中村跡)や、ヒトと一緒に墓室中に集中して埋葬される事例(宮城県日出田原町)もある。しかし、頭部の頭部がヒトの頭部と密接な関係がある場合が多くて行われていたことを示唆している。」	「馬鹿された犬と散乱した大骨」	「考古学ジャーナル」No.501	ニューサイエンス社
2006	中村一泰	「人とは同時に馬鹿化されたものと考えられるということから、導かとしての陶器があった可能性が高いものであろう」	「Howling—ハウリング」第8回記述 「リヌー・蒂大寺説」	「柴犬」第90号 「天然記念物生物学研究会	
2007	山田康弘	「たとえば姫床の埋葬例で考る宮城県前浜貝塚出土例の場合、女性入骨の頭部に上に埋葬するといつて理由は他には確認されておらず、これはバーナン化された墓訓(?)よりも、火葬に対する個別的懸念に対するものだと考えることができよう。」	「馬文化時代の葬制」	「馬文化時代の考古学」9	成社
	山崎京美	「特定人物(幼児・成人)の墓坑内に合葬される事例(幼児との合葬例では愛知県豊川市・猪籠川手古道・茂庭2007)」	「イヌ」	「馬文化時代の考古学」10	成社
2008	山田康弘	「(山田1994)から再録	「特殊な葬法による墓制」	「人骨出土における馬鹿の墓制と社会」	成社
2010	西本龜弘	「人間の頭部に伴って倒れた犬が馬鹿されたという例が少く馬鹿化されているが、筆者たちはそれらの例の出土状況を観察したこところ、人間またはイヌが主に埋葬されていて、頭部の上に1体分埋葬された犬の頭部が乗せてある。」	「馬鹿の骨と骨は1つにまとめる」	「古典・人と動物の考古学」	吉川弘文館

第1表 前浜貝塚のその後の展開

【註】

- (1) その場合、埋葬犬の小土壙は、前述の段1～段2～帯状をなす人頭蓋骨の著しい破損箇所を結ぶ線が、土壙掘り方の一部であった可能性も考えられる。
- (2) 山田は「人・イヌ合葬」の立場から、イヌの埋葬に特別な意味—群衆があった可能性を指摘している。

縄文人骨の出土例は約4,000例に達する(山田2006)。この中には、妊娠期のお産時の事故死も当然、数%含まれるものであろう。参考までに、近世墓における稀少な葬法「縄被り葬」は、発掘された近世墓1,600基中34基と一定数を占め(関根2003)、その残酷で非情な死に対する人々の怖れは一つの形としての葬法を生み出し、確実に定式化している。前浜貝塚のような例は他に類例がなく、定式化された葬法という視点からも、群衆のためにイヌを被せて埋葬したとは考えられない。

〈引用文献・参考文献〉

- 相原淳一 2010「東北地方南部の縄文集落の墓葬制」
『シリーズ縄文集落の多様性 葬墓制』125～148頁 雄山閣
- 岩手県立博物館 1995「縄文發信—じょうもん發信展
関連事業報道—記念講演—縄文の世界／シンボジウム—亀ヶ岡文化の北と南」岩手県立博物館調査研究報告書第11番
- 沖田絵麻 2000「イヌの動物考古学的研究—縄文時代資料を中心に—」岡山理科大学大学院理学研究科修士論文
- 金子浩昌 1983「イヌは良き友だつた 縄文犬と人間の関係をさぐる」「アニマ」No.121 6～11頁 平凡社
- 金子浩昌 1984「イヌの埋葬」「貝塚と獸骨の知識」東京美術
- 金子浩昌 1989「縄文時代のイヌ」「考古学ジャーナル」No.303 6～14頁
- 鎌田祐二 1998「縄文時代のヒトとイヌの合葬」「動物考古学」11 75～88頁 動物考古学会
- かみつけの里博物館 2002「犬の考古学」
- 川合剛 2008「大曲輪遺跡」「新修名古屋市史」資料編 考古1 98～105頁 新修名古屋市史資料編集委員会
- 小井川和夫 1979「土壙墓とその遺物」「堀柵墓とその遺物」「考察」「前浜貝塚」7～24頁
- 小宮孟 2003「縄文犬の研究動向」「考古学ジャーナル」No.5014～5頁
- 下関市教育委員会 1985「吉母遺跡」
- 新修名古屋市資料編集委員会 2008「新修名古屋市史」資料編 考古1
- 菅谷通保・樋泉岳二 1998「茂原市下太田貝塚の集團墓と動物の埋葬—ヒト・イヌ・イノシシ類の埋葬」「動物考古学」11 69～74頁 動物考古学研究会
- 音原弘樹 2003「埋葬された縄文犬と散乱した犬骨」「考古学ジャーナル」No.501 16～19頁
- 関根達人 2003「鍋被り葬—その系譜と葬法上の意味合い—」「人文社会論叢 人文科学篇」9 23～47頁 弘前大学
- 田原市教育委員会 2007「国指定史跡吉胡貝塚(I)」
- 千葉県教育委員会 1991「小見川町白井大宮台貝塚確認調査報告書」
- 東北歴史資料館 1982「里浜貝塚 I」「東北歴史資料館 資料集5」
- 東北歴史博物館 1999「東北歴史博物館展示案内」
- 百々幸雄 1979「宮城県本吉郡本吉町前浜貝塚出土人骨」「前浜貝塚」25～37頁
- 中村一恵 2006「Howling—ハウリング—第8回 送りイヌ—導入説」「柴犬」90 1～3頁 天然記念物柴犬研究会
- 名古屋市教育委員会 1981「瑞穂陣上競技場内 大曲輪遺跡発掘調査概要報告書」
- 名古屋市博物館 1982「特別展 東海の縄文時代」
- 西尾市教育委員会 2006「佐木宮貝塚 II-S 地区—I」「西尾市埋蔵文化財調査報告書第15集」
- 西本豊弘 1983「イヌ」「縄文文化の研究」2 161～170頁 雄山閣
- 西本豊弘 1995「縄文人と弥生人の動物観」「國立歴史博物館研究報告」第61集 73～86頁
- 西本豊弘 2010「動物の骨と人骨は一緒に出土するのか」「事典 人と動物の考古学」18～19頁 吉川弘文館
- 船橋市教育委員会 1971「高根木戸遺跡」
- 文化財保護委員会 1952「吉胡貝塚」埋蔵文化財調査報告第1号
- 春成秀爾 1980「縄文合葬論—縄文後晩期の出自規定—」「信濃」第32卷第4号 1～35頁 信濃史学会
- 宮城県教育委員会 1969「埋蔵文化財緊急第4次緊急調査概報—南境貝塚」「宮城県文化財調査報告書第20集」
- 宮城県教育委員会 1986「田柄貝塚」「宮城県文化財調査報告書第111集」
- 宮城県教育委員会 2009「北小松遺跡」「平成21年度宮城県遺跡調査成果発表会 発表要旨」「宮城県考古学会」
- 宮古市教育委員会 2001a「近内中村遺跡—第1次～第2次発掘調査の概要」
- 宮古市教育委員会 2001b「宮古の遺跡発掘史—20世紀のみやこ考古学」第12回ふるさと歴史展

- 本吉町教育委員会 1979『前浜貝塚』本吉町文化財調査報告書第2集
- 山崎京美 1985「縄文文化におけるイヌの埋葬について」『國學院雑誌』86—2 27～67頁
- 山崎京美 1988「縄文時代のイヌについて」『いわき紀要』第14号
- 山崎京美 1998『遺跡出土の動物遺存体に関する基礎的研究』平成7年度～平成9年度 科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書
- 山崎京美 2007「イヌ」『縄文時代の考古学』5 210～220頁 同成社
- 山田康弘 1993「縄文時代のイヌの役割と飼育形態」『動物考古学』第1号 1～18頁 動物考古学研究会
- 山田康弘 1994「縄文時代の妊娠婦の埋葬」「物質文化」57 1～17頁 物質文化研究会
- 山田康弘 1997a「縄文時代の葬制」「縄文時代の考古学」9 3～18頁 同成社
- 山田康弘 1997b「縄文家犬用途論」「動物考古学」8 37～53頁 動物考古学研究会
- 山田康弘 2006「人骨出土例からみた縄文時代墓制の概要」「縄文時代」17 73～192頁 縄文時代文化研究会
- 山田康弘 2008「人骨出土例に見る縄文の墓制と社会」 同成社

総合展示室に展示されている 「人とイヌの埋葬」に関するイラストパネルについて

東北歴史博物館

本パネルは総合展示室内の縄文時代「仙台湾と東北各地の貝塚」ゾーンの「イヌとイノシシ」コーナーに展示されている。若い女性とイヌが合葬されている様子を描いており、パネル上部に「出産のときの事故で死んだと思われる若い女性と一緒に埋められていた。死者が生前かわいがっていたイヌだろうか」、下部には「『前浜貝塚』を参考」と記されている。

前記論文の掲載にあたり、その内容を館内で協議した結果、本パネルの以下の点については、来館者が誤解する事がないようにすべきと判断し、下記の通り内容を修正することとした。

<修正箇所>

1. イラストにおける女性とイヌの位置関係について

※本来は女性の頭や顔を覆うような位置にイヌが埋葬されていたが、女性であることを明示する必要性から、顔を覆ってイヌを描くことを回避した為、イラストでは左肩部に寄り添うように描かれている。本イラストはあくまで参考図としてのイラストではあるが、事実関係との相違を明示する必要があると判断し、パネル下部に「宮城県気仙沼市前浜貝塚の例を参考にした想像図。女性の左肩付近にイヌが描かれているが、実際には女性の頭部の位置に埋葬されていた。」との説明文を付すこととした。

2. パネル説明文について。

※人とイヌの同時埋葬については、近年、各研究者間で意見の相違をみていることは前記論文の通りである。また、人骨と胎児か新生児骨の親子関係についても、前記論文においてDNA鑑定をふまえての検討の必要性が述べられている。そこで、パネル説明文について「出産のときの事故で死んだ」「一緒に埋められていた」といった言葉使いを改め、「若い女性の墓にイヌが埋葬されていた。死者が生前かわいがっていたイヌだろうか。」と修正することとした。



修正後の「人とイヌの埋葬」パネル

国府多賀城の祭祀

柳澤和明(東北歴史博物館)

-
- | | |
|----------------|----------------------|
| 1.はじめに | 4.多賀城廃寺跡関連の仏教関連遺物・遺構 |
| 2.祭祀関連遺構・遺物の概観 | 5.まとめ |
| 3.国府多賀城の祭祀 | |
-

1.はじめに

多賀城跡は、養老4年(720)に起きた蝦夷の大反乱を契機に、仙台市郡山遺跡Ⅱ期官衙(第1次陸奥国府跡)より移転した第2次陸奥国府跡である(熊谷公男、2000)。多賀城跡は神亀元年(724)に創建され(多賀城碑)、その変遷は4時期に大きく区分されている。近年の多賀城跡終末期の土器の再検討の結果、11世紀前半頃まで存続したと考えられるようになってきた(宮城県多賀城跡調査研究所、2007・2010)。

また、8世紀末頃になると、城内では実務官衙の整備が集中的に行われ、城外では政府—外郭南門間道路の南延長にあたる南北大路、及び外郭南辺区画築地塹から約5町離れた東西大路を基準として、南北・東西道路で区画された町並みが形成され始め、城内・城外一體となった都市的景観が出現することが明らかとなっている(千葉孝弥、1995・2009; 宮城県教育委員会、1996c; 高野芳宏・菅原弘樹、1997; 平川南、1999; 鈴木孝行、2010など)。この都市的景観の整備は、桓武朝の征夷に伴う坂東諸国からの大量の人的・物的支援体制の整備や陸奥国府多賀城に併設されていた鎮守府の胆沢城への移転に連動するもの、と評価される(拙論、1996)。

また、町並みの様相が明らかとなった城外の大規模な発掘調査では、多量の祭祀具が出土した。これら祭祀具については、これまで発掘調査報告書や『多賀城市史』など(宮城県教育委員会、1996a・b; 高野

芳宏・菅原弘樹、1997)で論考されている。

菅原弘樹氏は、城外を中心に祭祀具の出土状況・特徴について取りまとめ、①城外の東西大路と旧砂押川が多賀城における祓所となっていた可能性の高いこと、②それが陸奥国府多賀城の主催で行われていた可能性の高いこと、③祭祀具の年代が8世紀末～9世紀前葉頃に集中していること、などを指摘されている(宮城県教育委員会、1996b)。

菅原弘樹氏による論考後、平川南氏が方格地割の変遷と内部構成(国司館、官衙、都出先施設等)、水陸交通・港湾・祭祀・生産等の観点から国府多賀城を多角的に検討され、国府多賀城を「古代地方都市」に位置付けている(平川南、1999)^⑨。

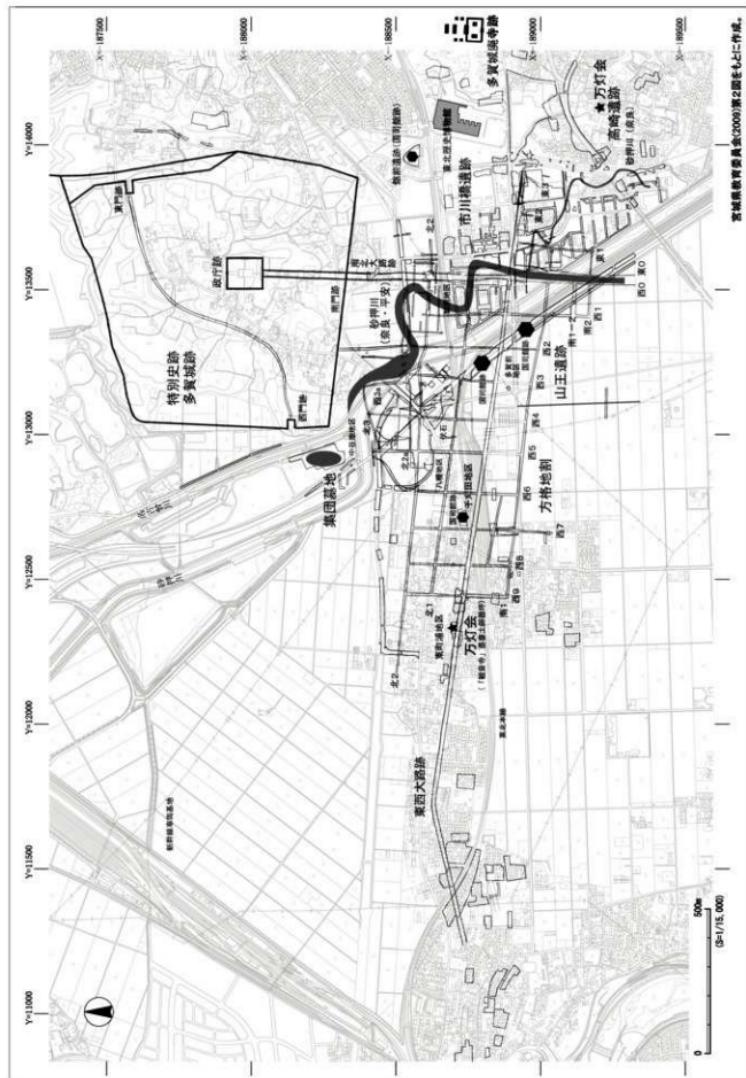
本稿の目的は、多賀城跡城内・城外での祭祀関連遺物・遺構を集成し、国府多賀城における祭祀の特徴を明らかにするとともに、その年代、扱い手、出現の契機を論ずることにある。

2.祭祀関連遺物・遺構の概観

国府多賀城の祭祀具の材質には、木製、土器、土製、石製、骨角製、金属製などがあり、それぞれ以下のようないくつかの種類がある(第2～9図)。

【木製祭祀具】各種の木製形代(人形・馬形・鳥形・蛇形・舟形・刀形・刀子形・鎌形・陽物など)、柵串、絵馬、呪符木簡、墨書き木簡、ササラゴ、算木など。

【土器祭祀具】人面墨書き土器や吉祥句、奉神句、則天



第1図 國府多賀城跡全体図—多賀城跡、城外の方舟地割と班調査区

文字、呪句・呪文、記号、墨画など各種の墨書き土器。

【土製祭祀具】土馬、土製人形、土鈴、土玉、ミニチュア土器。

【石製祭祀具】石製陽物、石偶。

【骨角製祭祀具】卜骨、刻骨。

【金属製祭祀具】錫杖形鉄製品。

この他、土製品には敷画瓦、仏具や仏教祭祀に関わる泥塔、瓦塔、塑像など、金属製品には祭祀具となる場合もある貨幣・鏡がある。これらも広い意味での祭祀関連遺物として取り上げたい。

また、祭祀関連の遺構としては、土器窯⁽³³⁾、地鎮遺構、各種の土器埋設遺構（正位埋設土器、逆位埋設土器、その他の土器埋設遺構）、ウマ埋葬土壙がある。土器埋設遺構のうち、道路上に横位に合口に埋設された土師器甕については、報告時には祭祀関連遺構と考えられたが（宮城県教育委員会、1996d）、その後、市川橋遺跡中谷地地区の集団墓地内で甕棺墓と考えられる同種の遺構が検出されたことから、道路上の同種遺構についても甕棺墓の可能性が指摘されるようになった（宮城県教育委員会、2003）。筆者も同意見なので、道路上の横位埋設合口土師器甕については除外し、別稿で論究することにしたい。

これら祭祀関連遺物・遺構について、①多賀城跡の城内、②城外（河川跡、道路跡、方格地割内、方格地割外）、③多賀城廃寺跡に大きく区分した上で集計した（表1）。

祭祀関連遺物は、城内が25点（1%）、城外が561点（18%）、多賀城廃寺跡が2,493点（81%）、総計3,079点である。多賀城廃寺跡では、泥塔2,349点、瓦塔122点⁽³³⁾、塑像17点、石製陽物1点、戔画瓦4点が出土している。仏具である泥塔、瓦塔、塑像が大部分で、中でも泥塔が突出して多い。仏具が主体を占める多賀城廃寺跡を除けば586点で、城外が561点（96%）と主体を占める。各種の木製形代、人面墨書き土器、吉祥句墨書き土器などの祭祀具の出土状況は、城外で祭祀がさかんに行われていたことを示している（表1）。城外出土の祭祀具561点のうち、河川跡が345点（61%）と主体を占める。次いで方格地割内が151点（27%）と多く、道路跡が61点（11%）とやや少ない。方格地割外は4点（1%）と最も少ない。祭祀具の大

半が方格地割内の河川跡から出土していることから、国府多賀城での祭祀は、これまでの調査状況をみる限り、河川を中心とする城外の方格地割内で主たる執り行われたことを示している。

また、方格地割内151点のうち井戸跡が55点（36%）、溝が53点（35%）と多い。祭祀関連遺物は、河川跡や井戸跡、溝といった水辺や水に関わる遺構から多く出土している。

祭祀関連の遺構は71で、土器埋設遺構が38（55%）、土器窯が18（25%）、地鎮及びその可能性のある遺構が11（15%）、ウマ埋葬土壙が4（5%）である。これらは多賀城廃寺跡からは検出されていない。

土器埋設遺構は、方格地割内が15（40%）、道路上が11（29%）、城内が8（21%）と多く、方格地割外は4（11%）と少ない。土器窯18は城内が9と半数を占め、次いで方格地割内が6とやや多く、方格地割外は3と少ない。地鎮及びその可能性のある遺構は城内に7、道路上に3、方格地割内に1、計11ある（第10図）。

3. 国府多賀城の祭祀

①城内の祭祀

城内出土の祭祀具は25点と少なく、種類も少ない。竪串、呪符木簡、木製・石製陽物、算木、人面墨書き土器甕、吉祥句墨書き土器、土馬、卜骨、戔画瓦、陰陽道関連漆紙文書などがある（第2図）。城外に多い木製形代が1点も出土せず、人面墨書き土器も1点と少ないこと、城外にない土馬が出土し、吉祥句墨書き以外の祭祀関連墨書き土器が出土していないことが注目される。

城内の祭祀関連遺構には、土器窯、地鎮遺構がある。土器窯は実務官衙各所や政府内、地鎮遺構は大畑・作貫地区など実務官衙の掘立柱建物跡周辺にある。

政府内の土器窯は終末期のもので、再検討されて10世紀後半に位置付けられたSK58土壙、11世紀前半頃に位置付けられたSK78土壙などがある（宮城県多賀城跡調査研究会、2007・2010）。要塞などに際して使用された土器を廃棄したもので、それ以前の土器窯が政府内ではなく、8・9世紀代には政府内は

祭具・遺構 の種類	多賀城跡域内		多賀城跡域外															方格地割内		方格地割外		総計			
			道路跡																						
	井	工	城外河川跡		道路跡															小	土	方	方	合	
			城内	計	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	井	工	方	方	合		
人形			2	2	2	8	8	4	10	20								1	2	1	2	4	8	39	
馬形			2		1	1	1	1										1	2	6	6	6	12	13	
鳥形					1																		1	1	
蛇形					1																		1	1	
舟形			2		1																		3	3	
刀形			1	1		3	3												1	1	1	1	10	10	
刀子形																			1	1	2	2	2	2	
鐵形					1														1	1	1	1	2	2	
車輪	1		2	3	32	25	6	19	9	61	6	1					1	8	2	20	51	1	3	101	
轆轤									1	1								1	2	3	6	7	7		
祝木簡			1	1															1	1	1	1	1	2	
垂木簡																	1		1	1	1	1	1		
サラゴ																			1	1	1	1	1	2	
檻物		3	3																					3	
算盤			1	1																				1	
算盤用具品																								1	
骨器																								1	
骨器																								1	
人土器便			1	1	4	11	32	34	2	14	5	10	12	3	5	4	1	2	14	13	1	9	20	149	
人土器便									1															1	
人土器便																								1	
土器便																								1	
土器便																								1	
土器便																								1	
吉野句	1		3	2	1	7	10	1	2	3	2		10	20	6		2	3	9	1	3	7	1	60	
春神句																		2	2	1	2	3	5	5	
刻文字						7	7																7	7	
祝句			1																1	1	1	1	1	1	
墨画																			2	2	2	6	7	7	
記号									1	1														1	
土塁			1	1																				1	
土塁人形																			1	1	1	1	1	1	
土塁																			1	1	1	1	1	1	
土玉																			1	1	1	1	1	1	
土器便																			1	1	1	1	1	1	
龟形陶器																			1	1	1	1	1	1	
ミニチュア 土器便																			1	1	1	1	1	1	
瓦場																								1	
瓦塔																								1	
画面瓦			1	1																				1	
壁面瓦																								1	
石臼																								1	
石臼																								1	
石臼																								1	
寶物									1	2								1	1	1	3	5	8		
金銀																								2	
金銀																								2	
丁子別科料			1																					1	
面近似																								1	
面近似																								1	
手鏡																								1	
手鏡																								1	
紀記風合計	2	1	3	16	25	31	44	42	55	55	49	12	17	34	15	2	11	5	1	2	3	1	1	4	240
「今」理跡			1	1															3	3		3	4		
土塁裏																								93	93
合志裏裏																								95	95
地蔵道跡	7	7									2	1						2	4				11	11	
地蔵道跡 (東北側のもの)	8	8									3	1	1	1	1	2	2	11	15				4	30	
土塁埋	9	9																	6		8	3	9	18	
紀記風合計	25	25									2	2	1	1	2	3	2	20	25		25	111	111	156	
計	2	1	20	18	50	54	42	35	19	89	17	34	13	3	11	5	2	4	2	1	21	32	110	110	

表1 多賀城跡城内、多賀城跡城外の祭祀関連遺物・遺構の集計

きれいに使われていたことをうかがわせる。

実務官衙の土器窯の多くは10世紀代のもので、9世紀代のものは少なく、8世紀代の土器窯は検出されていない。9世紀代の土器窯には、五万崎地区検出の9世紀第2四半期頃のSK2269土壙、同地区検出の9世紀後葉頃のSK2270土壙などがある(宮城県多賀城跡調査研究所、1995)。10・11世紀代の土器窯には、10世紀後葉頃の第68次SX2449土器窯土壙、10世紀末～11世紀前葉頃の第66次SX2319土器窯土壙などがある(宮城県多賀城跡調査研究所、2007)。実務官衙などで使用された土器を集中的に廃棄したものとみられる。

地鎮遺構には、コ字形配置を取って政庁を西に望む作貫地区官衙の主殿跡に8世紀末頃の須恵器蓋と稟塊を埋納したSX1284地鎮遺構(第10図5)、大畠地区官衙の9世紀代の建物跡の柱穴にロクロ土器器坏や須恵器長頸壺を埋納したSX1994・1998土器埋設遺構(第10図9)、大畠地区官衙の建物周辺にロクロ土器器坏の中に小礫6点を入れて須恵系土器小型坏12点を正位に積み重ねて蓋とした10世紀中頃のSX1998土器埋設遺構(第10図6)などがある。10世紀代の須恵器小型坏、ロクロ土器器坏をセットにした地鎮遺構や、さらにその中に小礫を入れた地鎮遺構が大畠地区官衙にやや多く認められ、特徴的である。

政庁では、元旦朝賀、毎月朔日に行われる告朔の儀、蝦夷の朝貢などに伴う各種の儀式や祭祀、吉祥天悔過などの仏教行事が行われたと推定されている(宮城県多賀城跡調査研究所、1982; 進藤秋輝、2010)。しかし、これら政庁内の儀式・祭祀・仏教行事を示す遺物は出土せず、城内では祭祀関連遺物・遺構が少ない(表1)。

(2)城外の祭祀

城外における祭祀関連遺物・遺構の出土地は、①方格地割周辺の河川跡(旧砂押川とその支流の小河川跡)、②方格地割内の井戸跡・溝・土壙等、③方格地割内の道路跡、④それ以外の方格地割外に分けることができる(表1)。

主体をなすのは①の河川跡で、②の井戸跡など、

③の道路跡が次ぎ、④は少ない。これまで指摘されているように(宮城県教育委員会、1996b)、祭祀具の多くは9世紀前半頃を中心とする層や遺構より出土している。

①河川跡出土の祭祀具の主体は、斎串、木製人形代、人面墨書き土師器壺、吉祥句墨書き土器である。他には木製形代(馬形・鳥形・蛇形・刀形・刀子形・鐵形・舟形)、絵馬、人面墨書き須恵器壺・土師器壺・須恵器瓶、呪句・則天文字・記号墨書き土器、石偶・ト骨・刻骨、錫杖形鉄製品、鏡、貨幣などが少数出土している(表1、第3～9図)。これらを用いた複合的な祭祀が繰り返し行われていたことがうかがえる。

②方格地割内の井戸跡・溝・土壙等出土の祭祀具の主体は、斎串、人面墨書き土師器壺である。他には木製形代(人形・馬形・刀形・刀子形・鐵形)、絵馬、呪符木簡、ササラゴ、墨書き土器、吉祥句・奉神句墨書き土器、土製人形・土鈴・土玉、ミニチュア土器、石製陽物などが少数出土している(表1、第3～9図)。

黒崎直氏は、斎串の変遷の画期が8世紀末にあり、斎串の出土する遺構には井戸や溝が多いことを指摘されている(黒崎直、1976)。この傾向性はその後も同様である。国府多賀城の方格地割内で、斎串の出土する遺構に井戸・溝が多いことは、一般的な傾向性とも合致している。なお、井戸跡出土の斎串は、井戸構築時の裏込めと廃絶時の井戸内堆積土より少数出土している。井戸の構築・廃絶に伴う祭祀とみられる。

③方格地割内の道路跡の祭祀具の主体は斎串で、人面墨書き土師器壺がやや多い。他には木製形代(人形・馬形)、絵馬、墨書き木簡、人面墨書き須恵器壺、吉祥句・奉神句墨書き土器、石製陽物、ト骨、鏡などが少数出土している(表1、第3～9図)。

④方格地割外の祭祀遺物は少なく、斎串、吉祥句墨書き土器が少数出土しているにすぎない

以上のように、国府多賀城の祭祀遺物は城外を中心とし、中でも方格地割内の①河川跡、②方格地割内の井戸跡・溝・土壙、③道路跡を中心に出土していることが知られる。国司館・大路跡周辺からの出土も多い。

城外の祭祀関連遺構には、土器窯、地鎮に類する

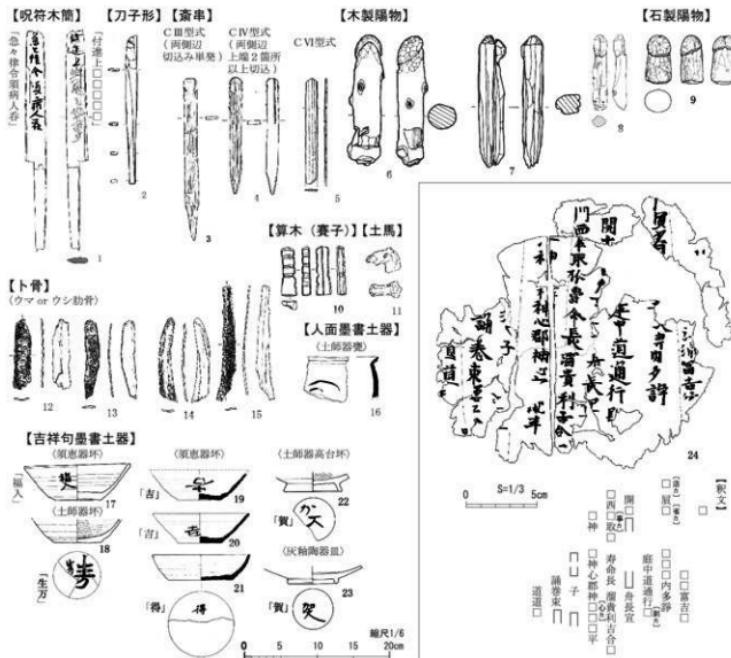
遺構などがある。

土器溜は方格地割内や方格地割外で検出されている。城内と同様に10世紀前半頃の土器溜が多い。方格地割外で検出された土器溜には万灯会に関連するものがあり、後述する。

地鎮に類する遺構は道路路面で検出されている。

このうち、北2西4道路交差点内に埋納したSX5313土器埋納遺構が特に注目される(第10図1)。同法量・同形態の両黒ロクロ土器師高台坏を合口にした9世紀前半頃のものである。中からは何も検出されず、墨書き認められない。

合口にして道路上に埋納した坏については、法隆



【参考文献】奈良文化財研究所 1985『木器集成図録 近畿古代編』に依拠。

【次数・地区・遺構・層位】1・10：第24次立石地区 58224 榛原基底部地層 2：第60次大畠地区 SE21018 井戸跡内 3・4・12・15：第61次湯守地区第10層 5：第61次大畠地区 SE21023 井戸跡内 6：第1次外郭東辺南端青灰色土層 7：第8次外郭南辺中央青灰色土層 8：第34次雀山地区南区8層 9：第28・29・25五番崎地区層位不詳 11：第50次城前地区北2層 16：第41次外郭西辺中央1層 17・22・23：第60次大畠地区SE2102

井戸跡内 18 : 第 60 次大地区 SKR2107 士壇 19 : 第 18 次六月坂地区 SDI438 壴 20 : 第 47 次外郭西辺中央 SDI511 壴 21 : 第 20 次外郭南辺中央第 6 層
24 : 第 78 次前崎南 R2 築基 SDH2983 壴 (SR2755 路線の北東面露蔵)

24: 第78回前半 地元の宿 SAB2853 (SAB2755) [宮城県多賀町跡調査研究会編著 1975「宮城県多賀町跡調査研究」年報 1974 多賀城跡】 2～5・11～14・17・22・23：宮城県多賀町跡調査研究会編著 1993「宮城県多賀町跡調査研究会年報 1991 多賀城跡」 6・7：宮城県多賀町跡調査研究会編著 1971「宮城県多賀町跡調査研究会年報 1970 多賀城跡」 8～9：宮城県多賀町跡調査研究会編著 1969「宮城県多賀町跡調査研究会年報 1968 多賀城跡」 10～11：宮城県多賀町跡調査研究会編著 1967「宮城県多賀町跡調査研究会年報 1967 多賀城跡」

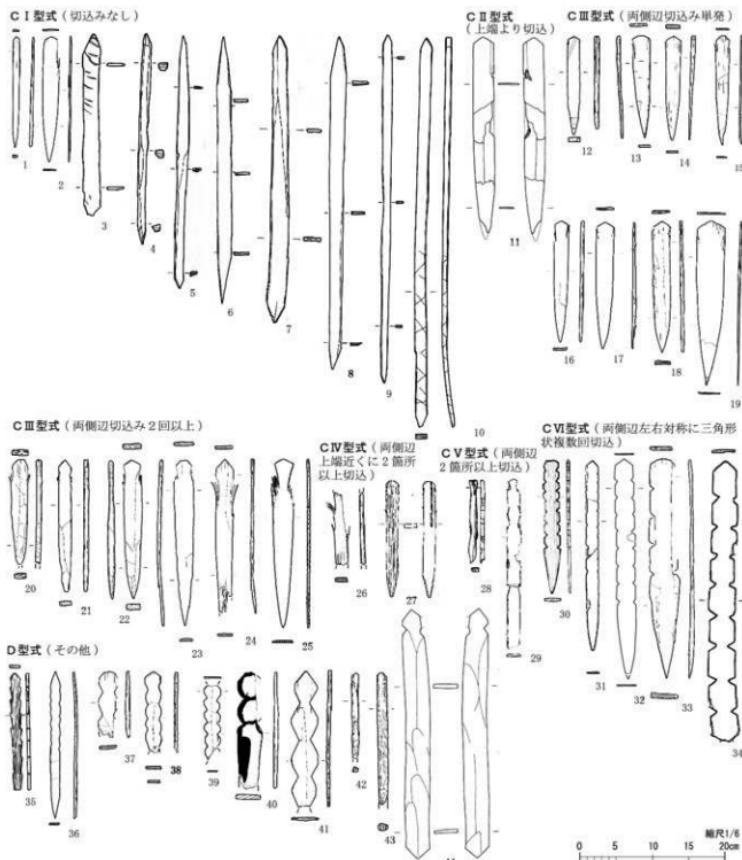
8：宮城県多賀城跡調査研究所 1980「宮城県多賀城跡調査研究所年報 1979 多賀城跡」 9：宮城県多賀城跡調査研究所 1975「宮城県多賀城跡調査研究所年報 1976 多賀城跡」 15：宮城県多賀城跡調査研究所 1988「宮城県多賀城跡調査研究所年報 1987 多賀城跡」 16：宮城県多賀城跡調査研究所

1985『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984 多賀城跡』18：宮城県多賀城跡調査研究所 1994『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1993 多賀城跡』19：宮城県多賀城跡調査研究所 1973『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1972 多賀城跡』20：宮城県多賀城跡調査研究所

年報 1984 多賀城跡』21；宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1984 多賀城跡』24；宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報 2007 多賀城跡』。

「月報系多質地點調查研究所」月報 2001 多質地點

第2図 多賀城跡城内の祭祀遺物



【分類】奈良文化財研究所 1985『木器集成図解 近畿古代編』に依拠。

【遺跡・地区】1・2・12～26・31・36～43：市川遺跡跡域南地区 3～10・29・34：市川遺跡跡域北地区 11・44：市川遺跡跡域水入地区 27：多賀城跡跡域地区 28～30：多賀城跡跡域地区 32：山王遺跡山王地区 35：山王遺跡伏石地区

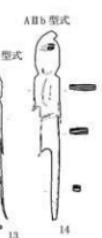
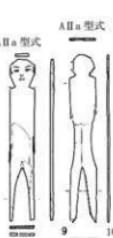
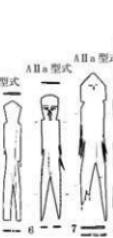
【出土・河川・墓】1・2・3・4・10・16～19・33～39：SII0001 河川跡 6 扇 6：SII0021 河川跡 5 扇 7：SII0021 河川跡 10～34：SII0021 河川跡 11：SD0412 扇 12～21・31～41 扇 43：SD1000C 河川跡 13～18・22～23：SII1051D 河川跡 17：SII1351C 河川跡 1 扇 20～26：SD1522 扇 1 扇 24：SII1351A 河川跡 25：SD2038I 扇 28～30：SE2285 井戸跡内 29：SE512B 井戸跡内 32：SE008 井戸跡内 35：SE009 井戸跡内 36：SE2451 井戸跡内 39：SII1000 南北大筋跡 30：SD1767 扇 41：SD005 井戸跡内

【出】1・2・12～24・26・31・33・37～40～43：多賀城市教育委員会 2003『市川遺跡跡域一地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ』(市70集) 3～10・29～34：宮城県教育委員会 2001『市川遺跡跡域一地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅰ』(市184集) 11～44：多賀城市教育委員会 1984『市川遺跡跡域一地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ』(市75集) 27：宮城県多賀城跡跡域調査研究会 1992『下伊達郡多賀城跡跡域一地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅰ』(市170集) 32：多賀城市教育委員会 1991『多賀城跡』 28～30：宮城県教育委員会 1996『山王遺跡跡域一地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅰ』(市9集) 35：宮城県教育委員会 2006『山王遺跡V－八幡地区・伏石地区－』(市174集)

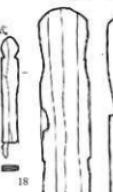
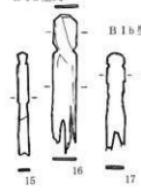
第3図 多賀城跡外の祭祀具1～斎串

【全身正面人形】

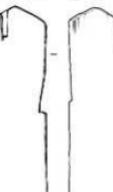
A Ia 型式



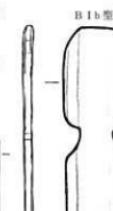
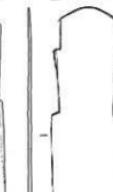
B Ia 型式



B Ia 型式



B IIb 型式



【立体人形】



0 5 10 15 20cm

【種類】1～28：正面全身人形。29・30：立体人形。

【分類】人形の名称・分類は、宮城文化財研究会 1995『木器集成図録 近畿古代編』に依拠。

【遺跡・地区】1～4・6～14・21・22・25・29：山王遺跡城南地区。5・27：山王遺

跡多賀前地区。15～20・23～24・26：千川種遺跡前地区。30：山王遺跡千刈田地区

【出土河川・道橋・層位】1～12：S231018 河川跡。2～3・83区X20-1 層：SX1610 東西大

路東道道路跡南側部 SD16164 5：SD2000 河川跡 12 層 6～22：SX1351C 河川跡 2 層 7：SX1479 8：SX2378 極地層

9：SX1853B 河川跡 10：SD1522 潟 1 層 11：SX1600A 河川跡 13～21：SX1600A 河川跡 14：SX1610 東西大路東

道路跡西側部 SD23865 15：SD1616B 河川跡 5 層 16：SD0565 河川跡 17：SD1616A 河川跡 5 層 18～20・24・

26：SD05021 河川跡 23：SD2351 河川跡 25：SD2333 27：SD2000 河川跡 28：SX1610 東西大路東道跡南側部側構

SD1616A 30：SD1920 河川跡 31：SD1616B 河川跡 32：SD1616C 河川跡 33：SD1616D 河川跡 34：SD1616E 河川跡

【出典】1～3・7～12・14～25：多賀城市教育委員会 2004『市川種遺跡の調査－城南土地区画整理事業に係る発掘

調査報告書－』(市75集) 4～6・10～11・13～21・22～23：多賀城市教育委員会 2003『市川種遺跡の調査－城南土地区

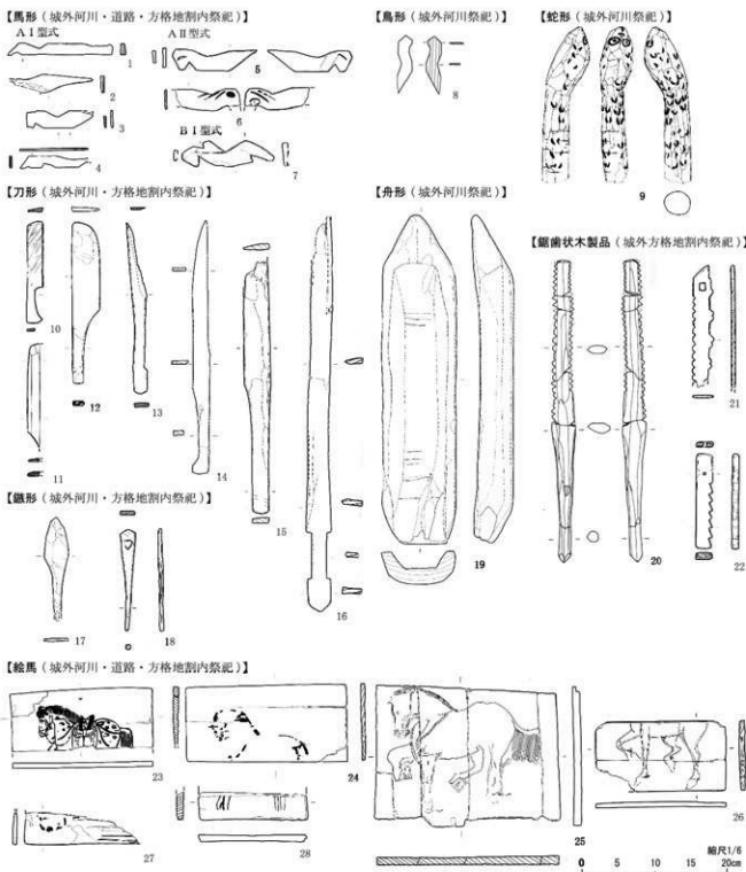
画整理事業に係る発掘調査報告書 II－』(市70集) 5～27：宮城県教育委員会 1996『山王遺跡－仙塩道跡遺跡調査

跡発掘調査報告書－多賀前地区遺物編』(県17集) 15～20・23～24・26：宮城県教育委員会 2001『市川種遺跡の調査

－県道「泉一成瀬線」開通跡調査報告書 III－』(県184集) 30：多賀城市教育委員会 1991『山王遺跡－第9次発掘調査

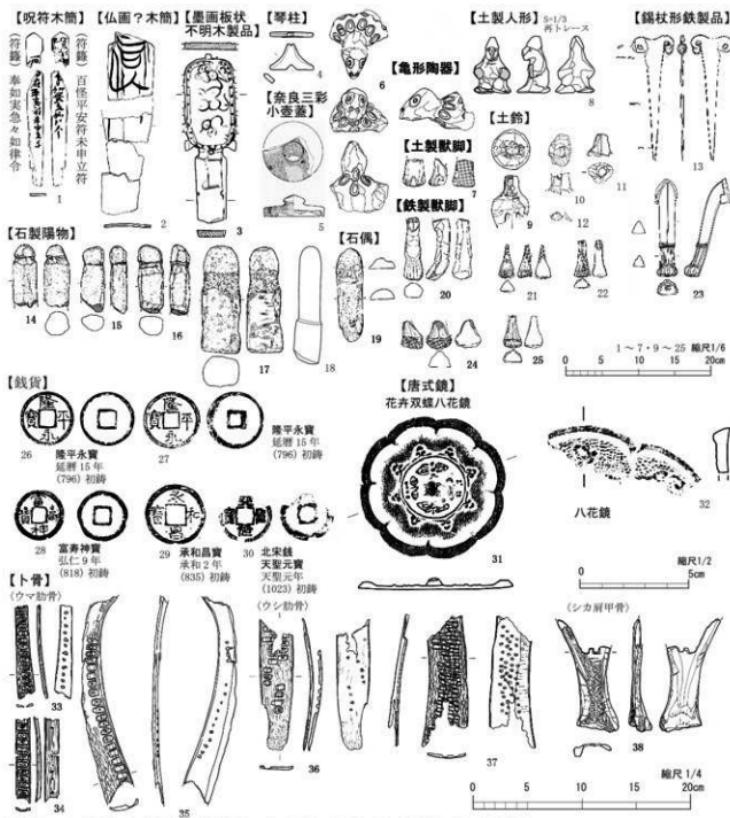
報告書－』(市26集)

第4回 多賀城跡城外の祭祀具2—木製祭祀具(人形)



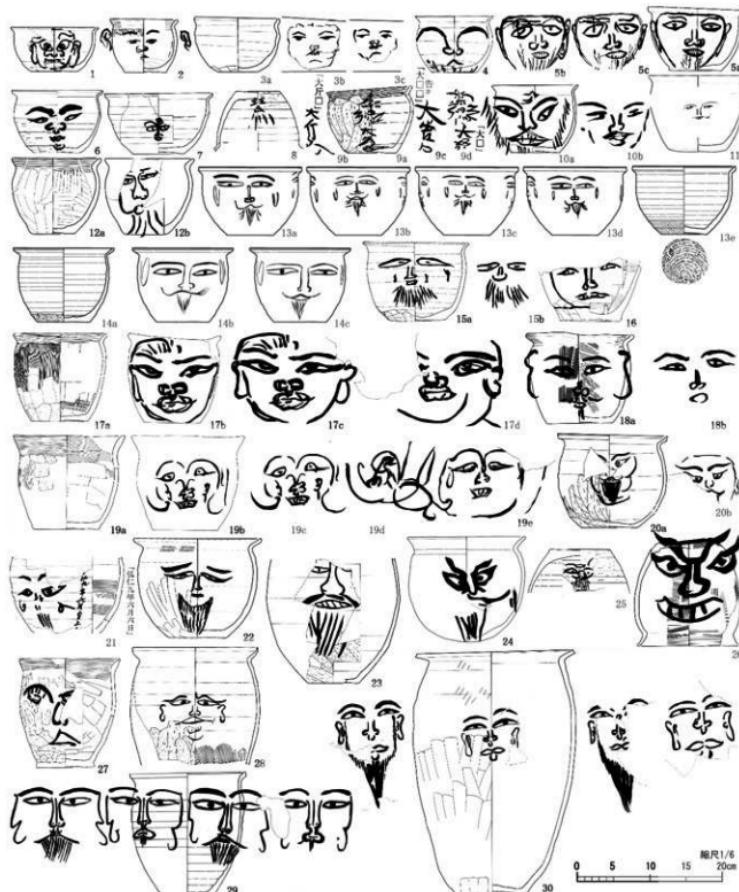
【種類】 1～7：馬形 8：鳥形 9：蛇形 10～16：刀形 17～18：鏡形 19：舟形 20～22：銀歯状木製品（ササガロ） 23～28：絵馬
【分類】 名称：奈良文化財研究所 1985「木器集成図録 近畿古代編」に依拠。
【遺跡・地区】 1～7、10～19、21～28：山王遺跡城南地区 8～9：山王遺跡多賀前地区 20：市川橋遺跡水入地区
【出土河川・遺構・層位】 1・2：SK351C 河川跡 2層 3：SX1800 南北大路東側跡 SD1767e 4・6：SD1522 濱 2層 5：SX2385 西O道路跡西側溝 SD2386g
7：SX2101A 河川跡 8：S02900 河川跡 12 層 9：SD2000 河川跡 10・27：SX2101B 河川跡 11：SX1740 河川跡 12：SK1735B 河川跡 13・15：SX1351D
河川跡 14・19：SX1600B 河川跡 16・21：SX2381 濱 20：SD096 濱 22・66 区IV層 23・24：SD1522 濱第2層 25：SD1522 濱第1層 26：SX1610
東西大路東道跡南側溝 SD1616a
【出典】 1・2・6・13～15・17～19・23～26・28：多賀城市教育委員会 2003『市川橋遺跡の調査－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II－』
（市70集） 3・5・7・11・12・16・21・22・27：多賀城市教育委員会 2004『市川橋遺跡の調査－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書III－』（市
75集） 8・9：宮城県教育委員会 1995『山王遺跡Ⅲ－仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書－多賀前地区遺物編』（県170集） 20：多賀城市教育委員会
1984『市川橋遺跡調査報告書－昭和58年発掘調査報告書－』（市第5集）

第五図 多賀城跡域外の祭祀具3—木製祭祀具（馬形・蛇形・鳥形・舟形・鏡形・刀形・絵馬）



【材質】1～4：木製品 5：奈良三彩 6：陶器 7～12：土製品 13～20～32：金屬製品 33～39：骨製品
【道跡】地区1：市川橋遺跡前川地区 2・6・10・18：山王遺跡八幡地区 3・7・11・13～16・19～21・23～26・29・31：山王遺跡多賀前地区 4・5・8・9・12・22・27・29・30・32～38：市川橋遺跡前川地区 18：多賀城跡小子房跡
【ト骨】(ウマ肋骨)
【出土遺跡・層位】1・28：SD1221B 通路跡4層 2：SX267 桁跡 3：SD1336B 墓 4：西O道路跡西側層 SD2386 5：SB5152 建物跡柱穴掘方 6：S32651 北3道路跡南側層 7：南1・2道路跡AB側跡 8：SH1020B 建物跡南側棟下柱穴掘方・地盤 9：SD5161B 河川跡 10・23・33～38：SD5021 河川跡 11：SX2010 土塁 12：東内大路跡 SX108 北側跡 13：SD5222 河岸跡 14：I 15：SE502 井戸跡内 16・24・30：遺構横断面 17・22：東西大路跡 SX10 路面 18：西端埴土 19：SD100 河川跡 20：SD2000 河川跡2層 21：基本層3層 25：西2道路跡 SX320 路面 26：SD2000 河川跡11層 27：SD2000 河川跡12層 29・32：SX5222 河岸跡5層
【出典】1：宮城県多賀城跡調査研究会 1981『宮城県多賀城跡調査研究会年報 1980 多賀城跡』2・19：宮城県教育委員会 2004『山王遺跡V一八幡地区・伏石地区一』(県174集) 3：多賀城市教育委員会 2008『山王遺跡』(市94集) 4：多賀城市教育委員会 2004『市川橋遺跡一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅲ』(市75集) 5・9・10・13・23・29・31・33～38：宮城県教育委員会 2001『市川橋遺跡の調査－県道「泉一塙塗線」開通調査報告書Ⅲ』(県184集) 6・11：『山王遺跡八幡地区的調査－県道「泉塙塗線」開通調査報告書Ⅰ』(県162集) 7・12・14～17・20～22・24～27・30・32：宮城県教育委員会 1996『山王遺跡III・仙塙道跡建設関係発掘調査報告書』多賀前地区遺物編(県170集) 8：多賀城市教育委員会 1999『市川橋遺跡－第23・24発掘調査報告書』(市55集) 18：宮城県教育委員会・多賀町役場 1970『多賀城跡調査報告Ⅰ・多賀城跡塙塗跡』(写真図版よりトース) 28：宮城県多賀城跡調査研究会 1981『宮城県多賀城跡調査研究会年報 1980 多賀城跡』

第6回 多賀城跡城外の祭祀具4—呪符木簡・仏間?木簡・琴柱・陽器・石偶・土鈴・亀形陶器・土製人形・獸脚・錫杖形鉄製品・錢貨・ト骨

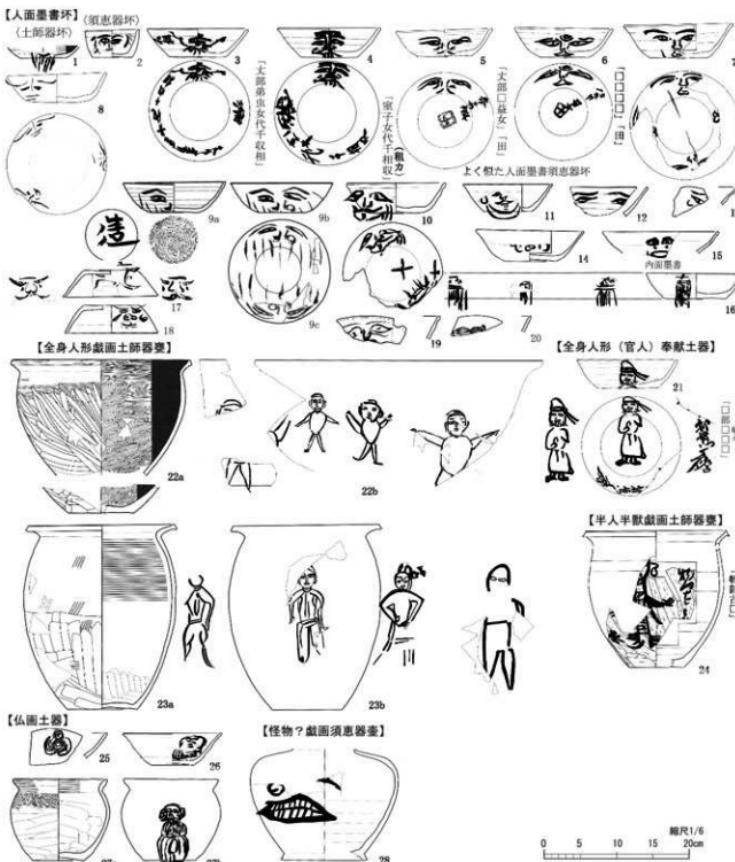


【種類】1・3～8・10・11・13～15・20～22：ロクロ土師器小型壺。2・9・12・17～19：非ロクロ土師器小型壺。23・25・28・29：ロクロ土師器中型壺。24・26・27：非ロクロ土師器大型壺。30：ロクロ土師器大型壺。

【出土河川跡・遺構・層位】1：SX1524 落込。2：SX2365 河川跡4層。3・12：SX1600 河川跡。4・27：SD5055 河川跡。5・11：SX2364 河川跡。6：SD2000 河川跡9層。7～9・20：同10層。10：SX2365 河川跡4層。13・14：SX6720 河川跡6a層。15～17・19：SD5021 河川跡。18：SX31812 河川跡浜白色大山灰下層。24・29：市川橋遺跡砂押町中洲表層。28：SD2000 河川跡11層。30：SX1800 南北大路東側崖 SD1767c。

【出典】1・3・12：多賀城市教育委員会 2003「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ」(第70集)。2・5・10・11・18・22・26・30：多賀城市教育委員会 2004「市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅲ」(第75集)。4・15～17・19・21・27：宮城県教育委員会 2001「市川橋遺跡の調査－県道「奥・塩釜線」開通調査報告書Ⅰ」(第184集)。6～9・20・23・25・28：宮城県教育委員会 1996「山王遺跡調査－仙塩道路建設開削による発掘調査報告書－多賀前地区遺物編」(第170集)。13・14：宮城県教育委員会 2009「市川橋遺跡の調査－伏石・八幡地区一帯道「奥・塩釜線」開通調査報告書Ⅶ」(第218集)。24：高倉敏明 1991「第二章13 山王遺跡」；多賀城市史第4巻「考古資料」。29：高倉敏明 2000「砂押川出土の『所謂西面の面人墨書き土器』『阿形正光君造持集』」。

第7図 多賀城跡城外の祭祀具5－人面墨書き土器（土師器壺）



【種類】1: ロクロ土師器坏 2: 須恵器コップ形坏 3~21・25・26・29: 須恵器坏 22~24: ロクロ土師器中型壺 27: 非ロクロ土師器中型壺 28: 須恵器瓶

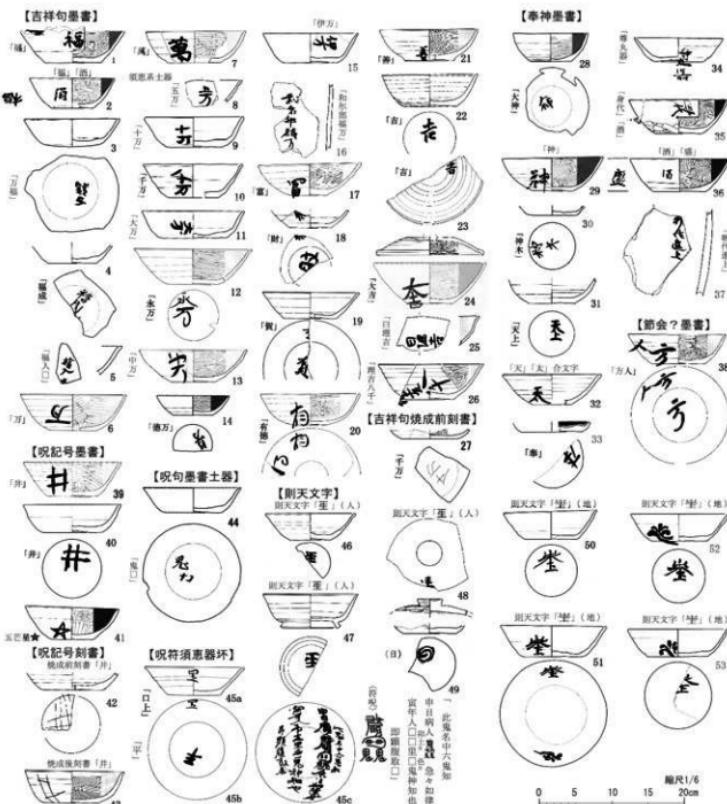
【出土遺跡・地区】1~8・10~11・13~20・22~23・25~27・28: 市川橋遺跡城南地区 2~4・24~26: 山王遺跡多賀前地区 5~7・12~21: 市川橋遺跡多賀前地区 9: 市川橋遺跡(市川橋) 橋脚建設地点中層

【出土河川跡・層位】1: SX2368 河川跡 5層 2~4・24: SD2000 河川跡 10層 3: SD2000 河川跡 11層 5~7・21: SD5021 河川跡 6: SB2055 河川跡 8: SX1351C 河川跡 9: SD6720 河川跡 5b層 10~19: SD1667B 河川跡 11~16: SD1667A 河川跡 12: SD5161A 河川跡 2層 13~14: SX2365 河川跡 4層 15~16~28: SX2364 河川跡 17: SX2478 河川跡 3層 20: SX1812 河川跡 白色火山灰下層 22~23~27: SA1600 河川跡 25: SX1812 河川跡 4c層 26: SD2000 河川跡 7層

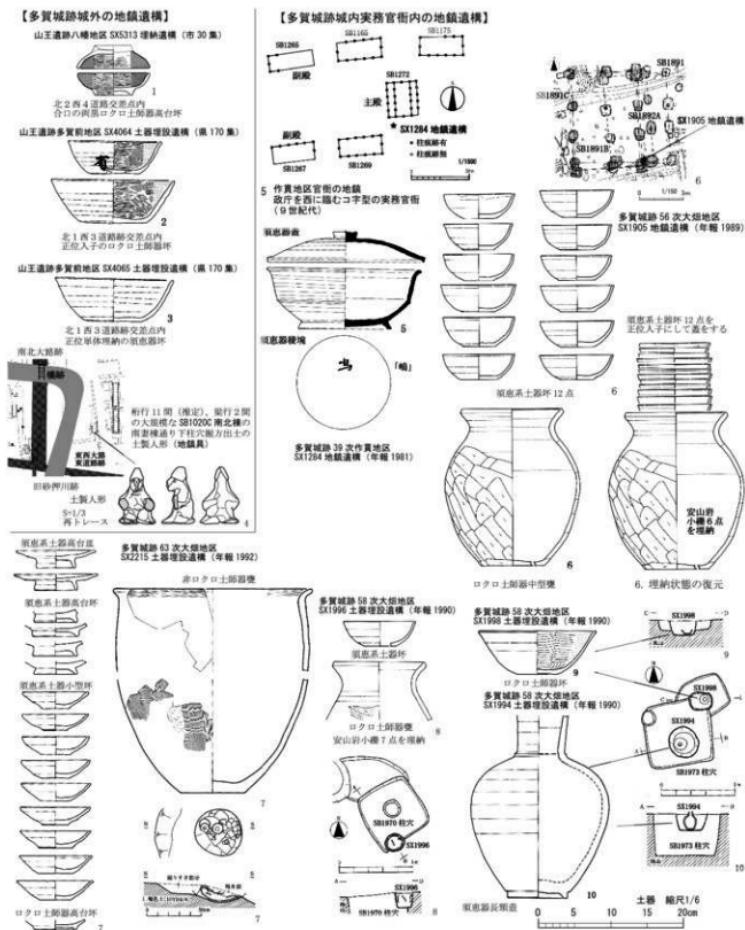
【参考】1~11・13~18・20~25~28: 多賀城市教育委員会 2004『市川橋遺跡一城南地区画整理事業に係る発掘調査報告書III』(市75集) 2~4・

24~26: 宮城県教育委員会 1996『山王遺跡Ⅲ-仙道道路建設関係発掘調査報告書-多賀前地区遺物編』(県170集) 5~7・12~21: 宮城県教育委員会 2001『市川橋遺跡の調査-県道「下塙-塙釜」開通調査報告書III-』(県184集) 9: 宮城県教育委員会 2009『市川橋遺跡の調査 伏石・八幡地区-県道「下塙-塙釜」開通調査報告書VI-』(県218集) 19・22~23~27: 多賀城市教育委員会 2003『市川橋遺跡-城南地区画整理事業に係る発掘調査報告書II-』(市76集)

第8図 多賀城跡城外の祭記具 6-人面墨書き土器(坏・瓶)、官人・半人半獸全身墨書き土器・仏画土器



第9図 多賀城跡城外の祭祀具 7—墨書き器



第10図 多賀城跡域内・域外の地鎮遺構

寺東大門一西大門間参道上の地鎮が著名で、合口にした土器師壇の中に和同開珎・金箔を納め、下側の壇内面に「大」と墨書きしている（森郁夫、1998a・b）。

両黒ロクロ土器師高台壇を合口にしたSX5313土器埋納遺構も、道路交差点内で行われた地鎮に関わるものと考えられる。

なお、史料では道法師が藤原道長にかけた呪詛を「道之傑出者」と賞された陰陽師安倍清明が見破り、朱砂で内面に呪字を書いて合口とした壺を法成寺の門の地中より見つけたという説話が有名である（『宇治拾遺物語』巻第十四ノ十「御堂開白の御大・晴明等、奇特の事」）。SX5313土器埋納遺構も呪術的信仰に関わる可能性もあるのかもしれない。

この他、道路交差点内の路面上に須恵器壺を単体で正位に埋納した埋納遺構や土器師壺を正位に入れ子にした埋納遺構がある（第10図2・3）。これらの性格は不明確だが、地鎮に類する可能性もある。

また、南北大路東側、北1東1区の桁行11間、梁行2間と長大なSB1020南北棟の建て替えに伴って、土製人形を柱穴掘方に埋納した地鎮もあり例のないもので、注目される（第10図4）。鳥帽子を被り、官人を模したものとみられる。

③主な祭祀具

【斎串】

祭祀具の主体をなすのは斎串で、184点出土している（表1・2）。河川跡が91点（50%）と主体を占め、次いで方格地割内の井戸跡・溝等が67点（35%）が多く、道路跡が20点（11%）とやや多く、多賀城跡域内が3点（2%）、方格地割外の井戸跡が2点（1%）と少ない。

出土遺構・屑の年代は8世紀末～9世紀代に及び、9世紀前半頃のものが多い。

奈良文化財研究所による斎串分類（奈良国立文化財研究所、1985）に依拠すると、上端圭頭状・下端劍先状となるC型式が169点（不明15点を除外）中146点（87%）と主体を占める（表2、第3図）。その他のD型式は23点（14%）と少ない。C型式の中では両側刃切り込み単発のCⅢ型式が139点（細分型式不明の7点を除外）中55点（40%）と主体を占める。次

いで両側刃切り込み2回以上のCⅢ型式が24点（17%）、両側面の左右対称の位置を三角形状に切り込むCⅥ型式が24点（17%）、切り込みのないCⅠ型式（一部両端が尖るBⅠ型式に該当）が23点（17%）と多い。両側面の上端近くに2箇所以上の切り込みのあるCⅣ型式は7点（5%）、側面の左右2箇所以上に切り込みのあるCⅤ型式は3点（2%）、上端より切り込みのあるCⅡ型式は1点（1%）と少ない。

出土遺構との関係をみると、CⅠ型式23点中22点が河川跡出土で、1点が道路跡出土である。明らかに河川跡に出土が偏在している。他の型式ではこうした偏りは明瞭には認められない。CⅠ型式は大小の法量があり、CⅥ型式にも大小の法量がある。CⅢ型式には法量の違いは認められない。地区の偏在や法量分化の点で、CⅢ型式は他の型式との違いが認められる。

【人形】

木製人形は39点出土し、木製祭祀具の中ではやや多い。河川跡から28点と最も多く出土し、河川祭祀を中心に用いられている。方格地割内・道路跡から少数出土し、方格地割外や城内からは出土していない。

奈良文化財研究所による人形分類（奈良国立文化財研究所、1985）に依拠すると、正面全身人形が37点（第4図1～28）、立体人形が2点（第4図29・30）である。正面全身人形には以下の型式がある（第4図）。

A型式：頭部・肩部・両腕・両足を表現したもの……

14点。

AⅠ型式：2辺の長さが等しい切り欠きで、頬がふくらみ掘で肩のもの……1点。

AⅠa型式：V字形切り込みで脚を表現するもの……1点（第4図1）

AⅡ型式：1辺が長く1辺が短い切り欠きで、頬はやせ怒り肩のもの……13点。

AⅡa型式：V字形切り込みで脚を表現するもの……9点（第4図2～10）。

AⅡb型式：コ字形切り込みで脚を表現するもの……4点（第4図11～14）。

B型式：手の表現を欠いたもの……6点。

BⅠ型式：2辺の長さが等しい切り欠きで、頬がふくらみ掘で肩のもの……5点。

区分	遺構等種別	分類										計
		上端：主頭状、下端：劍先状								その他		
		C I型式 切込なし	C II型式 上端より切込	C III型式 両側面 側面切込 込單発	C III型式? 切込2 回以上	C IV型式 両側面 上端近くに2箇所 以上切込	C V型式 側面の 左右2箇所 以上上 に切込	C VI型式 両側面の 左右対称 の位置を 三角形状 に切込	C型式 不明	D型式 不明		
河川跡	SX1351	3		15	5	2			3	3	1	32
	SX1600			8	6				4	2	5	25
	SD2000			1			1			2	2	6
	SD5021	19										19
	他河川跡			2	2		1		1	1		2
方格地割内	井戸跡			20	4		2	2	8	10	5	51
	土壤								1	1	2	4
	溝		1	1	3		1		3	1		10
	他			1					1			2
	東西大路跡			1								1
道路跡	東西大路跡			1					1			2
	東道路跡											
	南北大路跡		1	1						2	2	6
	東1道路跡			2								2
	西0道路跡	1		3			2		1	1	1	8
方格地割外	北2a道路跡		1									1
	井戸跡			1					1			2
	墓域	構							1			1
	小計	23	1	55	24	2	6	3	24	5	23	151
	池跡	池堆積層		1		1						2
多賀城跡城内	実務官街内	井戸跡							1			1
	小計			1			1		1			3
	総計	23	1	56	24	2	7	3	25	5	23	15184

表2 多賀城跡城外・城内における斎車の出土傾向

B I a型式：V字形切り込みで脚を表現するもの・・・2点(第4図15・16)

B I b型式：コ字形切り込みで脚を表現するもの・・・3点(第4図17・18)。

B II型式：一辺が長く一辺が短い切り欠きで、頬はやせ怒り肩のもの・・・1点。

B II a型式：V字形切り込みで脚を表現するもの・・・1点(第4図28)

C型式：その他・・・7点(第4図19～23・25・26)。

頭部・肩部・手・脚を表現したA型式が14点と最も多く、B・C型式がこれに次ぐ。眉・目・鼻・口・耳・髪など顔に墨書きした人形は、A型式に限られ、B・C型式には認められない。大型の人形はB・C型式に限られる。

【他の木製祭具】

斎車、人形以外の木製祭具は少ない。馬形、鳥形、蛇形、刀形、舟形、鎌形など形代、琴柱、陽物、鋸齒状木製品(ササラゴ)、絵馬、呪符木簡、仏画?木簡、

墨画板状木製品など、種類はやや多い(第2・5・6図)。都城や木製祭祀具が多く出土する他の古代遺跡に比べると、馬形が少ないようである。

【人面墨書き土器】

人面墨書き土器は173点出土し、城外の河川跡が133点(77%)と最も多い(表1)。方格地割内が23点(13%)、道路跡が16点(9%)と次いで多く、城内は1点と少ない。城外の集団墓地、多賀城廐跡からは出土せず、人面墨書き土器が葬制や仏事とは関係ないことを示している。

人面墨書き土器は、土師器壺が150点(87%)と主体を占め、須恵器壺が21点(12%)とやや多く、土師器壺、須恵器壺は各1点(1%)と少ない。

人面墨書き土器器壺のうち、人面のみを墨書きするものは、以下の4タイプに細分される(第7図)。

A類 平底で鉢状の壺を用いるもの(第7図1～22)。口径10～18cm、器高6～14cm、器高/口径比0.5～0.9と口径に比べ器高は低い。非クロロ土師器と

ロクロ土師器の両者があり、後者が主体を占める。ロクロ土師器壺の胴部に「弘仁九年（818）六月六日」と墨書きされたものがある（第7図21）。人面墨書き土器祭祀の年代の一点を示すとともに、6月の大祓に用いられた可能性の高いことを示す。

B類 丸底で鉢状の壺を用いるもの（第7図24）。口径16.3cm、器高14.5cm、器高／口径比0.89と口径に比べ器高は低い。非ロクロ土師器1点のみである。

C類 平底の長胴壺を用いるもの（第7図25～29）。口径14～18cm、器高15～約22cm、器高／口径比1.0～1.3と口径に比べ器高は低い。非ロクロ土師器とロクロ土師器の両者がある。

D類 平底の大型長胴壺を用いるもの（第7図30）。口径22cm、器高33cm、器高／口径比1.5と大型で器高も特に大きい。ロクロ土師器1点のみである。胴上部外面にロクロナデ前の叩き目痕を残す。

量的にはA類が主体を占め、次いでC類がやや多い。B・D類は少ない。人面は胴部に正位に2面ないし4面墨書きするもの（第7図1～24・27～30）が主体を占める。逆位のもの（第7図25・26）も少数あり、伏せた状態でも使用されたことを示す。眉毛・目・鼻・口・髭を表現するものが基本で、これに加えて顔の輪郭を表現するもの（第7図1・5・17・19・20）や耳の表現を欠くもの（第7図21・22・26）などが少數ある。

土師器壺に次いで多い人面墨書き土器は、須恵器壺である（第8図1～16）。人面の数は1面ないし2面が基本だが、4面（第8図7）や3面（第8図8）も少數ある。方向・部位は表面・正位（第8図2～14・16・19・20）が基本だが、表面・逆位（第8図17・18）、内面・正位（第8図15）も少數ある。また、髭面の人面1面に加えて女性名を墨書きするものが3点ある（第8図3～5、「丈部弟虫女代千取相」、「室子女代千相（租力）取」、「丈部□益女」）。名を墨書きされた女性の代役としてこの須恵器壺に供物を盛って神に供獻したこと、この祭祀の主催者もしくは対象者が多賀城に勤務する官人ではなく、国府多賀城に徵發された女性と考えられること、人面は供獻した女性ではなく鬼神そのものを描いたものであることなどが知られる。

人面墨書き土器の中には、全身を内黒ロクロ土師器

壺、ロクロ土師器長胴壺、須恵器壺に戯画したものがある（第8図21～24）。須恵器壺は官人を戯画したものとみられ、「□部□（鳩カ）□□」と身代わりとされた人名を併書している（21）。上半身が人で下半身が獸とみられる半人半獸を戯画し、「物部古□」と個人名を併記したロクロ土師器長胴壺もある（24）。この他、怪物を戯画したとみられる須恵器壺（第8図28）や須恵器壺の表面・内面や非ロクロ土師器壺に仮想とみられる戯画を描くもの（第8図25～27）も少數ある。

人面墨書き土器は、土師器壺を用いるものについては都城（平城京・長岡京）で流行した風習が次第に地方に拡散したもので、都城を除けば特に東国の国府周辺に多く分布する（金子裕之、1985；村木志伸、2005；早川康志、2008）。

都城の人面墨書き土器は、専用に作られた小型の丸底壺C、中・大型の丸底壺Bを用いている。公表されている器高・口径分布図（金子裕之、2000）によれば、平城京の壺B・Cは法量分化があまり明瞭ではないが、口径5～20cm、器高3～15cmの範囲に大小の2法量が認められる。長岡京の人面墨書き土器は、小型の壺C、中型の壺B II、大型の壺B Iの大中小の3法量に明瞭に分かれる。いずれも器高／口径比は0.3～0.9と口径に対して器高の低いものである。

国府多賀城の人面墨書き土師器壺B類は丸底壺で、これと同時期の在地系土師器壺には認められない。平城京・長岡京の人面墨書き土器中型品の壺B IIと法量が近似する。都城型の人面墨書き土器壺を器形とともに模倣したとのみられる。C類、D類は都城には見られないタイプで、在地の壺や長胴壺を用いている。A類は都城の壺C、壺B IIと法量が近似する。在地の煮沸用の長胴壺とは形態・法量が異なり、煮沸痕跡もない。また、9世紀代の陸奥国内の集落跡からは出土していない。祭祀専用に作られた可能性が高い。

他の祭祀具と同様に、国府多賀城の人面墨書き土器は、出土遺構・層の年代が8世紀末～9世紀代で、9世紀前半頃のものが多い。人面墨書き土器は、都城では平城京期～長岡京期に盛行し、9世紀前半頃には終焉を迎える（巽淳一郎、1993）。国府多賀城での人

面墨書土器祭祀は都城よりもやや後出である。

高島英之氏は、東国集落遺跡出土の人面墨書土器の初源を多賀城に求め、「都城からまず拠点的大規模官衙である多賀城にもたらされた本来的な人面墨書土器祭祀様式が、多賀城郭外の都市部の下級官人や兵士・民衆層と彼らの祭祀・呪的ニーズに応えた沙汰や下級陰陽師などによって変容させられ、それが東国集落へもたらされたという伝播過程が想定できる」と指摘されている(高島英之, 2005)。

しかし、多賀城の人面墨書土器は9世紀前半頃のものが主体を占め、高島氏が「8世紀段階にまで遡る資料も少なからず出土している」と指摘されるような状況ではない。むしろ、国府多賀城での人面墨書土器祭祀は、都城(長岡京)での国家的な人面墨書土器祭祀と坂東での民間的な人面墨書土器祭祀の影響を受けて成立したとみたほうがよい。都城での人面墨書土器を器形や人面の数や特徴など一部模倣した上で、人名を加えた人面墨書土器器坏、各種の全身人形戲画、仏画など坂東諸国で流行した民間の村落祭祀(高島英之, 2005)を取り入れて融合させ、地方化したものと言えよう。ただし、坂東の多文字人名墨書土器が土師器坏を多用するのに対し、国府多賀城では須恵器坏を多用している。須恵器の流通量の多い国府多賀城ならではの特徴と言える。

国府多賀城で祭祀が盛行するようになるのは8世紀末頃以降であり、城外の方格地割内を中心に各種祭祀具とともに関東の影響を受けたとみられる人面墨書坏が出土することから、人面墨書土器祭祀は、桓武朝の征討に伴う坂東諸国からの兵士の駐屯も一つの契機となったのではないかと考えられる。

【ト骨】

ト骨が城内の鴻池地区の池跡(第2図12～15)や城外の河川跡(第6図34～35)から出土している。素材はウマ・ウシ肋骨、シカ肩甲骨で、肋骨を用いるものが多い。

『養老律令』職員令9陰陽寮条には、陰陽師の職務として、「掌らむこと、占筮して地相むこと」とあり、陰陽師は筮竹を用いた卜占を職掌としていた。したがって、ト骨は陰陽師の用いる占いではないので、多賀城に配置されていた陰陽師はこれには関わらない。

かったと推定される。

ト骨は山王・市川橋遺跡の古墳時代中期前半、南小泉式期の集落跡(5世紀前半頃)や古墳時代後期、住社式～栗園式期の集落跡(6世紀後半～7世紀中頃)から出土し、この地域に伝統的な在地祭祀があつたと考えられる(拙論、2010)。こうしたト骨が他の律令的な木製祭祀具とともに出土している点に特色がある。

【呪符木簡、呪符墨書須恵器坏】

呪符木簡は城内の外郭南東隅と城外から各1点、呪符墨書土器は城外の河川跡から1点出土している。

城内の呪符木簡は「急々律令須病人呑」とあることから、特定個人の病氣平癒を願ったものである(第2図1)。城外の呪符墨書須恵器坏も同様に特定個人の病氣平癒を願ったことが窺える(第9図45)。

城外の呪符木簡は多賀城跡外郭南東塗地堀跡西半部隣接の運河跡から出土したもので、表面には「百恵平安未申立符」と記し、裏面末尾は「泰如實急々如律令」と呪句を記している(第6図1)。未申(西南)に立てた「百恵平安符」であることが知られる。平川南・増尾伸一郎・山里純一氏は、多賀城跡の丑寅(艮・北東)・辰巳(巽・東南)・戌亥(乾・北西)・未申(坤・西南)の四隅に「百恵平安符」が立てられたと推定され、鬼魅が外から京内に入らないよう京城四隅の道で行われた道霊祭との関連性を指摘されている(平川南, 1981; 増尾伸一郎, 1996; 鎌江宏之, 2002; 山里純一, 2005)。政庁の南西方向、多賀城跡外郭南辯西側に近い城外から出土しているので、外郭辯各辯の隅に近い城外でこれらが執り行われたと推定される。

また、呪符木簡や呪符墨書土器は、「佛說七千佛神經」・「佛說益算經」など中国撰述の疑偽經典を通じて、道教思想が受容されたことを具体的に物語る、と指摘されている(増尾伸一郎, 1996)。

国府多賀城における呪符木簡、呪符墨書土器は、道教思想をよく理解した者が国府多賀城にいて、その祭祀を執り行なったことを示している。

(4)祭記具、祭祀関連遺構の年代

菅原弘樹氏は、祭祀具の年代が8世紀末～9世紀

前葉頃に集中すると指摘されている(宮城県教育委員会、1996b)。また、墨書き土器についても同様の年代に集中することを吉野武氏が指摘されている(宮城県教育委員会、1996a)。こうした傾向性はその後の発掘調査においても変わらない。城内・城外を通じて、祭祀具は8世紀末～9世紀前葉頃に集中している。10世紀前半頃の須恵系土器壺、ロクロ土器壺壺に墨書きされるものもあるが、ごく少数である。

また、祭祀関連遺構については8世紀末よりも古い遺構は今のところなく、8世紀末～10世紀中頃と祭祀具よりやや年代幅がある。

(5)国府多賀城における祭祀の特徴

国府多賀城における祭祀は、方格地割周辺の河川跡や道路を主な戦所として、斎申、人形など各種の木製形代、人面墨書き土器、吉祥句墨書き土器、ト骨など、多種多様な祭祀具を用いた複合的な祭祀を繰り返し行っていた点に特色がある。

斎申、人形・馬形など各種木製形代や人面墨書き土器を用いた祭祀は、藤原京、平城京、長岡京、平安京など都城に特徴的な祭祀である。都城における祭祀は一般に「都城祭祀」と呼ばれ、「律令的祭祀」と呼ばれることが多い(金子裕之、1980・1985・1997・1998・2000・2003・2005; 加藤優、1978; 西宮秀紀、1986・2006; 岡田精司、1991)⁽²⁴⁾。

祭祀具のうち木製形代は、神祇官が管掌する大祓に関連すると推定されており、国府・郡家など官衙を中心に、北は秋田城から南は大宰府まで広範囲に分布すると指摘されている(金子裕之、2003)。近年、青森県青森市の新田(1)跡から馬形、刀形、鐵形など木製祭祀具が出土しており、10世紀後半～11世紀前半になると蝦夷の拠点的集落にも木製形代が浸透していることが明かとなってきている(鎌浦清民、2004)。この時期に国府多賀城ではこうした木製祭祀具を用いた祭祀はすでに廃れて行われていないが、律令的祭祀と類似する祭祀の蝦夷社会への3次の波及という意味で注目される。

木製形代については、福岡県福岡市元岡・桑原遺跡群第15次調査出土の「解除」木簡の内容が特に参考になり、注目される(福岡市教育委員会、2005; 吉

留秀敏、2000)。この木簡は折敷の底板を転用したもので、現在唯一詳細な内容のわかる8世紀代の祓関係資料として貴重である。内容は、解除(祓)儀式に関わる物品リストであり、品名箇所の多くに合点による点検が認められる。この木簡によれば、解除の際に人形77隻、馬形60隻、須加利太刀、水船(木製槽)4隻、弓20張、矢40隻、五色物(儀式用布か)10柄、□口多志50本、赤玉100□、立志玉100□、酒3□(升)、米2升、栗木2□、□木8束が用意されている。地方における解除(祓)に際して、人形、馬形が同時に多數用いられ、木製槽や弓・矢も用いられている点は、都城や多賀城城外の河川出土の木製祭祀具、木製容器や武器と共通している。多賀城城外河川出土の各種木製形代など祭祀具も、こうした解除(祓)に関連するとみられる。

多量に出土した様々な祭祀具からみると、国府多賀城における祭祀は、①斎申、人形・馬形など各種木製形代や人面墨書き土器壺壺を用いた都城類似の祭祀、②人面墨書き壺や吉祥句・則天文字・記号墨書きなど墨書き土器を用いた坂東類似の祭祀、③ト骨など在地の伝統に根ざした祭祀に大きく区分される。

これら国府多賀城の多種多様な祭祀が多賀城の主導で行われた国家的祭祀なのか、「古代地方都市」である国府多賀城に居住・参集した住民によって行われた民間祭祀なのか、以下、検討してみたい。

(6)国府多賀城における祭祀の担い手

古代祭祀の執行主体をどこに求めるかは難しい問題だが、木製形代や人面墨書き土器は、国家祭祀にも民間祭祀にも用いられたと考えられる。祭祀具のみで国家・民間のどちらかの祭祀と規定するのは、天皇・皇族が用いたとされる金属製人形など、特殊な祭祀具を除けば、困難な場合が多いものと考えられる。出土遺跡・遺構の性格や祭祀具との共伴遺物、文献史料など総合的にとらえ、検討する必要がある。

国府多賀城の場合も例外ではなく、その祭祀は多様である。国府多賀城の祭祀の担い手としては、中央派遣の大祓使、国司、陰陽師などの官人の他、民間の巫覡(男女のみこ)や私度僧、国府多賀城に居住・参集した各種住民が考えられる。

【中央派遣の大祓使】

金子裕之氏の見解を敷衍せると、国府多賀城における人形、斎車など木製祭祀具は、諸国大祓に関連することになろう。

諸国大祓の詳細な内容については、定期と臨時の両者があるのか⁽³⁵⁾、どのような祭祀具を用いるのかなど、不明確でよくわからない点が多い。

諸国大祓に用いられる祭祀具は、初見の『日本書紀』天武5年(676)8月辛亥条と『養老律令』神祇令19諸国条に、国造と郡司の負担する物品・数量が規定されている⁽³⁶⁾。この中には斎車や人形など木製形代はみえないが、大祓の祭祀具に鐵人像が用いられることや、膨大な数の木製人形、幣帛を挿む木が月初めの御贋物に用いられていることが指摘されている(野口剛、1991)⁽³⁷⁾。

また、諸国大祓が中央派遣の大祓使によって執り行われたこと(並木和子、1986;三宅和朗、1990)、道教的色彩の濃い祭祀(福永光司、1989)であったことが指摘されている。国府多賀城にも中央より大祓使が派遣された可能性が高い。

【国司】

国司は管内における神祇祭祀の執行者として位置付けられていた〔『養老律令』職員令70大国条、『続日本紀』神龟2年(725)7月戊戌(17日)条、『続日本紀』天平元年(729)8月癸亥(5日)条〕⁽³⁸⁾。

延暦17年(798)以後は、神名帳記載の全国官社である「祈年祭神三千一百卅二座」を「神祇官祭神七百卅七座」と「國司祈念神二千三百九十五座」に分け、前者を宮中の神祇官での班幣(官幣)、後者を各國の国司が国庁において祭儀(国幣)を執行するようになると指摘されている(加藤優、1978)。国府多賀城で祭祀が盛んとなる9世紀代には、多賀城政庁でも国司が国幣による2月の祈年祭を執り行つたと考えられる。

また、毎年2・6月に行われる鎮火祭(同前5季夏条、9季冬条)については、下野国府出土木簡「×鎮火祭□○×」より、国府でも行われていたことが知られている(西宮秀紀、1986)。

国府多賀城出土の「百恵平安未申立符」呪符木簡(第6図1)は、道霊祭と関連すると推定されている(平

川南、1981;増尾伸一郎、1996;山里純一、2005)。

道霊祭は鎮火祭と同様に毎年2・6月に行われるもので、『続日本紀』天平7年(735)8月乙未(12日)条にみえる道霊祭は、大宰府で流行した疫病との関連で長門以還諸国の守・介に斎戒させて臨時に行わせたものである、と指摘されている(西宮秀紀、1986)。道霊祭も国府で行われていたことが知られており、多賀城でも行われたとみられる。

この他、国司が中央の命令を待たずに祈雨祭祀を行っていたことを三宅和朗氏が明らかにしている(三宅和朗、1995)。

このように、管内神祇社の歳事や諸国で行う祈年祭、鎮火祭、道霊祭や祈雨祭祀は、国司が執行していたことが知られる。多賀城でもこれらの祭祀が行われたものと推定される。だが、これらの祭祀を具体的に示す構造や祭祀具については、道霊祭との関連を指摘している「百恵平安符」を除けば、具体性に乏しいのが現状である⁽³⁹⁾。

【陰陽師】

国府多賀城の祭祀を考える上で、多賀城に官人の陰陽師が配置されていたことは重要である。

元慶6年(882)9月29日太政官符〔『類聚三代格』卷五「加減諸国官員并配置事」所収〕では、鎮守府牒を承けた陸奥国府解に対して、鎮守府に陰陽師を置くことを許可している。この鎮守府牒の陰陽師設置申請理由に、怪異ある毎に鎮守府より陸奥国府に向かい、陰陽師に占わせたことが述べられている。陸奥国に陰陽師が置かれた年代を示す史料はないが、元慶6年(882)以前に置かれたことが知られる。

また、出羽国では嘉祥3年(850)年に陰陽師が配置されている(『日本文德天皇三代實錄』卷一 嘉祥3年6月28日甲戌条)。陸奥・出羽两国は陸奥出羽接界使が管掌しているので、陸奥国では嘉祥3年(850)以前に陰陽師が配置されていた可能性が高い。

【民間の巫覡】

祭祀や呪術の信仰に関わったのは、官人の陰陽師のみではなく、民間の巫覡なども多数存在したこと史料上知られている。

『養老律令』賊盜律17厭魅条では、厭魅や符書を造って人を呪詛する行為を禁じ、罰則を設けていた。

しかし、『続日本紀』天平元年(729)4月壬戌(2日)条、同天平2年(730)9月庚辰(29日)条、「類聚三代格」巻19宝亀11年(780)12月14日勅などからは、平城京内において民間の巫覡が道教に基づく祓えを行い、百姓の間で流行していたことがうかがえ、当初は地方でも禁じられていた祓えが宝亀11年(780)以後は地方では規制の対象外とされたこと〔「類聚三代格」巻19宝亀11年(780)12月14日勅〕が知られる。時代はさらに降るが、平安時代中期には官人の陰陽師を凌駕する数の庶民層の法師陰陽師が活躍していると指摘されている(繁田信一、2006)。

庶民層の法師陰陽師が一層活躍するようになった要因としては、宝亀11年(780)の地方における祓えの容認があったと考えられる。この容認の時期は、国府多賀城で律令的な祭祀が展開するようになる直前である。国府多賀城の祭祀に民間の巫覡が関わった可能性も想定される。

【私度僧】

出家した僧尼には、政府によって得度が公認された官度僧と公認されていない私度僧とがあった。私度僧は、律逸文の戸婚律5私入道私度条、「養老律令」僧尼令16方便条、同22私度条でその存在が禁止され、刑罰も定められていた。しかし、数多くの私度僧が現実に存在し、この規定は実際には守られていなかったと指摘されている(古田一彦、2006)。僧尼令2ト相吉凶条では、僧尼が吉凶をトって地相を視たり、小道(令集解説では厭符の類、穴記は呪禁・解除を含むとする)を行ったり、巫術で治療すれば、還俗するよう規定している。しかし、私度僧の存在と同様、この規定は実際には守られていなかったとみられ、私度僧は占いや巫術も行っていたと推定される。その活動の痕跡を国府多賀城の祭祀具の中に見いだすことは困難だが、私度僧も国府多賀城の祭祀に関わっていた可能性も想定される。

【都市住民、兵士】

「古代地方都市」国府多賀城に集住・使役された百姓など都市住民自身が祭祀の担い手になった可能性もある。また、征夷軍士が地元の神を奉じて征夷に参加していくと指摘されていること(鈴木拓也、2008)から、坂東より駐屯した兵士も一部の祭祀の

担い手になった可能性もあるのかもしれない。

【祭祀の担い手と祭祀との対応関係】

以上のように、国府多賀城の祭祀の担い手には、中央派遣の大祓使、国司、陰陽師などの官人の他、民間の巫覡や私度僧などが考えられる。祓祓所をある程度共通しながらも、時を越えて行われたこれら担い手による祭祀の集積が、多種多様な祭祀具となって現れ、複雑な様相を呈していると考えられる。

これら想定される祭祀の担い手と出土した祭祀具、祭祀関連遺構との対応関係については不明確なものが多い。いくつかの祭祀具については担い手が想定されるものも少數ある。

諸国大祓に用いられたとみられる蕭串、人形・馬形など本製形代は国家的な祭祀とみられ、中央派遣の大祓使の関与が想定される。人面墨書き土師器壺についても都城での本製祭祀具との共伴状況をみれば、これらとともに用いられた可能性がある。「弘仁九年(818)六月六日」と墨書きされた人面墨書き土師器壺(第7図21)は、6月の大祓に用いられた可能性が高い。

道誓祭との関連を指摘されている「百恵平安符」(第6図1)は、国司の関与が想定される。

呪符木簡(第2図1)や呪符墨書き土器(第9図45)は、道教思想をよく理解した者が関わったと推定されることから、多賀城に配属された陰陽師が関与したのかもしれない。城内の地鎮(第10図5~10)も建物の建築に関わるとみられることから、陰陽師の関与が想定される。

坂東の在地祭祀の影響を受けたとみられる人面墨書き須恵器壺(第8図1~16)や白丁とみられる個人名が併記された人面墨書き須恵器壺(第8図4~6・21)・土師器壺(第8図22)、特定個人の病氣平蔵を願った呪符木簡(第2図1)、個人の平安を祈ったとみられる吉祥句・則天文字・記号墨書き土器(第9図)、古墳時代中期以来の在地伝統祭祀とみられる卜骨(第6図34~38)などは、民間祭祀によるものと考えられる。これらの出土点数が多いことからみると、民間の巫覡、私度僧などが担い手となる民間祭祀が相当数あったのではないかと推定される。

(7) 国府多賀城における祭祀の出現の契機

方格地割の形成時期は8世紀末～9世紀初頭頃である。この時期は政庁第Ⅲ-2期の開始期に相当する。この直前の宝亀11年(780)には伊治公咎麻呂の乱が起こり、多賀城も攻め込まれて炎上している(政庁第Ⅱ期の終末)。政庁第Ⅲ-1期(伊治公咎麻呂の乱直後の暫定的な復興期)は比較的短く、8世紀末～9世紀初頭頃の政庁第Ⅲ-2期になって、政庁の他、城内各所の実務官衙や政庁一南門間道路で本格的な大規模整備が行われていることが明らかになっている。したがって、8世紀末～9世紀初頭頃に多賀城跡の城内・城外がともに大規模に造営・整備されていることになる(拙論、1996・2002など)。

この時期の陸奥国をめぐる大きな政治的・軍事的状況には、桓武朝の蝦夷征討とそれに続く胆沢城・志波城の造営・鎮守府の移転がある。

延暦8年(789)の桓武朝第1次征討、延暦13年(794)の第2次征討には、それぞれ数年の準備期間があり、多賀城には大量の兵員・軍需物資が集結され、征夷事業のための兵站基地となっていたことが明らかになっている(新野直吉、1989; 鈴木拓也、1998・2008)。

また、桓武朝の征夷征討の成功に伴い、延暦21年(802)に胆沢城、翌延暦23年(803)に志波城が造営され、それまで多賀城に併置されていた鎮守府が大同3年(808)には胆沢城に移転したことが明らかになっている(鈴木拓也、1998)。鎮守府の移転は、国府多賀城の機構にも大きな変化をもたらしたものと考えられ、城外における方格地割の形成をさらに発展させる要因となったとみられる。

延暦8年(789)の桓武朝第1次征討、延暦13年(794)の第2次征討に際して、多賀城に集結された大量の兵員・軍需物資を管理するため、さらに鎮守府の移転に伴う多賀城の機構改革などに対応するために、城内では政庁・政庁一外郭南門間道路、実務官衙などが大規模に修造されるとともに、城外では方格地割が形成されて古代地方都市としての基盤整備が行われ始めたとみられる。

国府多賀城において祭祀が具現化して展開するようになるのは、まさに桓武朝の征夷から鎮守府移転

にかけての時期に相当する。国府多賀城に律令的祭祀が展開するようになる契機は、古代地方都市としての整備とみられる。この時期には坂東から大量の人・物資が国府多賀城に集結している。斎申、人形・馬形など木製形代や人面墨書き土器壺を多用する長岡京期の都城祭祀とともに、坂東の在地祭祀や在地伝統の祭祀の影響もあったとみてよいだろう。多文人名墨書きを併記させた人面墨書き須恵器壺(第8図4～6・21)は、坂東の在地祭祀の影響を受けているとみられる。

4. 多賀城廃寺跡関連の仏教関連遺物・遺構

多賀城廃寺跡は、仏具を含めた祭祀関連遺物・遺構の総計では圧倒的多数を占める(表1)。祭祀具は石製陽物に限定され(第6図18)^[注30]、木製形代、斎申、人面墨書き土器・吉祥句・奉神句・則天文字・記号墨書き土器は出土していない。このことは、多賀城廃寺跡の僧侶がこれらを用いた祭祀に関わっていないことを示している。仏具の中で主体を占めるのは泥塔で、他には塑像、瓦塔がある。

(1) 泥塔

泥塔は焼失した講堂を中心に2349点出土した。講堂に安置されていたとみられる。出土した泥塔としては、六波羅蜜寺本堂基壇中より約7400点発見された型作りと手捏ねの五輪塔形泥塔(元興寺仏教民俗資料研究所、1972)に次いで多い(伊藤久嗣、1996)。

多賀城廃寺跡の泥塔は1層の屋根、軸部とも円筒形という特異な形態で、屋根の上に5層の相輪を配している。型作り後に細部を再調整したものの、大量に生産されたことがうかがわれる。史料上では僧10人が毎日1人100基の泥塔を100日間で10万基作つた例(「高野山文書」之四、久安5年(1149)4月29日条)が知られている(日野一郎、1938)。

石田茂作氏は宝塔型に分類され、泥塔研究史の早い段階の論文で、多賀城廃寺跡出土の泥塔を図示・紹介されている(石田茂作、1927)。

泥塔の変遷については、これまでの論考や泥塔関

係史料からみると、宝塔形から五輪塔形への変遷は確実なものと考えられる（石田茂作、1927・1969、石村喜英、1971；伊藤久嗣、1993・1996）。多賀城廃寺跡出土の泥塔は宝塔形なので、五輪塔の出現年代よりも古く位置付けられるとみてよいだろう。

最古の五輪塔については、保安3年（1123）造立の法勝寺小塔院に使用された軒丸瓦・軒平瓦の瓦塔と平瓦に施された五輪塔であると指摘されている（石田茂作、1969）。この法勝寺小塔院は、白河上皇発願の泥塔（円塔）供養のため建立されたものである。狭川真一氏は小塔院所用瓦施文五輪塔を「出現期五輪塔」の中の一類型に位置付け、宝塔の範疇で捉えられる可能性を指摘された。そして、大日法身真言を配した極楽寺経塚出土瓦製塔〔天養元年（1144）〕、中尊寺釈尊院凝灰岩製塔〔仁安4年（1169）〕などが五輪塔として最初に確実に認識できるもので、12世紀前半には存在したことを明かにされている（狭川真一、2002）。

したがって、多賀城廃寺跡出土の宝塔形泥塔については、下限年代は11世紀代に収まるものとみられる。近年の多賀城跡最終末期の年代の位置付けの再検討結果（宮城県多賀城跡調査研究所、2007・2010）からみると、多賀城跡の終末と同様、11世紀前半頃までのものとみることが妥当と考えられる。上限については不明確だが、「泥塔」の史料上の初見は貞觀9年（867）の「安祥寺資材帳」であること（日野一郎、1938）から、9世紀後葉よりも古く廻ることはないと考えられる。

（2）万灯会

多賀城廢寺が執り行つた万灯会に関する推定される土器窓が方格地割外の東西2箇所より検出されている（第1図）。西の土器窓は山王遺跡東浦町地区検出のSK161土器窓で、東西大路跡のすぐ北側に位置する（高倉敏明、1991；平川南、2000）。東の土器窓は高崎遺跡11次調査SX1080土器捨て場跡である。これらはいずれも10世紀前葉頃のものであり、多量の須恵系土器・ロクロ土器窓を主体に須恵器窓などを含み、油煙の付着する窓が多い。前者には「観音寺」の他、「田」「安」「履」「斯」「上」「生」・

「並」・「玉」「山」「犬」「大」「珍」「加生」「□山」など墨書き土器をやや多く含む。

平川南氏は、「観音寺」墨書きロクロ土器窓をより多賀城廃寺跡が大宰府と同様に「観音寺」（觀世音寺）と呼ばれ、「続日本紀」天平16年（744）12月丙辰条「度二百人一。此夜於二金鍊寺及朱雀路一。燃二燈一万坏一。」にみられる朱雀大路における万灯会などと類似した儀式が道路上で施行されたと推測している（平川南、2000）。10世紀前葉頃、方格地割の西と東のはずれで、多賀城廃寺（「観音寺」）による万灯会の儀式が施行されたことがうかがえる（第1図）。

また、万灯会関連遺構出土の墨書き土器には、方格地割内の河川跡などで多く認められるような吉祥句墨書き土器が含まれず、これらは多賀城廃寺跡内からも出土していない点が注目される。吉祥句墨書き土器は仏事に関連せず、僧侶は関与していないことがうかがえる。

5.まとめ

①国府多賀城における祭祀は、8世紀末頃から9世紀初頭にかけて具現化し、城外の方格地割周辺の河川や道路を中心にして9世紀前半頃に多く展開し、9世紀後半以降は希薄となる。祭祀が具現化する時期には、城内の実務官衙の整備と城外の方格地割の形成が同時にされ、古代地方都市として整備されている。この整備は桓武朝の蝦夷征討とそれに続く鎮守府の胆沢城への移転を契機とすると推定され、祭祀が展開する契機となった。

②国府多賀城における祭祀は、方格地割周辺の河川跡や道路を主な祓所として、斎申、人形など各種の木製形代、人面墨書き土器・吉祥句墨書き土器、卜骨など、多種多様な祭祀具を用いた複合的な祭祀を繰り返して行っていた点に特色がある。

③国府多賀城における祭祀は多様であり、多量に出土した様々な祭祀具からみると、a. 斎申、人形・馬形など各種木製形代や人面墨書き土器窓を用いた都城類似の国家的祭祀、b. 人面墨書き窓や吉祥句・則天文字・記号墨書きなど墨書き土器を用いた坂東類似の民間祭祀、c. 卜骨など在地の伝統に根

ざした民間祭祀に大きく区分される。

- ④各種祭祀には道饗祭、諸国大祓などの国家的祭祀（律令的祭祀）に関わる木製形代の他、民間祭祀の様相も色濃くみえる。
- ⑤祭祀の扱い手は、中央派遣の大祓使、国司、陰陽師、民間の巫現、私度僧などが想定される。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、元興寺文化財研究所の荻川真一氏、多賀城市商工観光課の千葉孝弥氏、多賀城市埋蔵文化財調査センターの武田健市氏、宮城県多賀城跡調査研究所の古川一明・吉野武氏、東北歴史博物館の手塚均・佐藤則之・笠原信男・村田晃一氏ら多くの方々から有益なご教示を頂いた。末筆ですが、記して感謝の意を表します。

【註】

註1 平川南氏の論考（平川南、1999）後に、平川氏が検出を期待されていた集団墓地が城外の市川橋遺跡中谷地地区で発見された（宮城県教育委員会、2003）。年代的には9世紀中葉頃～10世紀前葉頃のもので、主体は9世紀後半を中心とする頃のものである。道路面上でも土葬墓や横位理設合口斂棺墓が発見されている。集団墓地や葬制は、「古代地方都市」多賀城を考える上で祭祀とともに重要なが、紙幅の関係で別稿にしたい。

註2 万灯会や饗宴の後すぐに集中廃棄された土器溜は、祭祀や儀式に関連するとみられる。日常的なゴミ捨てに伴う土器溜もあると推定されるが、とりあえず祭祀関連造構に含めて集計する。

註3 瓦塔の数量は未公表。東北歴史博物館所蔵の瓦塔は、接合した破片を1点と数えると122点となる。個体数の算定や実測図の公表は今後の課題である。

註4 近年、吉田恵二氏がこれまでとは異なる古代祭祀の概念規定をされており（吉田恵二、2007）、今後注意が必要である。吉田氏は、古代の祭祀を国府が深く関わった神社や寺院を中心とする「國家祭祀」と国家権力とは関係なく民間で行われていた多元的な「民間祭祀」に大別し、民間祭祀を国家が容認あるいは黙認した「律令的祭祀」と殺牛殺馬など国家が介入して禁止した「非律令的祭祀」に細分された。

古代祭祀を国家祭祀と民間祭祀に分け、民間祭祀を政府の容認と禁止の観点からさらに細分する、という区分自体は妥当である。しかし、古代祭祀研究史を尊重することなく、「律令的祭祀」という同じ用語で別の概念規定を行う点は、今後

無用な混乱を引き起こす。また、例示された祭祀具をみると、これまで神祇官の行う大祓に関連するとみられた木製形代が国家が容認・黙認した民間の「律令的祭祀」に位置付け、都城では木製形代とともに用いられた人面墨書き土器を同じく民間の律令的祭祀とするなど、疑問な点も多い。本稿では井上・金子氏の規定する概念で「律令的祭祀」を用いている。

註5 諸国大祓については、臨時のもの以外に2・6月の定期の大祓を認める見解（三橋建、1984；金子裕之、2005）と臨時の大祓以外には認めない見解（梅田義彦、1974；三宅和朗、1990）に分かれ、定期の諸国大祓の有無については見解が一致していない。

註6 「日本書紀」天武5年(676)8月辛亥条には「詔曰、四方為大解除、用物即國別造輪轂柱、馬一匹、布一常、以外部司各刀一口、鹿皮一張、羈一口、刀子一口、鎌一口、矢一具、糧一束、且毎戸麻一束」、「養老律令」神祇令19諸国条には「凡諸國須大祓者、每郡出刀一口、皮一張、鎌一口、及雜物等。戶別麻一束。國造出馬一疋」とあり、両者は類似している。

註7 「延喜式」^{ヒガシガシラ}神祇式にみえる御贋物を詳細に検討された野口剛氏は、「延喜式」卷第一神祇・四時祭上30御贋条・31中宮御贋条が6月晦日の大祓に関連し、ここに御贋物として「鐵人像二枚」がみえることを明らかにされている（野口剛、1991）。また野口氏は、「延喜式」卷第三十四木工式6御贋物の規定では「木偶人三百八十四枚御、御輿形御、鉢幣帛用三百八十四枚御」。右十一月、新嘗祭、從一日迄八日御贋物、六月、十二月神食今食八日簡目亦同」と膨大な数の木製人形や幣帛を挙げるが月初めの御贋物として用いられたことを指摘されている。

註8 「養老律令」職員令70大國条の守の職掌に「祠社」があげられ、「続日本紀」神龜2年(725)7月戊戌(17日)条では、諸国神祇社の職吏が多く、牛馬も放飼されていることから、国守自ら幣帛を執り、慎みて清掃して毎年の歳事とするよう七道諸国に命じている。また、「続日本紀」天平元年(729)8月癸亥(5日)条では、諸国の天神地祇は国守が祭るよう命じている。

註9 平川南氏は、多賀城跡外郭東南隅、外郭南門付近出土の木製陽物について、都城における道饗祭または宮城四角祭と類似した祭祀が実施されたと推定している（平川南、2006）。

註10 石製陽物は城内、方格地割内、道路跡、多賀城廢寺跡、木製陽物は多賀城跡外郭南辺より出土している。祭祀具の少ない多賀城廢寺跡からも出土していることから、平川氏の推定される以外の用途にも用いられた可能性もあるのかもしれない。

〈引用文献〉

- 石田茂作 1927 「土塔に就いて」『考古学雑誌』第17卷第6号 pp.41~62
- 石田茂作 1969 「日本佛塔の研究」(講談社)
- 石村喜英 1971 「瓦塔と泥塔」『新版考古学講座 第8巻 特論<上>』(雄山閣) pp.178~198
- 井上光貞 1984 「古代沖の島の祭祀」『日本古代の王権と祭祀』(東京大学出版会) pp.207~245
- 伊藤久嗣 1993 「「土塔」小考」『奈宮歴史博物館研究紀要』2 pp.55~61
- 伊藤久嗣 1996 「続「土塔」小考」『奈宮歴史博物館研究紀要』5 pp.17~28
- 梅田義彦 1974 「臨時大祓考」「神道の思想」(雄山閣)
- 岡田精司 1991 「律令制祭祀の特質」「律令制祭祀論考」(嶧房書) pp.2~31
- 加藤優 1978 「律令制祭祀と天神地祇の祭祀」『奈良国立文化財研究所研究報第32号』 pp.54~83
- 鎌江宏之 2002 「木簡・呪符・人形」林淳・小池淳一編『陰陽道の講義』 pp.309~330
- 金子浩之 1980 「古代の木製模造品」『奈良国立文化財研究所研究論集』VI pp.1~28
- 金子裕之 1984 「平城京と尋柵」『奈良大学文学部文化財学科「文化財学報」第3集』 pp.67~102
- 金子裕之 1985 「平城京と尋柵」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 pp.219~290
- 金子裕之 1997 「平城京の精神生活」(角川書店)
- 金子裕之 1998 「都をめぐるまつり」『日本の信仰遺跡』(奈良国立文化財研究所学報第57号) pp.187~210
- 金子裕之 2000 「考古学からみた律令の祭祀の成立」『考古学研究』 pp.49~62
- 金子浩之 2003 「古代祭祀と祭祀遺物」『吹田市立博物館開館10周年記念シンポジウム「古代祭祀を語る—五反鳥遺跡と古代祭祀—」
- 金子裕之 2005 「第Ⅳ部 飛鳥・奈良時代 e. 祭りと信仰」『奈良文化財研究所編「ド・イツ展記念概説 日本の考古学 下巻」』 pp.657~663
- 元興寺仏教民俗資料研究所編 1972 「六波羅寺民俗資料緊急調査報告書」
- 熊谷公男 2000 「養老四年の蝦夷の反乱と多賀城の創建」「國立歴史民俗博物館研究報告」84 pp.61~89
- 黒崎直 1976 「蓋串考」「古代研究」10(元興寺仏教民俗資料研究所) pp.23~37
- 狭川真一 2002 「五輪塔の成立とその背景—出現期資料の分類を中心とした予察—」「元興寺文化財研究所研究報告2001」 pp.147~163
- 磐田信一 2006 「安倍清明 陰陽師たちの平安時代」(吉川弘文館 歴史文化ライブラリー-215)
- 進藤秋輝 2010 「古代東北統治の拠点 多賀城」(新泉社、シリーズ「遺跡を学ぶ」66)
- 鈴木孝行 2010 「多賀城方格地割の調査」「考古学ジャーナル」第604号 pp.14~18(ニューサイエンス社)
- 鈴木拓也 1998 「古代東北の支配構造」(吉川弘文館)
- 鈴木拓也 2008 「戦争の日本史3 蝦夷と東北戦争」(吉川弘文館)
- 鈴木清民 2004 「古代北朝の律令の祭祀と集落拠点」「越後佐渡の古代ロマン—行き交う人々の姿を求めて—」(新潟県立歴史博物館) pp.92~93
- 高倉敏明 1991 「第二章13.山王道跡」「多賀城市史 第4巻 考古資料」 pp.126~223
- 高島英之 2005 「関東地方集落出土人面墨書き土器の再検討」吉村武彦編『律令制国家と古代社会』 pp.473~496
- 高野芳宏・菅原弘樹 1997 「第六章 奈良・平安時代 第五節 古代都市多賀城」「多賀城市史 第1巻 原始・古代・中世』 pp.335~367
- 巽淳一郎 1993 「都城における墨書き人面土器祭祀」「月刊文化財」第363号 pp.30~35
- 千葉秀孝 1995 「多賀城跡城外の道路と方格地割」「古代文化」第47巻第4号 pp.45~54
- 千葉秀孝 2009 「桓武朝期の多賀城」(山川出版社) pp.95~96
- 中村英重 1999 「古代祭祀論」(吉川弘文館)
- 並木和子 1986 「平安時代の祈雨奉幣」二十二社研究会編『平安時代の神社と祭祀』(国書刊行会) pp.111~175
- 奈良国立文化財研究所 1985 「木器集成図録 近畿古代編」(奈良国立文化財研究所史料第27冊)
- 新野吉也 1989 「古代東北の兵乱」(吉川弘文館)
- 西宮秀紀 1986 「律令国家の(祭祀)構造とその歴史的特質—宗教的イデオロギー装置の分析—」「日本史研究」283 pp.32~57
- 西宮秀紀 2006 「神祇祭祀」「列島の古代史 ひと・もの・こと 7 信仰と世界観」 pp.11~49
- 野口剛 1991 「御贋物について」「延喜式研究」第5号 pp.92~124
- 早川康志 2008 「人面墨書き土器の「人面」に関する一考察」「駿台史学」第133号 pp.21~42
- 肥後和雄 1938 「日本発見の泥塔について」「考古学」第9巻第4号 pp.200~219
- 日野一郎 1938 「我が國に於ける小塔供養の推移」「史觀」17(早稲田大学文学部) pp.69~95
- 平川南 1981 「一九八〇年出土の木簡 宮城・多賀城跡」「木簡研究」第3号(木簡学会) pp.38~41
- 平川南 1999 「古代地方都市論 多賀城とその周辺」「國立歴史民俗博物館研究報告」78 pp.1~29
- 平川南 2000 「第三章 四、古代の役所と墨書き土器 3. 墓書き土器「親音寺」—多賀城市山王道跡」

- 『墨書き土器の研究』(吉川弘文館) pp.182～194
- 平川南 2006 「道祖神信仰の源流—古代の道の祭祀と陽物形木製品から—」『国立歴史民俗博物館研究報告』133 pp.317～350
- 福岡市教育委員会 2005 「九州大学総合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 元岡・桑原遺跡群4—第12, 15, 24次調査の報告—」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第860集)
- 福永光司 1989 「道教における「龜」と「章」—『延喜式』の祭祀と「祝詞」に寄せて—」福永光司編 東アジア基層文化研究会『道教と東アジア—中国・朝鮮・日本』(人文書院) pp.19～36
- 増尾伸一郎 1996 「日本古代の呪符木簡、墨書き土器と疑偽經典—『佛說七千佛符經』もしくは『佛說益算經』の受容—」『東洋の思想と宗教』第13号(早稲田大学東洋哲学会) pp.78～104
- 増尾伸一郎 2003 「都城の鎮祭と<疫神>祭儀の展開」環境と心性の文化史 下 環境と心性の葛藤(勉誠出版) pp.316～341
- 三橋建 1984 「大祓研究序説—養老の「神祇令」を通路として」『神道史論叢』(国書刊行会) pp.291～323
- 三橋正 2002 「ハラエの儀礼—大祓と王權—」『岩波講座 天皇と王權を考える 第5巻 王權と儀礼』(岩波書店) pp.69～96
- 宮城県教育委員会(吉野武) 1996c 「第1章 遺物5. 文字史料の性格」「山王遺跡IV—多賀前地区考察編一」(宮城県文化財調査報告書第171集) pp.61～91
- 宮城県教育委員会(菅原弘樹) 1996b 「第1章 遺物6. 祭祀関係遺物 (1) 祭祀遺物の出土状況、(2) 祭祀具の特徴、(3) 多賀城周辺における祭祀」「山王遺跡IV—多賀前地区考察編一」(宮城県文化財調査報告書第171集) pp.92～99
- 宮城県教育委員会(菅原弘樹) 1996c 「第2章 遺構1. 道路と方格地割」「山王遺跡IV—多賀前地区考察編一」(宮城県文化財調査報告書第171集) pp.100～111
- 宮城県教育委員会(佐藤則之) 1996d 「第2章 遺構3. 土器埋設遺構について」「山王遺跡IV—多賀前地区考察編一」(宮城県文化財調査報告書第171集) pp.136～141
- 宮城県教育委員会(吉野武) 2003 「市川橋遺跡」(宮城県文化財調査報告書第193集)
- 宮城県教育委員会 2009 (柳澤和明・農村幸宏)『市川橋遺跡の調査 伏石・八幡地区一帯道「泉一塙金線」関連調査報告書Ⅷ—』(宮城県文化財調査報告書第218集)
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1982 「多賀城跡 政府跡 本文編」
- 宮城県多賀城跡調査研究所(丹羽茂) 1995 「Ⅲ. 現状変更に伴う調査」「宮城県多賀城跡調査研究所年報1994 多賀城跡」 pp.55～110
- 宮城県多賀城跡調査研究所(古川一明) 2007 「Ⅳ. 多賀城跡の11世紀～12世紀の土器について」「宮城県多賀城跡調査研究所年報2006 多賀城跡」 pp.52～61
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2008a 「Ⅱ. 第79次調査」「宮城県多賀城跡調査研究所年報2007 多賀城跡」 pp.2～51
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2008b 「Ⅲ. 第78次調査の漆紙文書」「宮城県多賀城跡調査研究所年報2007 多賀城跡」 pp.52～61
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2010 「多賀城跡 政府跡 補遺編」
- 三宅和朗 1990 「諸国大祓考」庶流道編「古代王權と祭儀」(吉川弘文館) pp.257～268
- 三宅和朗 1995 「日本古代の「名山大川」祭祀」「古代国家の神祇と祭祀」(吉川弘文館) pp.14～61
- 村本志伸 2005 「東北地方の人面墨書き土器—その分布と出現の背景—」「東北藝術工科大学紀要」12 pp.78～90
- 森郁夫 1998a 「造営工事における地鎮・鎮壇供養」「日本古代寺院造営の研究」 pp.291～336 (法政大学出版社)
- 森郁夫 1998b 「地を鎮めるまつり」金子裕之編「日本の信仰遺跡」(奈良国立文化財研究所学報第57集) pp.259～280
- 柳澤和明 1996 「長岡京期の多賀城—桓武朝の東北遠征—」「考古学ジャーナル」399(特集・長岡京研究I—八世紀末の律令国家像を求めて) pp.25～29
- 柳澤和明 2002 「籠城期の多賀城」「古代文化」54-11 pp.10～18
- 柳澤和明 2010 「多賀城市山王・市川橋遺跡における住社式～栗園式期集落跡の様相」「宮城考古学」第12号 pp.59～85
- 山里純一 2005 「呪符の機能」平川南・沖森卓也・柴原永遠男・山中章編「文字と古代日本4 神仏と文字」(吉川弘文館) pp.53～77
- 吉田一彦 2006 「民衆の古代史—『日本書紀』に見るもう一つの古代」(風媒社)
- 吉田恵二 2007 「日本古代の儀礼と祭祀」文部科学省21世紀COEプログラム 国學院大學「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成研究報告Ⅰ」 pp.60～74
- 吉留秀敏 2000 「1999年出土の木簡 福岡・元岡遺跡群」「木簡研究」第22号 pp.220～221

宮城県のタナバタウマ —体験教室を通してタナバタウマの製作技術を記録し伝承する—

及川 宏幸(東北歴史博物館)

-
1. はじめに
 2. タナバタウマとは
 3. タナバタウマの作り方
 4. おわりに
-

1. はじめに

本稿は、当館教育普及事業の一つである、くらしのわざ体験教室「タナバタウマを作ろう」の5回分にあたるレジュメを整理する形で掲載したものである。この講座は、宮城県内各地に、かつてみられたタナバタウマについて紹介しつつ、実際にタナバタウマを作ってみようという趣旨で行われているものである。平成14年から平成22年まで、合計5回実施した(註1)。この講座を実施するにあたり、担当者のコンセプトとして、以下の形で講座を数年継続した。
①年毎に異なる地区的タナバタウマ製作を行う。
②伝承者に事前に調査を行い、さらに実際に製作してもらいうながら、その製作過程の映像を記録する。
③合わせて撮影に平行して製作していただいた実物資料の、寄贈による収集保管に努める。
④記録した映像を元に、製作工程を追体験する形で作り方の図を作成する。
⑤これらを元に、実物より小さめ(飾りやすい形に配慮)に設定した製作体験用のタナバタウマ作り講座に望む、であった。

今回は、その成果としてのレジュメをまとめ、講座で製作したタナバタウマの作り方を公開する目的で、執筆したものである。

タナバタウマを一例にして今日、各地に伝承されてきた生活技術の数々が、技術保持者の急逝により、急速な勢いで消滅に向かおうとしている。その勢いに押し流されようとながら、いまかろうじて残ってい

る一つ一つの製作工程を記録保存すべく、そして逆に一般の市民への普及という形で残し、広まるきっかけになればと願いながら、行っているものである。

2. タナバタウマとは

タナバタウマは旧暦の7月6日(新暦の8月6日前後)に県内各地で家毎に作られるものである。具体的には菰草か麦ワラ又は稻ワラで、二頭もしくは飼い馬分のワラ馬を作った後、七夕の竹飾りの下に繋いだり、母屋や馬小屋の屋根などに乗せるというものだ。名称は一般的に「タナバタウマ(七夕馬)」と言うが、県北の栗原市栗駒町文字では「ムカエウマッコ(迎え馬こ)」とも言うため(小野寺1971)、盆に来る雲を迎える馬とも思われる(及川2005)。かつてこの日は「墓掃除の日」「ナノカビ」と称し盆の準備を始める日でもあった。

また県南の亘理町逢隈田沢では、この馬にお田の神が乗って田巡りをするとも言う(三崎1971)。残念ながら現在、七夕馬を作つて飾る風習を見ることは難しくなってしまった。

3. タナバタウマの作り方

本稿では、県内のタナバタウマの事例及び内容の比較、分布等まで掲載したかったが、紙面の関係で次稿以降に譲り、ここではタナバタウマの製作の仕

方にしほり、写真やフリーハンドの図をもとに、製作工程を列举する形で、わかりやすく紹介することに努めた。

また、作成図中の文体については、レジメ掲載時の「ですます調」「である調」混同のまま掲載している。

なお平成19年に、「七夕馬」技術伝承の現状というテーマで、当館の体験教室「タナバタウマ」活動の紹介を、服部比呂美氏より紹介していただいた(服部 2007)。その際に服部氏は、民俗技術の継承活動における今後の博物館活動の、役割の重要さについて指摘されていた。本稿も民俗技術継承の一助となれば幸いである。(註2)

村田町足立地区 佐山家のタナバタウマ

1) 説明

今回作るのは村田町足立地区の佐山彦治家に伝わるタナバタウマです。佐山家では「サクガミサマ(作神様)」と呼びます。サクガミサマは上から「サク(作)」を見るのだといわれています。作る日は8月6日の午後。小麦ワラで二頭作った後、一本の縄で鼻緒を繋ぎます。翌朝、馬小屋の棟の中央に向かい合わせに乗せ、一年間そのままにされます。平成21年までこの行事は行われていきました。(佐々田弥生 2010)

●実物資料の写真



村田町歴史みらい館所蔵のサクガミサマ
横長 80cm×高62cm×奥行50cm

2) タナバタウマの作り方

この講座では、彦治さんの作ったものをもとに、ミニサイズで模作したものを皆さんと一緒に作ってみることにしましょう。材料は稻ワラを用います。※講座では実物の半分程度の大きさで作ります。※なお以下の方々にもご協力いただきました。

石黒伸一朗氏(創作協力)、佐々田弥生氏(調査情報提供)

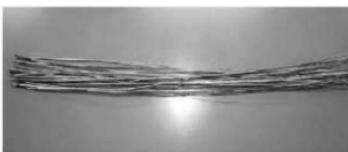
●準備作業

- ・イナワラを140本ほど用意する。
- ・このイナワラは手でしごいて、ワラくずを事前に取り除いておく。
- ・次に、水につけてひたして柔らかくしておく。
- ・結びに使うワラは湿らせてから、木槌などでたたき柔らかくしておく。

以上の準備が済んだら、以下の順番に従って作成していきましょう。

●頭部分

- ①ワラ25本をそろえる。



- ②両手でワラをつかみ、ピンと張りながら中央部をよじる。



③どんどんよじっていく。



ワラ1本で2回ほどまわし結び止める。



④円形を形作る。



⑤中央部で交差させて縄状にする。



●あご部分

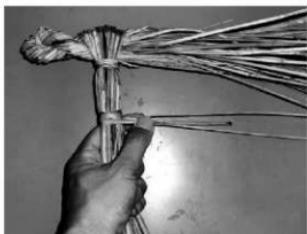
⑥ワラ25本をそろえ、中央部で折り曲げる。



⑦先に作った頭部を、折り曲げた部分にはさむ。

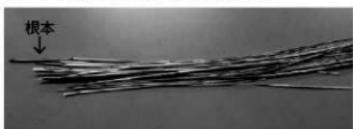


⑧柔らかくしたワラ1本で2カ所を結び止める。



●胴体部分

⑨ワラの根本をそろえずに30本束ねる。



⑩ワラの6分の4ほどの中中央部を折り曲げる。



⑪それをウマのアゴ部分に巻き付ける。



⑫2カ所結ぶ。巻き付けた下部分を少し切りそろえる。



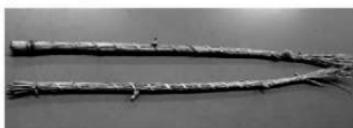
●足部分

⑬柔らかくしたワラ3本の、1本ずつをそれぞれ端部分をつないで長い巻きワラを作る。

⑭20本の湿らせたワラを束ねた後、根本から巻きワラを結んだあと、ラセン状に結びつけていく。



⑮それを2本作る。



⑯ボサボサの先を切りそろえる。このとき2本の長さが同じようにする。



⑯1本を真ん中で折り曲げる。



⑰胴体に前足として次のように一本のワラで結び付けていく。



⑯縛って結びつける。後足も同じように結ぶ。



●完成形



横長65cm×高40cm×奥行6cm

**栗原市栗駒 文字地区
佐藤家のタナバタウマ**

1) 説明

今回作るのは栗原市栗駒文字地区の、佐藤正夫家に伝わるタナバタウマです。佐藤家ではこのウマを「ムカエウマッコ(迎え馬)」と呼びました。作るのは盆に近い6日の日で、小麦ワラで馬を三頭作り、そのうちの一頭に入形(先祖様)を乗せて、仏壇の部屋前庭の板屏風上に、東(墓地方向)向きでまたがせました。このタナバタウマは、お盆の仏さまを迎えるために行われるものなのです。16日の送り盆の際は、七夕や祭壇の竹飾りと一緒に川に流しました。この行事は昭和20年頃以降、行なわれなくなりました。

〔及川2005〕

話者 佐藤正夫さん(明治44年生まれ)

●実物資料の写真



横長55cm×高48cm×奥行11cm

2) タナバタウマの作り方

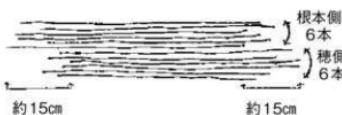
●準備作業

- ・作る前に、25本の縛り用稻ワラは木槌などで叩き、柔らかくしたあと霧吹きなどで湿らせる。
- ・事前に小麦ワラ88本(馬用72本、人形用16本)を用意し、霧吹きなどで湿らせておく。

馬作り

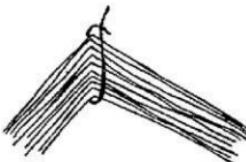
●頭部分

①最初に小麦ワラを6本ずつ取り上げた後、交互に束ねる。端はわざとそろえずにバラバラにしておく。コツは、穂の付いているワラを選ぶこと。

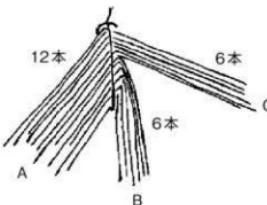


②最初に頭部作り。

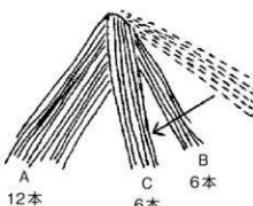
上記①の中央部を稲ワラで縛った後に、折り曲げる。



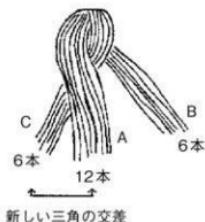
③図のBCのように6本ずつ分ける。



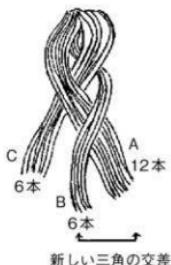
④最初にCをAとBの中間に動かす。



⑤2回目にAをCとBの中間に動かして、新しい三角の交差を作る。



⑥3回目にBをCとAの中間に動かして新しい三角の交差を作る。

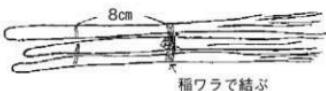


⑦4回目BCA (BとCが新しい三角交差)、5回目BAC (AとCが新しい三角交差)というように、次々に新しい三角の交差を計11回、ゆるまないように縛り込みながら作っていく。

⑧⑨の作業の最後に、端を稻ワラで縛って出来た以下の絵のようなものを、計3個作る。

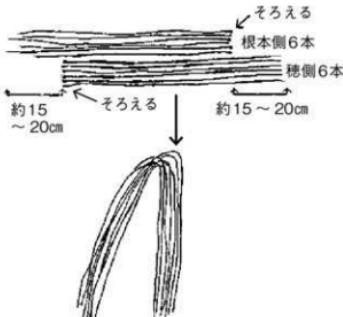


⑨⑩で作った3個を上下に重ねあわせ、頭部とする。

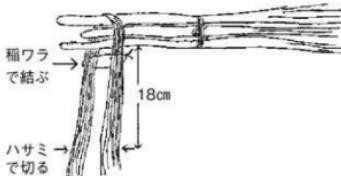


●足部分

⑪次に前脚は、小麦ワラを6本ずつ取り上げた後、ぎらして重ね、中央から二つに折り曲げる。



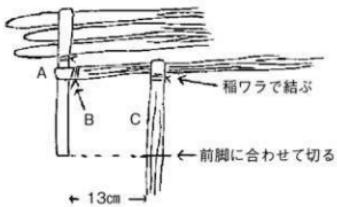
⑫⑬で重ね合わせた結び目を隠すように⑭の前脚部分をかぶせる。かぶせた後に、稻ワラで結ぶ。



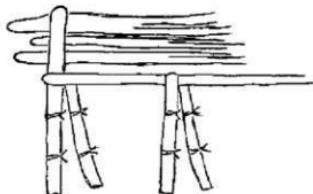
●胴体部分

⑫6本ずつの稻ワラ計12本を⑪のように重ねて2つ折りにする。

⑬⑫で作ったものを⑭のA位置に付けて、Bのように稻ワラで結ぶ。次に⑭のようにして2つ折りに作ったCを、馬の後脚として付ける。



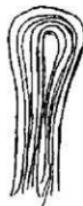
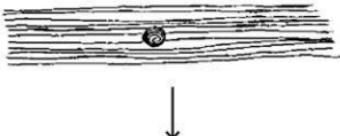
⑭前脚と後脚をそれぞれ2ヶ所、計8ヶ所を稻ワラで結ぶと馬は完成。



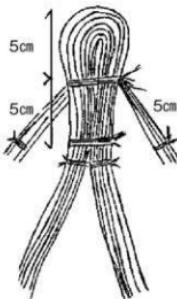
人形作り

⑮小麦ワラを16本、机上に平らに並べる。

ちり紙を丸めたものを、机上に並べた小麦ワラの中央に置いた後、その丸めたちり紙を包むように小麦ワラを2つに折り曲げる。

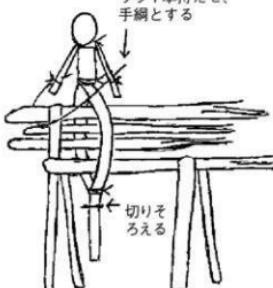


⑯首部を稻ワラで結んだ後に、左右腕部の各4本を取り分けて稻ワラで結ぶ。その後腰部と脚部を稻ワラでしばる。



⑰⑯の人形を馬に乗せてから両足を稻ワラで結び、切りそろえる。

ワラ1本持たせ、手綱とする



●完成形(栗原市栗駒文字)



横長 50cm × 高 34cm × 奥行 6cm

加美町宮崎 北川内大平
橋本家のタナバタウマ

1) 説明

今回は、宮城県宮崎町北川内大平の橋本徳(明治44年生まれ)家にかつて伝わっていたタナバタウマをモデルにし、縮小サイズで製作します。橋本家は、講座時には移転先が不明で連絡がとれませんでした。そこでここに載せたタナバタウマの作り方は、学芸員が当館収蔵資料をもとに想定し、復元したものです。

●実物資料の写真



横長 43cm × 高 31cm × 奥行 10cm

2) タナバタウマの作り方

●準備作業

・作る前に縛り用稻ワラは、木槌などで叩き、柔ら

かくしたあと霧吹きなどで湿らせる。

- ・本体を作る稻ワラも、事前に霧吹きなどで湿らせておく。

●頭部分

- ①ワラを15本ほどまとめて取り、よじる。



- ②よじりながら、真中より折り曲げる。



- ③馬の鼻が出来上がる。

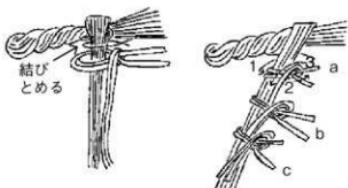


●前足部分

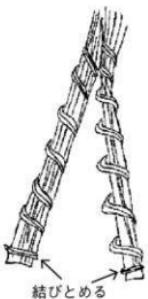
- ④ワラを15～20本ほどまとめて中央で折り、馬の鼻にかけて前脚とする。ワラ1本で首を結ぶ。



⑤2本のワラを首に巻き、それをabcの3ヶ所に施す。

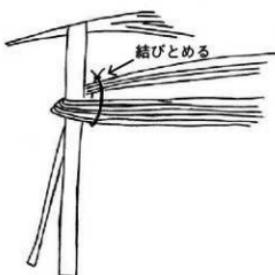


⑥abcのワラ計6本を3本ずつ2つに分け、それぞれを前脚に8回程度巻く。

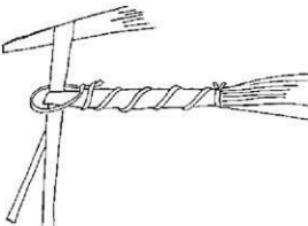


●胴体部分

⑦15～20本ほどワラをまとめて中央で折り、馬の胴体とする。前脚の所を結ぶ。

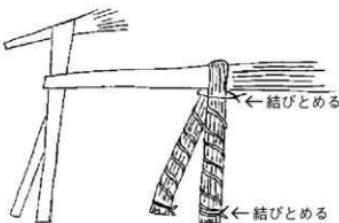


⑧別のワラ2本で胴体を5.6回程度結び、尻尾の所で留める。



●後足部分

⑨15～20本ほどワラをまとめて中央で折り、馬の胴体にかけて後脚とする。ワラ6本を3本ずつ2つに分け、それを8回程度後脚に巻く。



⑩最後にたてがみと、尻尾の長さを下写真のように切って完成。

●完成形



横長35cm×高35cm×奥行5cm

仙台市若林区荒浜地区 渡辺家のタナバタウマ

1) 説明

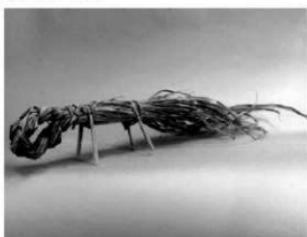
今回作るのは仙台市若林区荒浜地区の、渡辺勘治家に伝わるタナバタウマです。渡辺家では旧暦7月6日の午後、当主がコモ草で、タナバタウマを二頭作ります。二頭を1本の縄で繋いだ後に、馬屋の屋根に乗せました。タナバタウマがこれに乗っていくといわれていたからです(三崎1971)。馬を制わなくなつた昭和40年代始め以降、この行事は廃れてしまいました。

話者 渡辺勘治さん(大正7年生まれ)

※今回は、仙台市若林区荒浜地区的渡辺勘治家に、昭和40年初め頃まで行われていたタナバタウマをモデルにし、小さめのサイズで製作します。

※渡辺家のタナバタウマはコモクサ(夏に沼地に生育し、一般的に盆棚に敷く盆ゴザの素材)を用います。当教室では素材の調達が時期的に難しく、また作成サイズの関係から稻ワラを用いています。大きさは実物の3分の2ほどのサイズで製作します。

●実物資料の写真



横長 90cm × 高 15cm × 奥行 15cm

2) タナバタウマの作り方

●準備作業

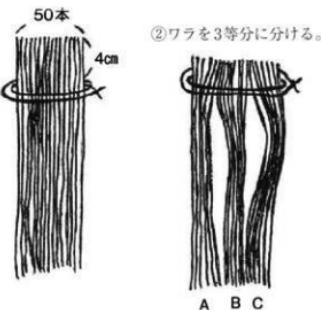
・作る前に縛り用4本、前脚用10本、後脚用10本、胴体用50本の稻ワラを用意し、霧吹きで湿らせておく。さらに手で稻ワラの余計な皮や枝を取り除く。

いておく。

・用意する物は定規1本とハサミ1つ。

●頭、胴体部分

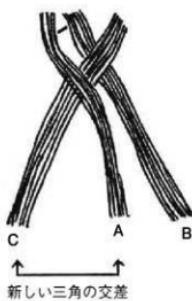
①最初に稻ワラを50本取り上げた後、ワラの根本端から4cmの所を1本のワラでしっかりと縛る。



③CをAとBの間に入れて編み込んでいく。(1回目)
※内側によじり込みながら編み込むときれいに見えます。



④次に A を C と B の間に入れて編み込む。(2回目)



⑤3回目に B を C と A の中に動かして新しい三角の交差を作る。

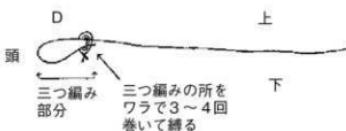


⑥4回目 BCA (B と C が新しい三角交差)

5回目 BAC (A と C が新しい三角交差) というよう、次々に新しい三角の交差に残りの1本を編み込んでいくように計14回、内側にじり込みながら縛り込む。
※三つ編みの要領で編み込む。



⑦14回、三つ編みに編み込んだワラを円形に折り曲げて、胴体に結びつける。



※この際に注意することは、下図のように模様が見える方を外側にして、円形に曲げて結ぶこと。



Dの真上から見た模様

⑧ワラで縛った所から、頭を下へ、内側に少し折り曲げる。

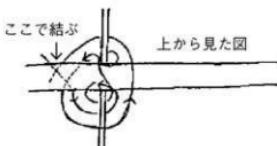


●前脚部分

⑨縛ったあたりの胴体を2つに分けて10本の糸ワラを側面から差し込み、前脚とする。

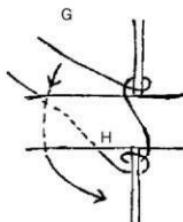


⑩前脚は、下図のようにワラ1本で胴体に結わえ付ける。

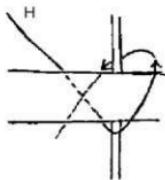


詳しくは下図参照のこと。

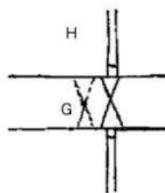
⑪の1



⑪の2

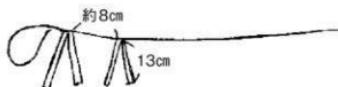


⑪の3

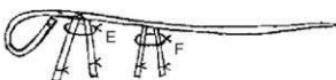


●後脚部分

⑫⑬⑭のように、後脚を胴体に付ける。



⑯ E、F の所に、ワラを1本ずつ足を縛り、直立出来るようにする。全般的に飛び出たワラをハサミで切り取り、綺麗に仕上げて完成。

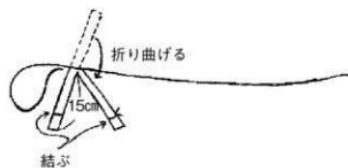


●完成形



横長 65cm × 高 16cm × 奥行 6cm

⑮前脚を片足15cmの所で切った後、内側に足を折り曲げて2ヶ所、1本ずつのワラで結ぶ。



**大和町吉田升沢地区
早坂家のタナバタウマ**

1) 説明

今回作るのは大和町吉田升沢地区の、早坂喜一家に伝わるタナバタウマです。早坂喜一家では、旧暦7月7日に、男子が稻ワラで2頭ウマを作ります。大きい方が親ウマで小さい方が子ウマです。2頭を1本の縄で繋ぎその後、茅葺き屋根の破風に跨がせ立てます。この時ウマは南面するように置きました。ウマはそれ以降、屋根から下ろされることなく、一年間上げられたままでした。昭和23年の年、茅葺きの母屋を建て替えし家を新しくして以降、この行事は行われなくなりました。

話者 早坂喜一さん（大正13年生まれ）（及川2003）

2) タナバタウマの作り方

●実物資料の写真



親ウマ（上） 横長88cm×高35cm×奥21cm
子ウマ（下） 横長83cm×高28.5cm×奥10cm

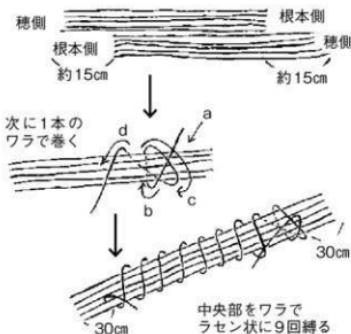
●準備作業

- ・作る前に縛る縄は木植などで叩き、柔らかくする。
それ以外のワラは、手などで余計な皮や枝を取り除きしごいておく。
- ・事前にワラ51本、叩いたワラ9本（結び用）の計60本を用意し、霧吹きなどで湿らせておく。

●頭部分

- ①最初に頭部作り。

ワラを5本ずつ取り上げた後、ざらして束ねる。



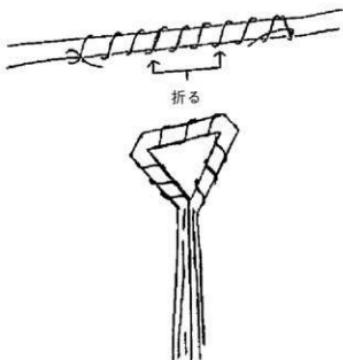
●足部分

- ②次に足作り。ワラ8本ずつ束ねてそろえた後、根本から穂に向い1本のワラで8~10回程巻き、結ぶ。

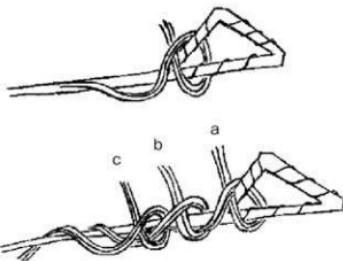


●頭部分、胴体部分

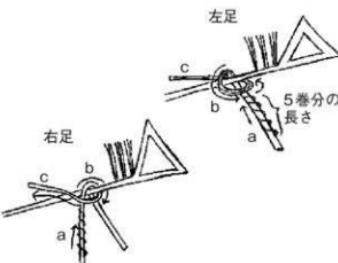
③①で作った1本のワラ束の中央部2ヶ所を折り曲げて頭部を形作る。



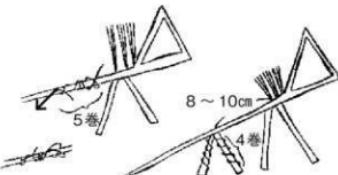
④たてがみは、3本のワラを首に巻き、それをそれぞれa、b、c 3ヶ所に施す。



⑤前脚は、図のように左足から右足の順番で付けていく。

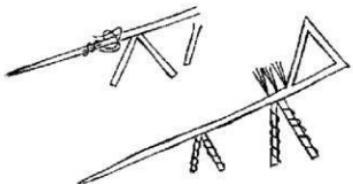


⑥1本のワラで胴体を縛り、止める。



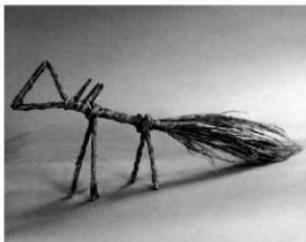
⑦と同様に、後ろ脚を付ける。この時尻尾が地面に付くように後ろ脚を短くする。

- ⑦1本のワラで尻尾を3回巻き、縛り止める。又は普通にワラを3巻して結ぶ。



最後にたてがみを4cm位に切りそろえ、尻尾が地面に付くように後ろ脚を短く切って完成。

●完成形



横長 70cm×高27cm×奥行7cm

4. おわりに

当館における、タナバタウマの講座は平成14年から始まった。当時、博物館での教育普及講座設定の際、当館の民俗分野において「くらしのわざ」という体験講座を開設することになった。その後、具体的にタナバタウマの製作教室と決まり、私がその担当となったのが講座を始めるきっかけである。平成14年講座発足当時は、担当としてタナバタウマの製作者情報を全く掴んでいない状況であった。そこで平成14年に限り、当館収蔵資料群の中の、東北歴史資料館資料である(註3)タナバタウマのうちの1つ、加美町宮崎北川内大平地区の橋本徳家のものをモデルにし、私が製作工程を想定し製作することにした。直接製作工程を調査しなかった理由は、住宅地図に橋本家の記載が見あたらず、伝承者からの情報収集は不可能であったからである。そこで、次年度以降の平成15年には、大和町吉田升沢地区的早坂喜一家、平成16年には栗原市栗駒町文字の佐藤正夫・正司家、平成17年には仙台市若林区荒浜地区的渡辺勘治家の各タナバタウマの作成過程を調査し、講座に反映させることとした。平成22年には、村田町歴史みらい館石黒伸一朗氏撮影の、村田町足立地区佐山彦治家のタナバタウマ製作過程映像を参考にしながら(註4)、講座に反映させた。

タナバタウマとは異なるが、民俗技術の継承活動に関連する物として、平成18年度には当館にて小正月の「マユダマ」作り体験も行った。石巻市北上町橋浦の今野明家で、昭和41年まで行われ、小正月に飾られていたもので(註5)、これに関しては調査後、講座レジュメに作成過程を詳しく載せ、体験講座にて受講者とともに製作し、合わせて当館の古民家で設置体験も行った。

最後に平成22年の講座に関して、仙台市歴史民俗資料館学芸員佐々田弥生氏には、七夕馬の所在情報、並びに資料に関する情報のご教示をいただいた。また村田町歴史みらい館の石黒伸一朗氏には、現地情報及び製作者とのやりとり等ご尽力をいただいた。

また、栗原市栗駒町文字の佐藤正夫・正司さん、仙台市若林区荒浜地区的渡辺勘治さん、大和町吉田



今野明家のマユダマ

升沢地区的早坂喜一家さん、石巻市北上町の今野明さん方には、資料の作成・寄贈、並びに調査協力等、多方面にわたって協力をいただいた。厚く感謝申し上げる。

【註】

- (1) 講座は平成14、15、16、17、22年の合計5回実施された。講座中断については、講師である私の、博物館から高等学校への転勤に伴う講座休止からくるものである。
- (2) 見回すと各地の博物館等では、民俗技術の様々な継承活動を行ってきた所があるようだ。最近知った一つの好例としては、新潟県の豊栄市博物館があげられよう。この館では、ワラ製館蔵資料の製作工程を調査し、作成工程を詳しい図で記録化した冊子「よさかのワラ細工」(1993年発行)を発行している。この冊子を見ると、様々なワラ細工を製作する際の手ほどきが示されており、技術伝承の点で重要な記録といえる。
- (3) 当館は、平成11年に発足した新施設であったが、昭和49年から平成10年まで存在した東北歴史資料館の資料群をそのまま継承し発足した施設である。
- (4) 佐山彦治氏(大正8年生まれ)がご高齢のため、平成22年にはすでにタナバタウマを作るのをやめておられた。石黒伸一朗氏が、前年に佐山氏のタナバタウマ作成過程映像をビデオ収録していたため、その映像を借用し、製作工程を再現したものである。
- (5) 博物館の「くらしのわざ」体験教室の一環として企画した。今野明家のマユダマは、長さ60cm、径

5cmの菴束4本に、1本に3つずつ計12個の餅を付けたもの。小正月時に、家のハットシと呼ぶ長押中央部に、4本並べて棒に掛けて飾ったとのことである。今野明家では名称は覚えがないとのことで、便宜的に名称はマユダマとした。しかし仙台市青葉区赤生木地区では、今野明家と同形態のもとのアワボとも呼ぶため、注意を要す必要がある。

〈参考・引用文献〉

- 小野寺正人 1971「栗原郡栗駒町文字下明神前」「陸前の年中行事」東北民俗の会編
佐々田弥生 2010「足立の七夕馬と祝い札」「村田地域史研究 第一号」村田地域史研究会
服部比呂美 2007「七夕馬」の技術伝承」「無形文化遺産研究報告第1号」独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所
三崎一夫 1971「亘理郡亘理町逢隈田沢」「仙台市深沼荒浜」「陸前の年中行事」東北民俗の会編
及川宏幸 2003「むらの一年」「升沢にくらす・集団移転に伴う民俗調査報告書」宮城県大和町教育委員会 東北民俗の会
2005「栗原郡栗駒町文字地区」「東北地方の信仰伝承・宮城県の年中行事」東北歴史博物館

東北歴史博物館研究紀要 12

発 行／平成23年3月25日

編集発行／東北歴史博物館
〒983-0862 宮城県多賀城市高崎一丁目22-1
TEL:022-368-0101

印 刷／今野印刷株式会社
〒984-0011 仙台市若林区六丁の目西町2-10
TEL:022-288-6123(代)
